

千年村プロジェクト
2016-2017年度
霞ヶ浦・筑波山周辺地域疾走調査報告書



早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース
環境造園領域 都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室
風景計画学研究グループ 霜田亮祐研究室

東京都市大学 工学部 建築学科 建築計画 福島加津也研究室

慶応義塾大学 環境情報学部 石川初研究室

ものづくり大学 建設学科 土居浩

京都大学 人文科学研究所 菊地暁

元永二郎

高橋真治

高橋大樹

2018年 3月

千年村プロジェクト
2016-2017年度
霞ヶ浦・筑波山周辺地域疾走調査報告書



早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース
環境造園領域 都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室
風景計画学研究グループ 霜田亮祐研究室

東京都市大学 工学部 建築学科 建築計画 福島加津也研究室

慶応義塾大学 環境情報学部 石川初研究室

ものづくり大学 建設学科 土居浩

京都大学 人文科学研究所 菊地暁

元永二郎

高橋真治

高橋大樹

2018年 3月

千年村プロジェクトについて

〈千年村〉とは、千年以上にわたり、度重なる自然的社会的災害・変化を乗り越えて、生産と生活が持続的に営まれてきた集落・地域のことをさす。

千年村プロジェクトは、全国の〈千年村〉の収集、調査、公開、顕彰、交流のためのプラットフォームとして構想された。2011年に発生した東日本大震災後に、優れた生存立地を発見しその特性を見出す必要性を感じたことがその発端である。関東と関西に研究拠点をもち、環境・地域経営・交通・集落構造という4つの要素を重要視し、それらに関する諸分野の研究者・実務者によって運営されている。また、この活動は、2014～2017年度科学研究費助成事業「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」に採択されている。

様々な圧力を受け、変容を受け入れつつも、長らく存続してきた歴史を持つ地域には、生産性や防災性、経済的交流の基盤などが構築され、持続可能な土地固有のシステムが育まれてきたと考えられる。山際の集落、その眼下に広がる水田、集落を護る鎮守の森、他所へ通じる峠道、異国へ向かう海原。日本における地域の多くにはこうした共通する特徴が具備されている。しかし、これらの特徴は突出した文化財的評価の対象というよりは、むしろ健全な国土を日常的にささえるものとして評価されるべきであろう。

千年村プロジェクトは、そのような地域に実際に赴き、環境・地域経営・交通・集落構造の各視点から、地域が持続してきた要因の分析を行なっている。そしてその地域が良好な生存条件を保っていると確認できた場合、その地域を〈千年村〉として認証する。認証によって、当該地域の持続要因を理解していただくとともに、これからの千年に向けた持続可能な地域づくりの支援を行うことを目標としている。

目次

第1章 基礎研究編	1
1-1. 『倭名類聚抄』記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見	
1-2. 「アイヌ語地名」からの千年村候補地の発見	
1-3. 「おもしろそうし」記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見	
1-4. 展望	
第2章 本報告書の目的	3
1-1. 本報告書の目的	
1-2. 調査の位置づけ	
第3章 2016年度霞ヶ浦周辺地域疾走調査の目的	5
3-1. 調査の概要	
3-2. 調査の目的	
第4章 2016年度霞ヶ浦周辺地域疾走調査 各村の報告	8
第5章 2016年度霞ヶ浦周辺地域疾走調査 考察	47
5-1. 茨城県霞ヶ浦西岸の段上居住群の特徴について（中谷）	
5-2. 陸封された漁村のゴージャスな民家（石川）	
5-3. 「先達」を尋ねる：行方市麻生の発見から、宮本常一の再読へ。（土居）	
5-4. 生産地を隠し持つか転用するか（霜田）	
5-5. 霞ヶ浦の環境要因から浮かび上がる集落環境・構造（高橋大樹）	
第6章 2017年度筑波山周辺地域疾走調査の目的	63
6-1. 調査の概要	
6-2. 調査の目的	
第7章 2017年度筑波山周辺地域疾走調査 各村の報告	66
第8章 2017年度筑波山周辺地域疾走調査 考察	87
8-1. 先行形態論による集落の特性分析 茨城県山崎・真家周辺を事例として（中谷）	
8-2. 来栖の山野草（石川）	
8-3. 大字から地域をみる（木下）	
8-4. 見た目でわかる千年村 「見た目」から集落の発生と変容を類推する（福島）	
8-5. 宗教と公共（土居）	
8-6. 東の千年村／西の千年村（菊地）	
第9章 付記	105

第1章 基礎研究編

1-1. 『和名類聚抄』記載地名の現在地比定による 千年村候補地の発見

千年村候補地をひろく全国から発見するために、平安期辞書『和名類聚抄』（註1）に記載される古代地名と、それらを現在地へと比定した既往成果を用い、空間的にプロットした。それらを千年前から現在までを空間的に接続する千年村候補地とした。

主要参考文献は『角川日本地名大辞典』（註2）である。ここには『和名類聚抄』記載地名の現在地比定に関する先行研究がまとめられている。その比定精度は、以下の7つに分類される。

1. 単一の大字に比定される
2. 複数の大字に比定される
3. 市域に比定される
4. 河川流域など複数の市域にまたがる範囲に比定される

5. 比定に関する説が異なる
6. 比定地は未詳とされる
7. 比定地に関する記述がない

本プロジェクトでは、以上のうち現在の行政区画・大字領域に比定されるものを抽出しプロットしている。その数は『和名類聚抄』記載郷名3986個のうち1977箇所である。その中でも、大字領域への比定数には地域差が見られる。また『和名類聚抄』製作時の古代国に該当しない北海道、青森県、沖縄県にはプロットがなされていない。

しかし、古文献記載地名の現在地比定地の可視化という手法は、『和名類聚抄』以外の文献にも展開でき、同文献では発見できなかった千年村候補地を発見することが可能である。次項以降、その展開事例として、北海道と沖縄の千年村候補地について述べる。

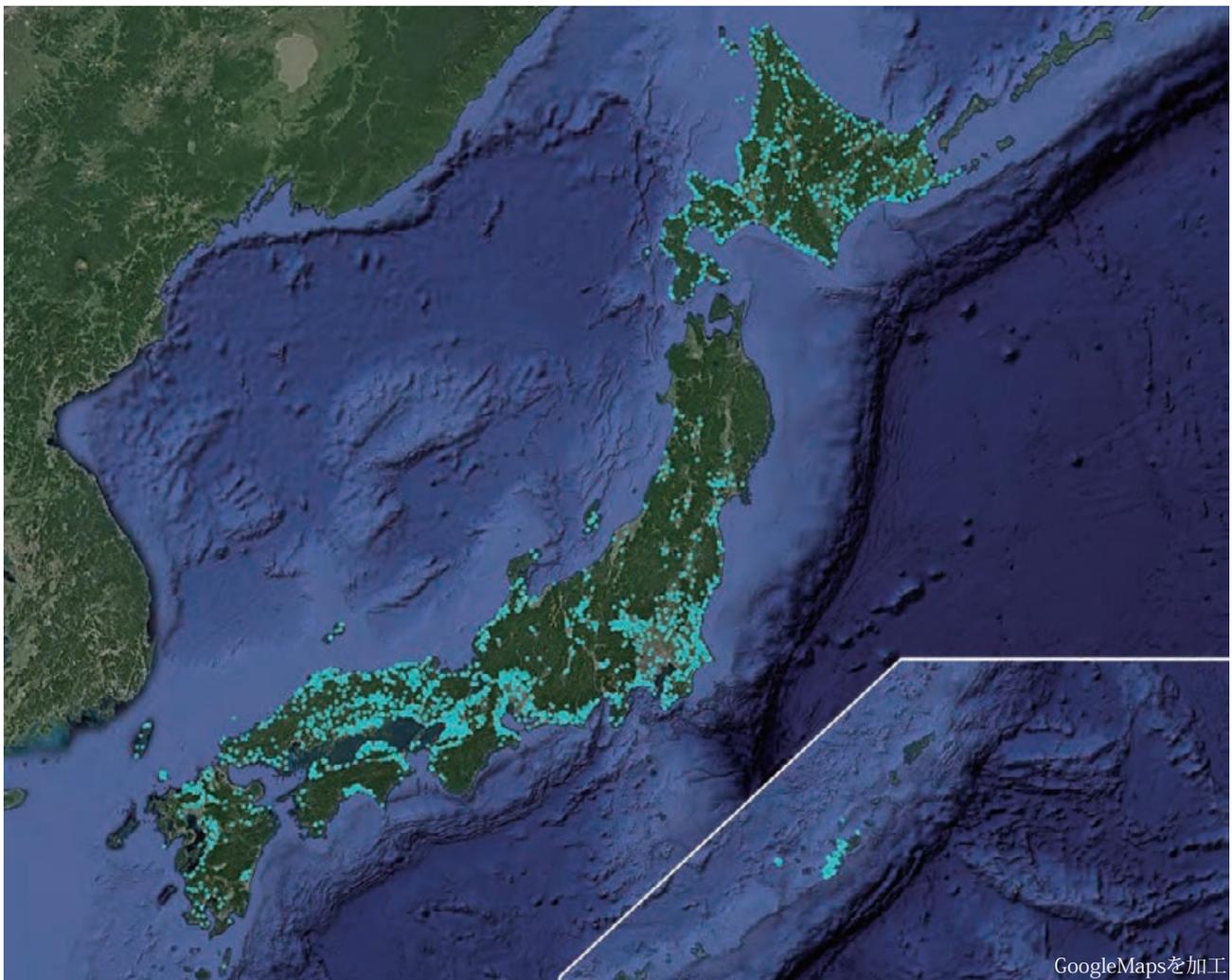


図1 千年村候補地のプロット（千年村候補地の可視化を第一としているため、プロットの範囲がその候補地の領域を示すものではない）

1-2. 「アイヌ語地名」からの千年村候補地の発見

『和名類聚抄』に記載のない北海道については、「アイヌ語地名」を用いて千年村候補地の発見を試みた。

13~17世紀頃まで栄えた北海道のアイヌ民族は、生活に利用する場に地理的及び環境的特質に沿った地名をつけていた。現北海道の地名の多くがそれらアイヌ語地名を基にされている。そこで、北海道環境生活部アイヌ政策推進室が公開している「アイヌ語地名リスト」（註3）を資料とし、千年村候補地の抽出を行なった。リストに存在する地名は以下の7つに分類できる。

1. 単一大字及び字
2. 複数大字
3. 市町域以上
4. 和名由来
5. 山・川などの環境表現名
6. 現在存在しない地名
7. その他

以上のうちから大字領域に該当する地名を抽出し、それを千年村候補地とした。その数は「アイヌ語地名リスト」記載地名1032個のうち620箇所である。ただし、「アイヌ語地名リスト」には記載のない、多くのアイヌ語地名が存在する。あくまでアイヌ語地名の立地傾向を把握するための目安となっている。

なお、北海道におけるプロットは千年という単位ではないが、「アイヌ語地名」を根拠にそれを可視化することで、新たな地域への研究の展開の足がかりとなった。

1-3. 「おもろさうし」記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見

北海道と同様に『和名類聚抄』に記載のない沖縄については、古琉球時代の歌謡集『おもろさうし』（註4）で確認できる地名と、それらを現在地へと比定した既往成果を用い、千年村候補地の発見を試みた。

『おもろさうし』は首里王府によって編纂さ

れた沖縄の祭式歌謡が収録された歌謡集である。それら祭式歌謡には、当時の地名が多く含まれており、16~17世紀の地名を知ることができる。

主要参考文献は、『角川日本地名大辞典』である。ここには沖縄県における『おもろさうし』に見られる地名の現在地比定に関する先行研究がまとめられている。その比定精度は以下の5つに分類される。

1. 字
2. 町・複数字
3. 比定に関する説が異なる
4. 比定に関する記述がない
5. その他

以上のうちから1.字にあたる地名を抽出し、それを千年村候補地とした。その数は『おもろさうし』記載地名228個のうち98箇所である。

なお、北海道と同様に沖縄のプロットは千年という単位ではないが、『おもろさうし』を根拠にそれを可視化することで新たな地域への研究の展開の足がかりとなった。

1-4. 展望

現在「千年村ウェブサイト」（註5）にて公開されているプロット情報（図1）がすべての千年村候補地を示すものではない。実際に、ウェブサイトでの公開以降、一般提供情報によって新たに多くの古代郷が現在地比定されている。このデータベースが呼び水となって、新たな資料や情報が蓄積され、より多くの千年村候補地が発見されることを期待している。

（文責：鈴木明世）

(1) 平安期文献『和名類聚抄』、源順著、931-938成立か。『和名類聚抄』は、古代律令国家が各地を国・郡・郷で管理していた時代の地名が記載されている。
(2) 『角川日本地名大辞典』は、日本全国の地名、その由来・沿革とその地の歴史を、都道府県ごとにまとめた辞書。全49巻、別冊2巻で、1978-1990年にかけて出版された。
(3) 1999年9月に北海道によって設置された「アイヌ語地名普及会議」によって、アイヌ語地名研究者である山田秀三の既往成果（主に『北海道の地名』北海道新聞社、1984年）を中心に既存の基礎的なアイヌ語地名解をまとめられた。2007年1月時点での地名に当てはめている。
URL: http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/new_timeilist.htm (2017/2/23 閲覧)
(4) 「オモロ」という琉球方言で伝承された祭式歌謡を編纂した歌謡集で沖縄最古の文献資料。尚清王の嘉靖10年（1531年）から尚豊王の天啓3年（1623年）にかけて首里王府によって編纂された。全22巻。収録数は1554首。
(5) 千年村プロジェクト URL: mille-vill.org

第2章 本報告書の目的

2-1. 本報告書の目的

本報告書は2016年7月16-17日にかけて行われた「霞ヶ浦周辺地域疾走調査」および、2017年5月27日-28日にかけて行われた「筑波山周辺地域疾走調査」において得られた知見および考察を報告することを目的としている。

2-2. 調査の位置づけ

本研究は今後の集落地域の存続のための評価手法の開発を目的としている。千年を超えて生産と生活が持続していると考えられる地域を千年村候補地とし、その持続要因に関する調査を行う。そしてその地域が良好な生存条件を保っていることを確認した場合には、その地域を〈千年村〉として認証する。〈千年村〉は日本の国土の土地利用と景観の基層をなしてきたと考えられ、これらの正当な評価手法が必要である。そのために以下の3つの段階を達成していく。

- (1) 平安期文献『倭名類聚抄』に記載された「郷」の比定地をベースとした全国の千年村候補地のデータベースの作成および公開
- (2) 千年村候補地を「環境」「地域経営」「交通」「集落構造」の視点から調査し、それらの関係および持続要因を解明
- (3) 各地域の存続に関する普遍的要因と歴史的要因を元にした〈千年村〉の認証基準と持続手法の開発

上記の実現のためには、より多くの千年村候補地を網羅的に調査することが必要であり、本報告書で報告する霞ヶ浦周辺地域疾走調査および筑波山周辺地域疾走調査はそのひとつとして位置づけられる。

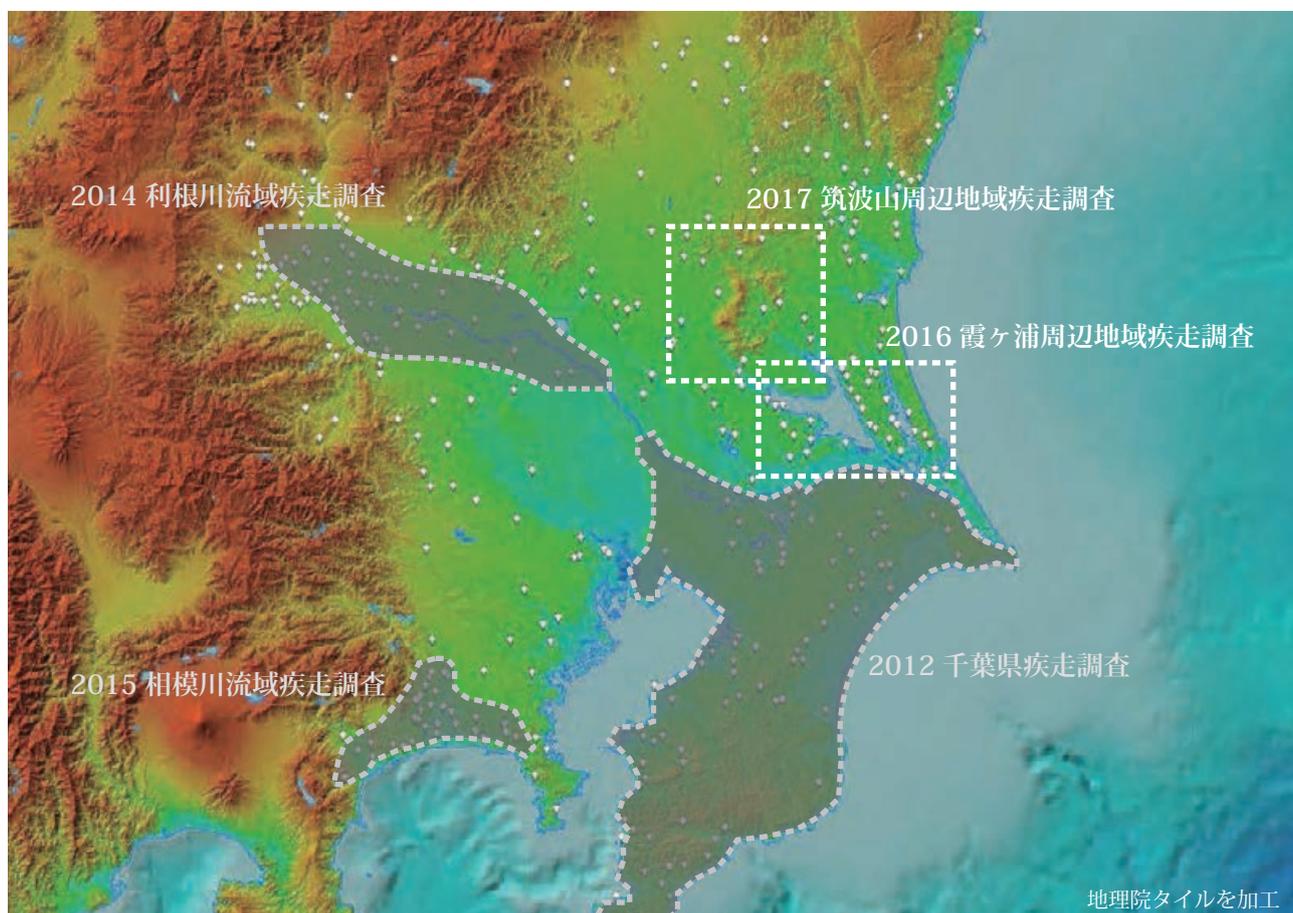


図 2-1 関東地方の千年村

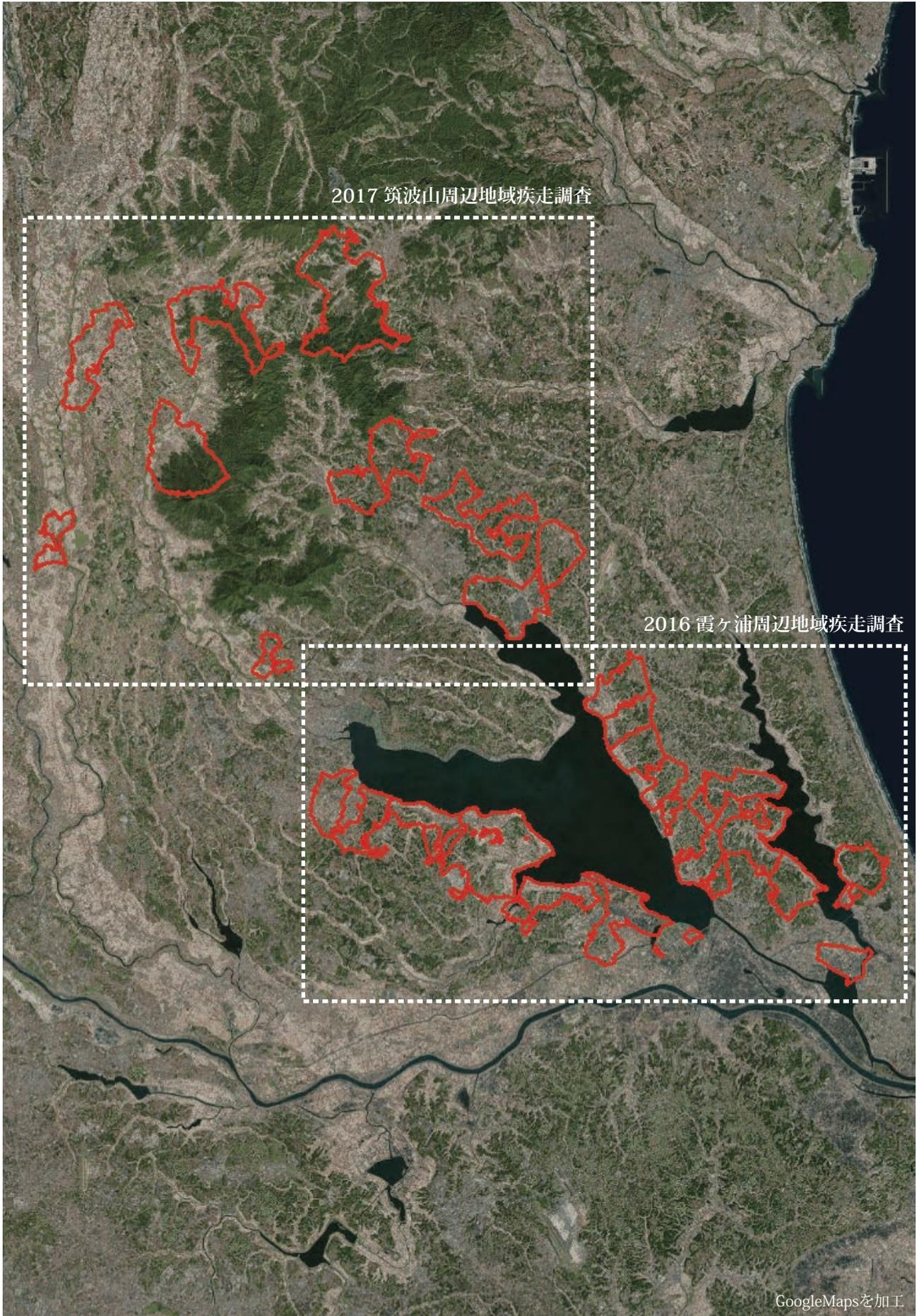


図 2-2 2016年度・2017年度調査対象地

第3章 2016年度霞ヶ浦周辺地域疾走調査の目的

3-1. 調査の概要

霞ヶ浦周辺地域疾走調査は2016年7月16-17日にかけて行われ、茨城県霞ヶ浦周辺地域に立地する千年村候補地計18箇所を悉皆的に調査した。

また本調査は2015年度文部科学省科学研究費助成基盤研究(B)「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」(26289224)の研究活動のひとつとして行ったものである。

3-2. 調査の目的

本調査の対象地とした霞ヶ浦周辺地域では湖岸部沿いおよび臨海部に千年村候補地が立地している(図3-1)。また、霞ヶ浦周辺地域はかつて海だったが、霞ヶ浦の潟湖化、利根川東遷、干拓と、現代にいたるまで自然および人為的に地形、地質の改変がなされてきた地域である。この地域の千年村候補地は生産および居住のシステムを転換することでこの劇的な環境の変化に適応し、現代まで続いてきたと考えられる。加えて、霞ヶ浦周辺地域は河川沿いではなく、湖岸沿いに千年村候補地が密集している。これらの特徴は、これまでの疾走調査対象地である千葉県(2012年度)、利根川流域(2014年度)、相模川流域(2015年度)では確認されない。したがって特に本調査においては下記(7),(8)の目的を設定した。

本調査の目的を以下に示す。

- (1) 当該千年村候補地の環境的特徴の把握
- (2) 当該千年村候補地の地域経営的特徴の把握
- (3) 当該千年村候補地の交通的特徴の把握
- (4) 当該千年村候補地の集落構造的特徴の把握
- (5) 上記(1)～(4)以外の視点に基づく当該千年村候補地の特徴の把握
- (6) 当該千年村候補地のタイプの抽出と簡潔な命名
- (7) 湖岸および臨海部の千年村候補地の特異な密集形態の要因の把握
- (8) 地形、地質変化に適応してきた集落の構造の変化と持続要因の把握

千年村研究は「環境・地域経営・交通・集落構造」

の4つの要素が一体となった「継続的な土地固有のシステム」が存在するという仮説の元、それを実証しようとするものである。本調査では霞ヶ浦周辺地域に立地する千年村候補地の上記(1)～(6)を概観的に把握し、調査対象地固有のシステム解明の端緒となることと期待する。

また今回の調査においては千年村プロジェクトに新たに参加した学生に向けて、今まで蓄積してきた知見や千年村的視点を引き継ぐことを併せての目的として調査をおこなった。(執筆者:近藤)



図 3-1 関東地方の千年村



図 3-2 調査対象地

第4章 2016年度霞ヶ浦周辺地域疾走調査 各村の報告

第4章では2016年度霞ヶ浦周辺地域疾走調査において
悉皆的に調査をおこなった19村の概略を以下の5つの視点から示す。

- 1)文献・地図等の情報から得られる客観的情報
- 2)実見によって得られた客観的情報(環境・地域経営・交通・集落構造等)
- 3)考察
- 4)集落を象徴する風景と名前
- 5)断面ダイアグラム

共通01	信太郡阿弥郷/茨城県土浦市烏山 稲敷郡阿見町阿見	9
共通02	信太郡高来郷/茨城県稲敷郡阿見町竹来・若栗・大室・掛馬	11
共通03	信太郡嶋津郷/茨城県稲敷郡阿見町島津 美浦村舟子・木原	13
共通04	信太郡信太郷/茨城県稲敷市江戸崎町・佐倉 稲敷郡美浦村	15
共通05	信太郡乗浜郷/茨城県稲敷市阿波崎・伊佐部・浮島・飯出・古渡・三次・上馬渡・下馬渡	17
共通06	鹿島郡幡麻郷/茨城県神栖市神栖町・下幡木・賀・息栖	19
A-01	行方郡板来郷/茨城県潮来市潮来・辻・古高	21
A-02	行方郡香澄郷/茨城県行方市麻生町富田	23
A-03	行方郡麻生郷/茨城県行方市麻生町麻生	25
A-04	行方郡小高郷/茨城県行方市小高	27
A-05	行方郡行方郷/茨城県麻生町行方	29
A-06	行方郡井上郷/茨城県行方市井上	31
A-07	行方郡堤賀郷/茨城県行方市手賀・宿・舟津・竹ノ塙・新田	33
A-08	行方郡曾禰郷/茨城県玉造町玉造	35
B-01	鹿島郡松浦郷/茨城県鹿嶋市平井・粟生・国末・長栖・佐田・木滝・根三田・下塙・谷原	37
B-02	鹿島郡鹿嶋郷/茨城県鹿嶋市宮中・鉢形・高天原・爪木・大船津	39
B-03	鹿島郡松浦郷/茨城県鹿嶋市平井・粟生・国末・長栖・佐田・木滝・根三田・下塙・谷原	41
B-04	行方郡大生郷/茨城県潮来町大生・釜谷・水原・築地・延方	43
B-05	行方郡逢鹿郷 / 潮来町大賀および麻生町根小屋・蔵川・宇崎・矢幡・石神・白浜	45



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapsより



図2 迅速測図(筆者加筆) 農研機構・農業環境変動研究センターより



図3 土地条件図(筆者加筆) 地理院地図より



図4 立ノ越の集落構造 撮影=高野

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

比定大字の北端には霞ヶ浦に流れ込む花室川が東流し、北部の台地には樹枝状の谷が入り込む。谷底低地では稲作を営んでおり、低地と台地の境界付近、あるいは台地面に人々が住まう。台地上は畑としても利用されていたが、高度経済成長期以降は住宅地が造成されている箇所もある。また、式内社であるとも言われる阿彌神社が参道とともに残る。南部に広がる段丘面上には、旧日本軍の関連施設があり鉄道が敷設されていた。戦後に農地が造成されたが、1980年代以降に幹線道路が整備されたこともあって、現在ではその一部が工場や学校となっている。

2) 実見によって得られた客観的情報

比定領域のうち、迅速測図(図2)で集落が確認でき、阿彌神社とも関わりのある立ノ越・中郷西・西郷(いずれも現在の行政区名[1])を中心に実見した。

・環境

立ノ越は、花室川の支流として南北に伸びる谷戸に集落を構えていた。西郷・中郷西は、阿彌神社から谷底低地を隔てた段丘面上に位置し、両集落の間にも谷戸が入り込む(図3)。

・集落構造

立ノ越は谷戸の西側斜面に沿って道が通り、道の上には住居、道の下に低地には水田が見られた(図4)。集落全体が同様の構成であり、南北方向およそ1kmに渡って続く。中郷西・西郷は、集落の中央には生垣を有する古い民家が集まり(図5)、幹線道路に近い外側では土地区画整理の行われた場所に新しい住宅が並ぶ。地元の人へのヒアリングによると、西郷の幹線道路沿いの墓地は、道路敷設以前から場所が変わっていないとのことだった(図7)。

・地域経営

阿彌神社境内の案内板に記された由緒によると、「旧阿見村の鎮守の杜として崇拜され岡崎^[2]、中郷、西郷、立ノ越の四地区より総代が選出され八名の氏子代表が阿彌神社の祭祀行事等を司り慣習の伝承に務め先代より今日迄引き継がれている」という。これと直接の関係はないものの、実見当日は西郷にて、町内会の子ども神輿に遭遇した(図6)。上記3地域



図5 中郷西の民家 撮影=田熊



図6 西郷の子ども神輿 撮影=石坂



図7 墓地とロードサイド店舗 撮影=中谷

の中央には、県道203号線沿いにマイアミショッピングセンターがある。町民活動センターが併設されており、置かれたパンフレットなどからも住民の地域に対する活発な活動ぶりが伺えた。

・交通

大字領域内を交通量の多い幹線道路が複数縦貫していた。県道34号線には土浦駅を発着するバス路線が通り、1時間に2～3本運行されていた。

3) 考察

阿弥郷は郷域が広く、その一部は市街化されているが、立ノ越、中郷西、西郷では古くから生産と生活の中心にあったと思われる。かつて集落の外縁には耕作地が広がり、阿彌神社や墓地もあった。1980年代以降に幹線道路が整備され、各集落の周囲が道路に囲まれた。田畑のうち道路沿いの土地は区画整理事業によって開発されていき、商業施設や新興住宅地となった。このように、集落外縁部は周辺環境に応じて姿を変えながら、時代によって必要な機能を獲得し、現在に至るのであろう。

4) 集落を象徴する風景と名前

「村の核の残る村」

立ノ越、中郷西、西郷では、古くからの民家が集落の核のように立地している。その周囲では様々な要素を取り込み、またはき出し、それらがうごめいていることが、現在に至るまで進化、存続してきた要因だろう。

参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典8 茨城県』角川書店、1983年

注釈

[1]阿見町では大字とは別に「行政区」(自治会や町内会に相当する)を設けており、阿見町大字阿見は立ノ越、西郷、中郷西、三区上、三区下、一区北、一区南、上郷、阿見台などの行政区を含む。

[2]阿見町大字岡崎。阿弥郷の大字領域の東に隣接する。
立ノ越

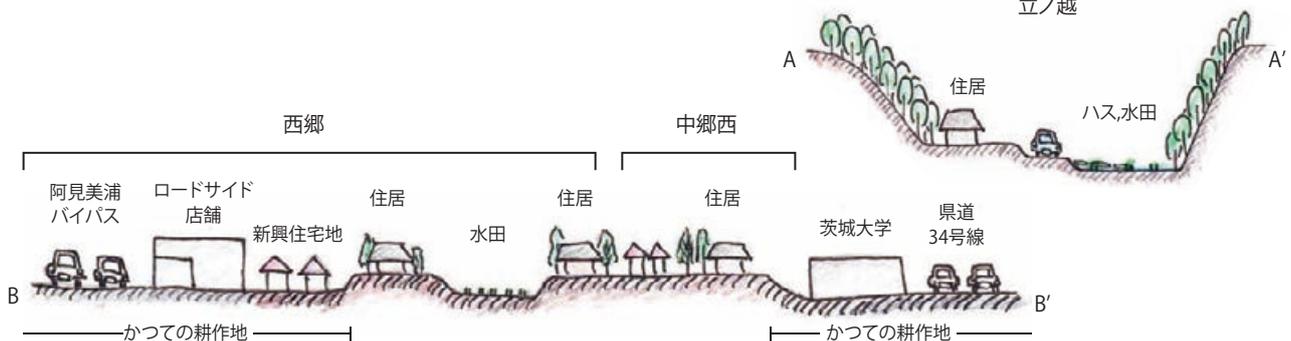


図8 断面ダイアグラム(筆者作成)



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapsより

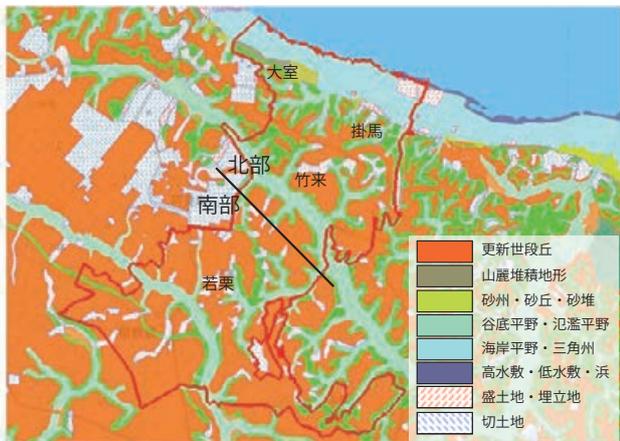


図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図3 北部の土地利用分類(筆者加筆) GoogleMapsより



図4 〈竹来〉居住地(a)での境界の更新 撮影=鈴木

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

現在の阿見町竹来・若栗・大室・掛馬などのあたりに比定される。鎮守は和銅年間(708年～715年)創建の阿弥神社。(『角川日本地名大辞典』より)

高来郷は更新世段丘をもって大きく北部、南部で分けることができ、北部は竹来・大室・掛馬、南部は若栗の大字を持つ[図1]。土地条件図によると、竹来と若栗にはそれぞれ、清明川と桂川が東西にかけて流れている。北部と南部に川と集落のセットを見ることができる。北部の大室の霞ヶ浦沿いに舟溜が見られる。その他の特徴として、西側の市街地化が本郷域を境に止まっていることがあげられる。

2) 実見によって得られた客観的情報

実見した竹来と大室について報告する。

・環境

竹来では阿弥神社から居住地(a)までの更新世段丘の一带で生産地であったが、その多くが耕作放棄地となっていた。谷底平野の生産地(a)ではゆるやかな谷状になっており、地形に合わせて多彩な生産が行われていた[図7]。

大室の海岸平野である生産地(c)では水田が広がり、部分的にレンコンを栽培していた。

・集落構造

竹来は更新世段丘上に居住地(a)があり、そこでは南北に伸びる道が3本通っていた。その道から各敷地へアクセスできるようになっていた。集落全体を通して道と敷地との境界は、生け垣であったが、中央の道ではコンクリートブロックになっており、。塀の更新がされていた[図4]。

大室では、砂州に迅速測図でも見られる居住地(b)、更新世段丘に新しい住宅地が立地していた[図5]。

・地域経営

竹来の阿弥神社は、舌状段丘上に立地し北に向けて伸びる長い参道が特徴的であった。

大室の舟溜[図6]での聞き取り調査によると、漁を行っている人は、大室の住民だけではなく阿見町全体の住民であった。漁獲量は家庭や近隣に配る程度の分量であることが分かった。

・交通

阿見美浦バイパスは竹来の住宅地と生産地の境界に敷かれている。



図5 〈大室〉段丘の新しい住宅地 撮影=高野



図6 〈大室〉舟溜 撮影=甲斐



図7 〈竹来〉多彩な帯の生産地(a) 撮影=高野

3) 考察

竹来では、阿弥神社一居住地一生産地(a)の奥へ伸びる段階的な地形があり、各地形の条件を読み込んだ巧みな土地利用がなされていた。特に生産地(a)では、谷底平野の微細な地形も注目し、清明川から南へ高くなるにつれて段上に米—レンコン—麦—サツマイモ生産物に変化させていた。これは水が必要な生産物が川側へ配置されているからであると考えられる。また、阿見美浦バイパスの開通はその立地から集落構造を崩していないと判断することができる。

大室では、聞き取り調査から漁業が既に主な生業ではなく、生活に彩りを与える程度になったことが分かった。それによる経済的な不足を集落背面の山を開発し、新しい住宅としたことで補っていると推察できる。また、部分的なレンコン栽培も減反政策などの影響を受けた稲作収入の不足を賄うためのものだろう。このように、部分的な変化で不足を補う地域経営が持続要因の一つであると考えられる。ただし憶測の域を出ないためさらなる調査を要する。

4) 集落を象徴する風景と名前

「多彩な帯村」

浦からの奥行きが生んだ多様な地形に多彩な帯状の土地利用がなされている[図8]。

竹来では帯状に生産物を変えたり[図7]、大室では漁業の帯の代わりに、使用していなかった段丘の帯を新しい住宅地に変えていた[図5、図6]。多彩な帯がゆえの補完である。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

参考文献

竹内理三ほか編『角川日本地名大辞典<8> 茨城県』(角川書店, 1983)

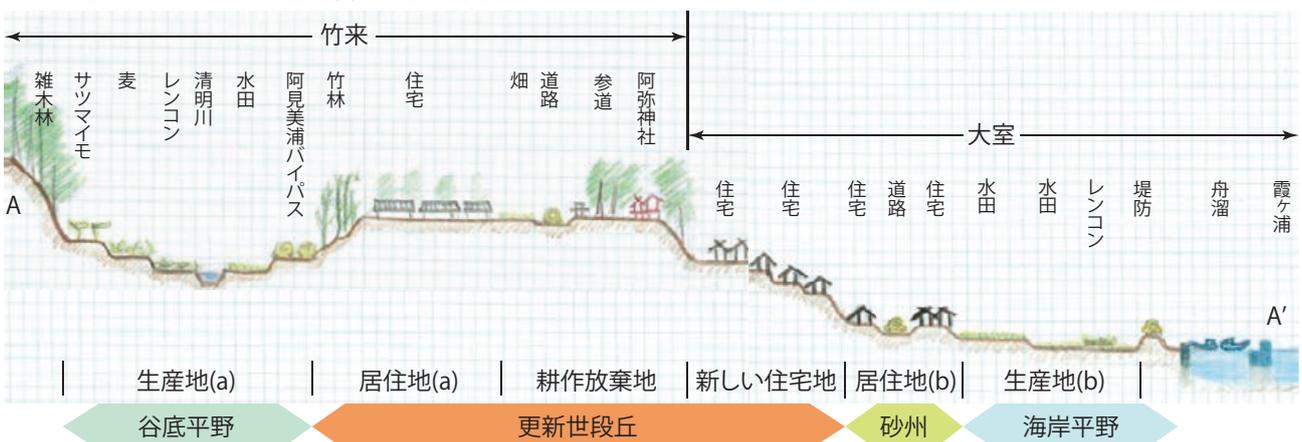


図8 A-A'断面ダイアグラム(筆者作成)



図1 比定の大字領域



図2 土地条件図 国土地理院より



図3 迅速測図 農研機構・農業環境変動研究センターより



図4 水神宮と霞ヶ浦

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

迅速図では集落は自然堤防上のみ立地していたが、現在一部の集落は盛土上に立地している。かつて芦が生育していた場所は埋め立てられて水田として利用されている。霞ヶ浦湖岸の水神宮の参道沿いに木原村の集落が立地し参道は嶋津郷、信太郷を縦断し霞ヶ浦湖岸へと続いている。霞ヶ浦南岸の木原城址城山公園に城址がある。曲輪、二曲輪、詰曲輪と行くに従って標高が低くなる特徴がある。

2) 実見によって得られた客観的情報

調査前の野鳥作成時に目を引いた水神宮周辺を重点的に見て回った。

・環境

霞ヶ浦沿いに水田が広がり、整備された水路が水田の間を通っている。漁が古くから盛んであり、入江が堤防で埋められる前までは入江に舟があった。しかし、現在は漁港に舟が置かれている。

・集落構造

城下町の居住域は水田や湖と比較して微高地にあり、生産地や斜面林を超えた台地にも集落がある。水神宮の参道沿いには住居が多く存在する。城下町と台地上の集落は祭りの神輿においてつながりがある。

・地域経営

かつては36軒が漁業を行っていたが、放射能による風評被害や後継者不足により、現在も漁を行っているのは4軒まで減少した。漁法は定置網漁やトロール漁で行っている。対岸との水産物の交換も現在はほとんどなくなってしまった。

昔、養魚場では鰻や鯉が養魚されていたが台風で駄目になってしまったため、現在はワカサギの人工孵化のみが行われている。

嶋津郷は、さらに「宿」、「浜」、「うしろ宿」、「かみ宿」の4町に分けられる。そしてその4町内で毎年木原祇園祭りが行われる。その、祭りが昔はそれぞれの町が当番制で行っていたが、現在は4町が合同で行っている。



図5 水路 撮影=河野



図6 水田と弁財天 撮影=河野



図7 漁業と農業の対比 撮影=藤田

3) 考察

綺麗に整備された水田の間に続く水路からこの郷の大半を占める水田による稲作や、堤防を挟んで湖側に作られた蓮根畑がこれからのこの郷の生活を支えていくのだと推測した。

かつて生活を支えていたであろう漁業が衰退していったことに対して、上記のような新しい産業へと切り替わりを行っている前衛的な郷であると感じた。木原祇園祭においても、4町が当番制で行っていた過去から合同で行うようになった現在への変遷からもわかるように、それぞれが力を合わせようという協力的な郷内の風潮が伝わった。

城下町の居住域が微高地にあるが、これは堤防ができる以前から水害対策のため考えられた上でつくられたのではないかと考えた。

4) 集落を象徴する風景と名前

「漁業と農業の対比」

漁を行っている民家が36軒から4軒まで減少し水田や蓮根畑といった農業が目立つという背景がある上で、比較的新しい水神宮と隣接する漁港がこの集落を象徴していると感じた。漁港が消滅しつつある漁業を、そして新しい水神宮がこれからの郷を支えるであろう農業を表していると解釈できるのではないかと考えた。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

参考文献

「角川日本地名大辞典(8)茨城県」

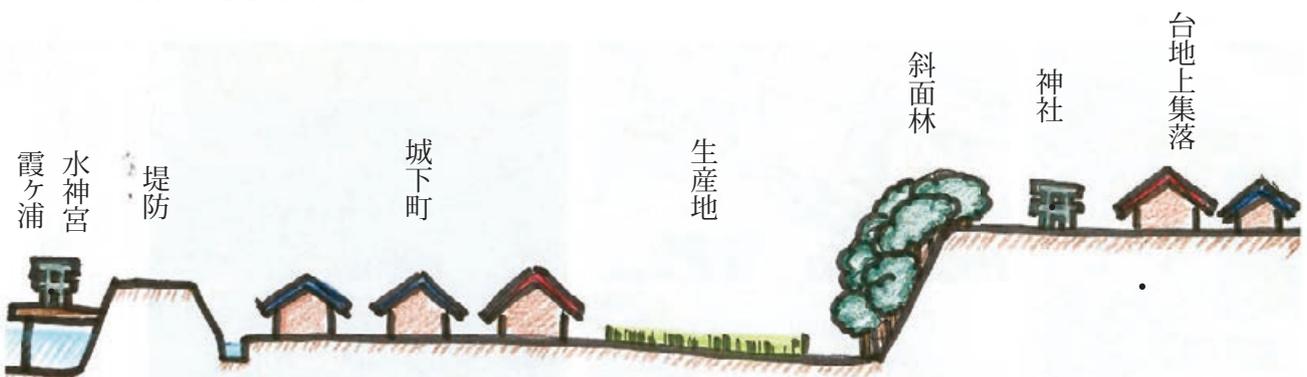


図8 a-a'断面ダイアグラム

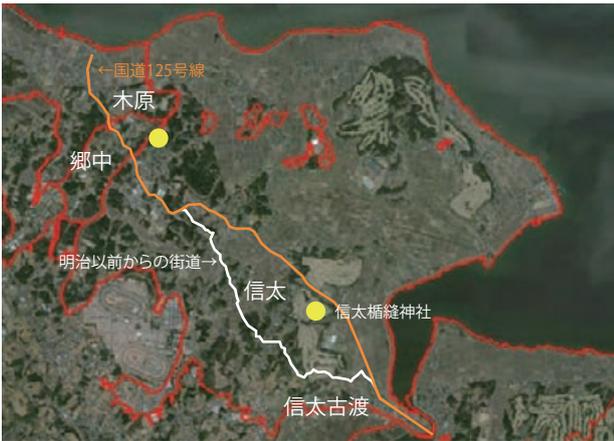


図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Earthより



図2 土地条件図+標準地図(筆者加筆)国土地理院より



図3 下草が刈られ日が陽が射す林床 撮影=近藤



図4 拝殿屋根改修工事寄付者の碑 撮影=近藤

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

霞ヶ浦南岸に位置し、広範に比定されている。集落立地は大きく2種類に分けられ、湖岸部は自然堤防上、内陸部は更新世段丘上に集落が立地している。また、生産地について、湖岸部では干拓地が、内陸部では谷底平野が水田となっている。また、美浦村郷中には、国道125号線に面して信太郡一宮である橋縫神社がある。美浦村信太にも、同名である橋縫神社がある。

2) 実見によって得られた客観的情報

本調査では、迅速図で確認できた街道沿いに信太郷を疾走した。

・環境

地図からの情報通り、内陸部は街道の両脇の斜面地およびそれに続く段丘上に集落が立地していた。氾濫平野は、迅速図では水田であり、現在でも大部分は水田であったが、国道125号線に面した一部は宅地となっている。

・集落構造

内陸部の集落は、水田で生産を行っているのに加え、住宅の横に菜園があり、自給のための農業を行っているとみられる。信太古渡はかつて霞ヶ浦の渡りで栄えたとみられるが、現在では特にその痕跡が見られず、産業は不明。

・地域経営

美浦村木原には信太郡一宮、旧県社である橋縫神社(以下木原橋縫神社)が、美浦村信太には同名の橋縫神社(以下信太橋縫神社)がある。木原橋縫神社の境内林は、間伐や下草刈り、落ち葉掃きが業者によって行われた痕跡があり、境内の保全に力を入れている。また、境内には拝殿屋根改修時の寄付者名が記載された石碑と、太平洋戦争戦没者の石碑があり、どちらも木原を中心に広い地域から名前が連ねられていた。社殿の周辺に祠等はほなかった。信太橋縫神社の境内林は、一部竹林に侵食されている、近年下草刈り等が行われた痕跡がないなど、管理があまり行われていなかった。近年、社殿前のヒサカキが植え替えられた形跡があり、社殿の周囲には、周辺住民が持ち寄ったであろう祠がいくつも置かれていた。



図5 信太榎縫神社社殿周囲の祠 撮影=土居
木原榎縫神社:境内林が管理され、祠はほぼない
→地域との関係を制御している



信太榎縫神社:社殿の周囲に祠が多い
→周辺住民が管理している



図6 神社と周辺住民の関係の違い



図7 周辺住民に管理される信太榎縫神社 撮影=近藤

3) 考察

本調査では、迅速図で確認できる街道を中心に疾走した。集落は迅速図と比較してあまり拡大してはいなかった。迅速図の土地利用から推測するに、かつて湖岸部では稲作が、内陸部では稲作と畑作が、信太古渡では渡しが中心産業として営まれていたが、実見では集落構造の違いは特にみられなかった。道路が通ったこともあり、産業による特徴の違いは小さくなっていると感じた。

木原榎縫神社と信太榎縫神社の対照的な境内の管理から、それぞれの神社と周辺住民の関係性の違いがうかがえた。木原榎縫神社は、現在でも境内林の管理や社殿の改修を行う費用を集めることができること、社殿の周囲の祠が少ないことから、地域との関係を神社自身が制御、維持していると考えられる。一方、信太榎縫神社は、業者による境内林の管理等、費用を伴う管理は行われていないが、社殿周囲の下草は刈られていること、社殿の周囲に周辺住民が持ち寄ったと思われる祠が多いこと、また、それがきれいに管理されていることから、信太周辺では、信太榎縫神社を含む共同体が現在でも維持されていることが推察される。

4) 集落を象徴する風景と名前

「神社から繋がりが見える村」

土地利用からは集落構造の特徴は見えないが、神社境内の様子から、共同体が続いていることを伺い知ることができる。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

段丘面の際と古い街道の間に明治以前からある集落が位置している。この集落が信太榎縫神社の管理の中心となっていることが推察される。

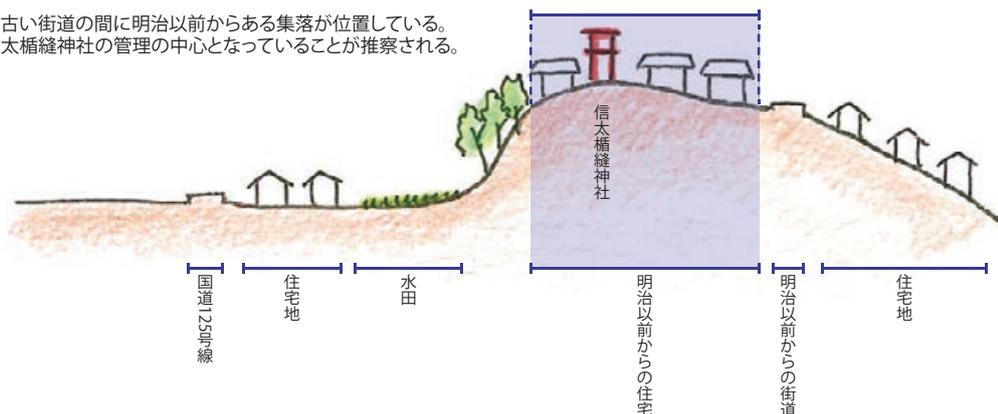


図8 断面ダイアグラム

共通-05

しだぐん のりはまごう いばらきけんいなしきし あわさき うきしま いいで ふっと みつぎ かみまわたり しもまわたり
 信太郡乗浜郷／茨城県稲敷市阿波崎・浮島・飯出・古渡・三次・上馬渡・下馬渡 担当：鈴木 登子（早稲田大学）



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapsより



図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図3 迅速測図(筆者加筆)農研機構・農業環境変動研究センターより



図4 浮島_集落内にひかれた水路 撮影=鈴木登子

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

信太郡乗浜郷は、霞ヶ浦の南岸に面しており、現在では広範囲に渡った地域に比定される。小野川にも面している古渡には、迅速測図(図3)より、街道沿いの集落があることが確認できる。かつての古渡村は、江戸時代までは水運で栄えていた。現在、古渡地区では毎年7月に伝統の夏祭り「古渡祇園祭」が行われる。稲敷市の北東部、旧桜川村の東部に位置する浮島は、現在は陸続きであるが、かつては霞ヶ浦に浮かぶ島であった。村域は台地と平地が入り組む谷戸が多い地形であり、古くは製塩が主な産業だった。現在は埋め立てられており、水田や畑となっている。

参考：稲敷市観光協会HP (http://inashiki.com/matsuri/hutto_gion.html, 2016.8.16閲覧)

2) 実見によって得られた客観的情報

郷域が広域に渡るため、古渡・浮島を重点的に見た。

・環境

乗浜郷全体の傾向として、自然堤防上に居住域が分布している。古渡には小野川沿いに街道があり、商店が並んでいる。熊野神社が所在する山の周りは田畑として利用されている。浮島では、埋め立てた部分にれんこんと稲を栽培していた。集落内にも水路が通っている。

・集落構造

古渡は山際で生産を行っているが、山中の熊野神社は荒廃していた。須賀神社周辺の、平地部分を中心に集落が営まれているとみられる。浮島は橋ができるまでは孤立して暮らしていたという。集落南側は生産が盛んだが、西側では耕作放棄地もある。

・地域経営

調査時、古渡では祭りが行われていた。かつて下宿、上宿、田宿が共同で行っていたが、現在規模は縮小しているという。集落全体にしめ縄が張られ、古渡橋まで続いていた。

・交通

古渡には北東と南に2つの街道があるが、集落の機能は南に向けた街道に所在している。浮島では、居住区内に入ると細い路地が入り組んでいる。住宅は屋根瓦を残し、増改築を行ったものが見られた。



図5 古渡_山際の生産地 筆者=鈴木登子



図6 古渡_祭り時期の須賀神社 撮影=鈴木登子



図7 「調節村」 浮島_新しい生産地と集落 撮影=近藤

3) 考察

信太郡乗浜郷は郷域が広いが、その中では字ごとに異なる集落が存在していることが窺えた。古渡はかつて水運で栄えていたように、生産だけではなく交通の影響も多く受けて生活していると考えられる。祭りは須賀神社を起点としており、下宿、上宿、田宿までを範囲としていた。集落北東に位置する熊野神社は荒廃していた。山は大事に利用しているが、神社に重きをあまり置いていないと推測される。また、住民の聞取りにより、祭りの規模が縮小している話があった。集落の規模も縮小していることが窺える。

浮島は埋め立てた部分はほとんどを生産地としていた。こうした新規生産地と集落との際部分はよく整備されていた。一方で、集落部分と新規生産地との関係性は不明瞭であった。集落内は細い路地が多く、地割があまり変わっていないと推測される。

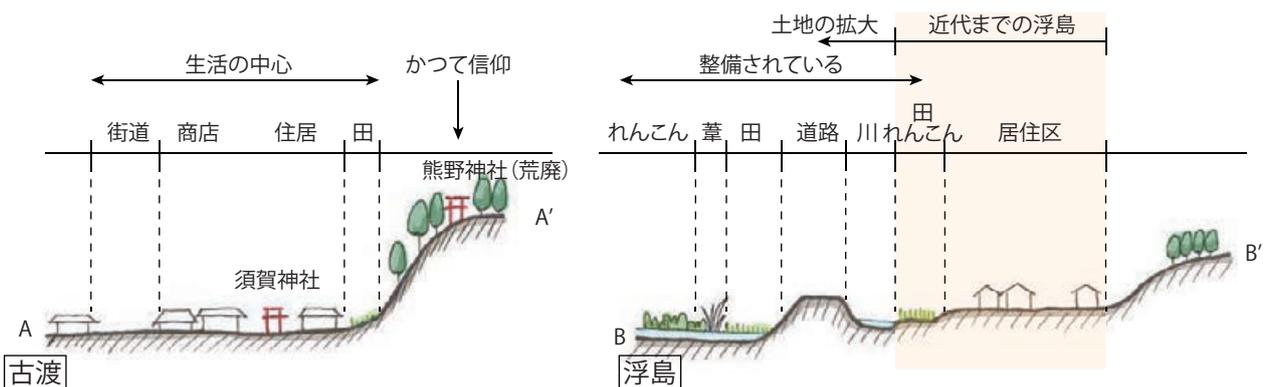
4) 集落を象徴する風景と名前

「調節村」

古渡では、人口や時代ごとの集落の規模に合わせて祭事や信仰の範囲が変わってきた。浮島では土地を広げたときに、宅地ではなく、生産地として拡大した。島であることを活用した集落である。乗浜郷全体には様々な性質の集落が存在している。いずれも集落自体の規模は変わらず、時代に合わせて土地の広さを調節していると考えた。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)



古渡

浮島

図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapより



図2 迅速測図 農研機構・農業環境変動研究センターより



図3 宅地の中の畑 撮影=吉田



図4 神田 撮影=吉田

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

国道124号線の開通により、「下幡木、賀、息栖」集落と、「筒木、深芝」集落が分断されている。もともと広い農地であった国道124号線沿いは、圃場整備に際して土地がグリッド化され、現在はその編み目にそって宅地化が進んでいる。しかし、古集落周辺では未だ区画整備がされておらず、現在も農業を続けている。また比定大字領域の最西部である「一本松」集落では道路整備により港が封鎖されている。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

比定大字の東西と南側に川が流れている。川沿いは現在は田んぼとして利用されており、漁業を営んでいる形跡は見られなかった。川から離れた微高地に宅地が形成されており、地形を利用した土地利用がなされている。

・集落構造

幡麻郷集落の特徴として、川沿いに田んぼ等の生産地がまとめて確保されており、宅地には田んぼは見られず畑が散見できることが挙げられる。家の敷地内に設置したビニールハウスで苗を育てた後に宅地の中に所有している畑に苗を植え替えて育てているようだ。

また宅地内は道幅の狭い三叉路が非常に多い。これは家の敷地を確保した上で道がその余剰空間であるためだと考えられる。さらに、各々の敷地は手入れの行き届いたイヌマキの高い生垣で囲まれており、そのため宅地内では視界が開けておらず、閉鎖的な印象を受ける。

・地域経営

下幡木集落では宅地の中に一カ所だけ田んぼとして利用している区画が見られた。目の前には金比羅神社があるため、この田んぼは神田であると考えられる。また同集落内の子安神社は安産祈願の神社であり、毎年9月に妊婦が紅白餅を献上し、子供を欲しい女性はその餅をもらって行くと言うお祭りが未だに残っている。

一本松集落は1980年代までは港があり、漁村であったことが分かる。集落内の河岸に神社があり、かつ



図5 三叉路 撮影=吉田



図6 立派に構えた住居 撮影=吉田



図7 「生け垣迷路の村」 撮影=吉田

ては霞ヶ浦の入り口としての役割を果たし、また参拝されていたと考えられる。

3) 考察

集落内の一軒一軒の家が広い敷地と田んぼ、畑を持ち合わせており、自給自足で生きられる環境を持っていた。故に集落全体が共同体として支え合って共存しているのではなく、各々が自立した豪農の集まりであると捉えられる。また家の敷地を囲む生け垣は非常に高いのも、自立しているために周囲の住居への干渉度合いが低いからだと考えられる。

4) 集落を象徴する風景と名前

「生け垣迷路の村」

国道沿いの整備された区画から、一步集落の中に入ると途端に閉塞的な印象を受ける。高い生け垣と入り組んだ道はまるで迷路のようであり、そのような空間の特徴が非常に閉鎖的な印象を生み出している。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

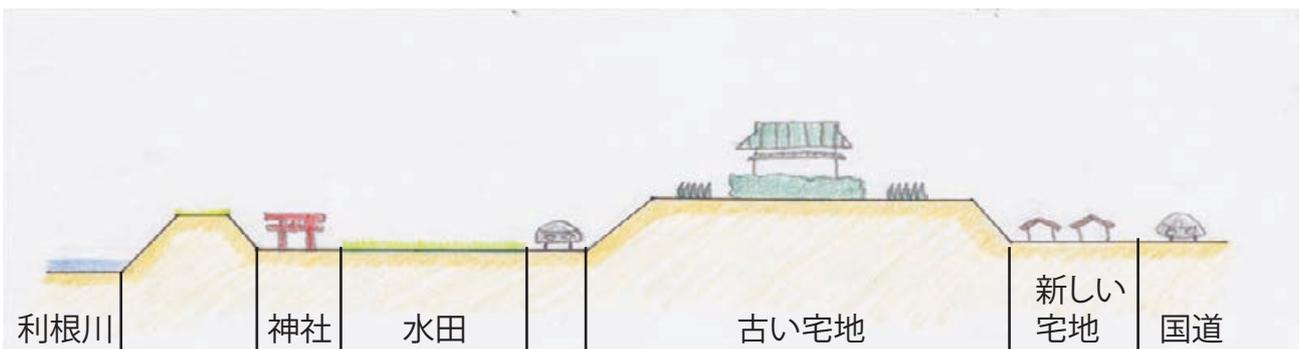


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapより



図2 迅速測図(筆者加筆)農研機構・農業環境変動研究センターより

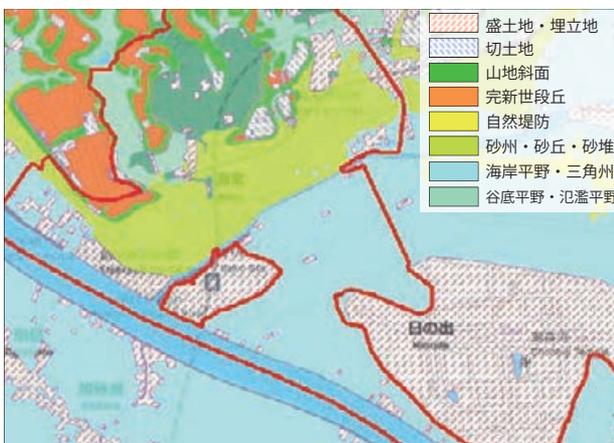


図3 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 地盤沈下により傾いた塀 撮影＝永井

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

古代に常陸国府から鹿島神宮への駅が設置されたことから始まり、江戸中期までは奥州から江戸への水運の中継地点として利用されていたことなどから交通の要所として反映してきた。砂州上を横断する道沿いに宅地が集中し(図1,2)、北部の谷底平野と前川以南の海岸平野を水田とする土地利用は明治期から大きくは変わらない(図3)。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

かつて「江間」と呼ばれる水路が集落内に張り巡られ生産と生活を支えていたが、現在は農業用水として利用されている程度である。また水田に放棄地は見られず生産活動は維持されていた。

・集落構造

内浪逆浦(うちなさかうら)は昭和25年に干拓され水田として利用されていたが、昭和52年に日の出地区としてニュータウンが建設された。その後東日本大震災で深刻な液状化の被害を受けておりその痕跡として地区内に傾いたブロック塀が数多く見られた(図4)。それとは対照に砂州上に立地する古い集落では多少補修する程度で大きな被害はほぼ無かったという情報をヒアリングより得た。このように安定した地盤上に古くから立地する宅地と人工的な地形に立地する宅地の災害への耐久性の差が見られた。

・地域経営

素鷲熊野神社の例大祭である潮来祇園祭は14町内ごとに山車を製作し引く特徴的な祭りである。この山車の製作には子供から年配の方まで幅広い年代が参加していた。また神社の境内および本殿は町内が当番制で清掃するそうである。さらに山車を引くルートにおいて、電柱が道路ではなく個人の敷地内に設置されている箇所が多く見られた(図5)。これは山車を引く際に妨げにならないように配慮されているのではないかと推察される。

・交通

かつて船の往来が盛んであった前川だが今では観光に用いられている程度である(図6)。



図5 民地に設置された電柱 撮影=永井



図6 前川の遊覧船 撮影=永井



図7 祭りと共に続く村 撮影=永井

3) 考察

非常に水に富んだ板来郷は交通の要所として繁栄した。現在ではそれを支えた江間や水運はほぼ機能していないが、前川を区切りとして宅地と水田が立地する持続的な土地利用が見られた。また潮来祇園祭禮が800年以上に渡り活発に行われている様子が見られた。前述したように山車の製作や神社の清掃など祭りの運営に子供から年配の方まで幅広い年代が参加しており、全町内をあげてこの祭りに取り組む様子は古くから変わらない。さらに近代成立した日の出地区の住民も祭りに参加させたり、潮来駅の設置や道路の整備などの開発に合わせてルートを変更したりと、社会変化に柔軟に対応してきた。このように度重なる社会変化の中でも祭りを通して町内および町内間での付き合いを維持することが板来郷の持続性を保つことに寄与していると考えられる。

4) 集落を象徴する風景と名前

「祭りと共に続く村」

社会の変化により暮らしは変わろうとも、祭りを重んじる住民たちの思いは変わらない。その思いから祭りに向け町内が結束すること、それがこの板来郷の千年村としてのアイデンティティなのである。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典8 茨城県』角川書店、1983年

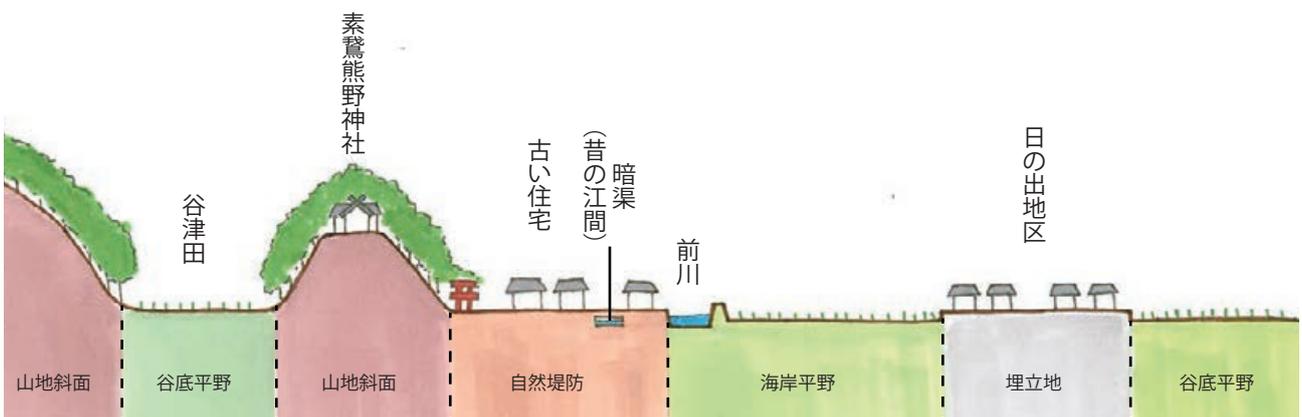


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) 国土地理院より

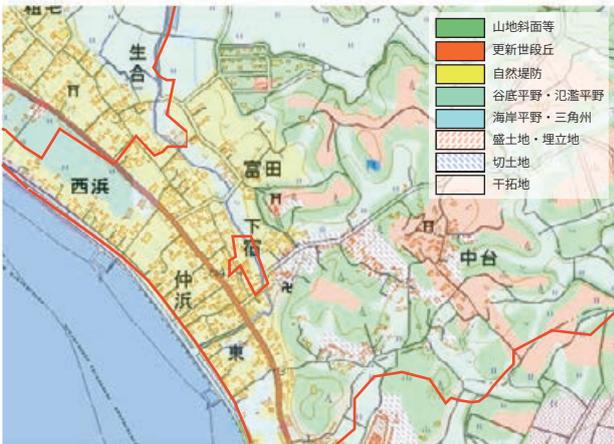


図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より

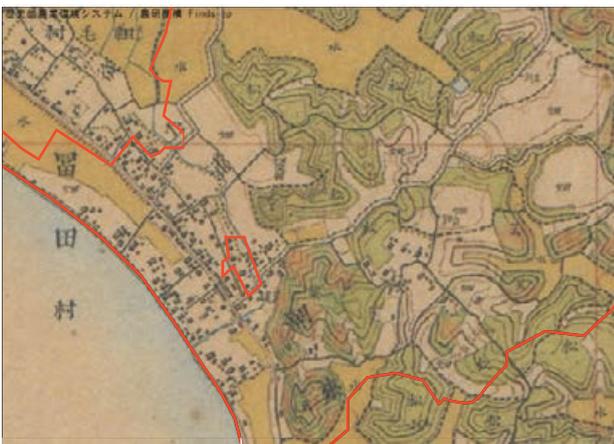


図3 迅速測図(筆者加筆) 農研機構・農業環境変動研究センターより



図4 下宿 動線となっている水路跡 撮影=神保

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

迅速測図からは、海-集落-水田という位置関係で集落が水面から丘陵地にかけて存在している様子が確認でき、さらに丘陵地によって隔たれた沿岸の集落と内陸丘陵の集落の2つがあるように読み取れる。だが、同じ旧富田村として記録されているので、ふたつを合わせたひとつの集落として存在していた可能性がある。

山地の谷底には明治期からの水田・畑の土地利用がみられ、海沿いには明治期からの住宅地としての土地利用がみられる。

湖での漁業も行われ、加工品生産が盛んである。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

沿岸の集落には旧街道が残っており、現在も微高地となっている街道沿いには商店、民家が立ち並んでいる様子が残されていた。

沿岸、内陸限らず菜園が敷地の一角にある家が多く自給自足の様子が見えた。水路を埋めた動線が住居の間に数多くあった。

・集落構造

沿岸、内陸の2つの面を持つ集落だが、主な集落は沿岸の方で、漁業を営む人間が山の方に土地を持っていたため、山の方にもだんだんと手が入り集落ができた。山で燃料の松を手に入れ、自給自足用の田畑で耕し、海では漁をするという半農半漁の集落構造がある。

・地域経営

この集落では皆、一乗寺の檀家となっており一乗寺にお墓を集めている。普段は沿岸の集落は一乗寺(羽黒神社も含む)に、内陸の集落は熊野神社にお参りをしているという。香澄という呼称は奈良期に消滅してしまったが、現在でも富田北部に同音の霞(かすみ)という地名が残る。

・その他

江戸時代には周りの集落が麻生藩によって治められている中、この富田の土地だけは水戸光圀公が当主の時期から水戸藩によって治められていた歴史を持つ。当時から富田は7集落で構成された。



図5 民家の敷地の様子 撮影=平本



図6 一乗寺にまとめられた地縁 撮影=神保



図7 「Back Up村」 丘陵の集落と沿岸の集落 撮影=神保

3) 考察

住居構造に沿岸と内陸の集落で差があった。敷地入り口に対して、浦に面した住居は納屋が正面、母屋が直角に配置されていたのに対し、街道に面した内陸の住居は母屋が正面、納屋が直角に配置されており、それぞれ自給自足の畑が端にあった。この配置は生活の中で求められていたことが異なる様子の現れであり、浦に面して住居は漁の作業を海からあがってきてそのまま作業ができるように納屋を重きを置き、街道に面している住居は母屋の見栄きに重きを置いていたのではないかと推測される。

羽黒神社、熊野神社どちらも改修はされているが整備は維持されておらず、管理は難しいようだった。どちらも最も標高が高い位置に神社が奉られ、標高が下がっていく中で神社、住居、生産地、浦、の4層の集落構造があった。どちらの生産地も縮小し、荒廃している様が見取れ、沿岸と内陸の関係性の維持も難しくなっているように感じるが、一乗寺がそれぞれの部落をまとめているため沿岸と内陸の生活基盤の共有ができていることが伺える。

4) 集落を象徴する風景と名前

「Back Up村」

半農半漁の集落の中で、主な集落のある沿岸から時間をかけて内陸側に生産の面を見出してきた。燃料や食料を確保するための土地を用意し、そのため丘陵地にも集落が生まれた。そして内陸の集落は沿岸の集落のBack Upをする形で2つは成り立っている。生活のなかで足りないものは身の回りにある土地で補うという振る舞いがある。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

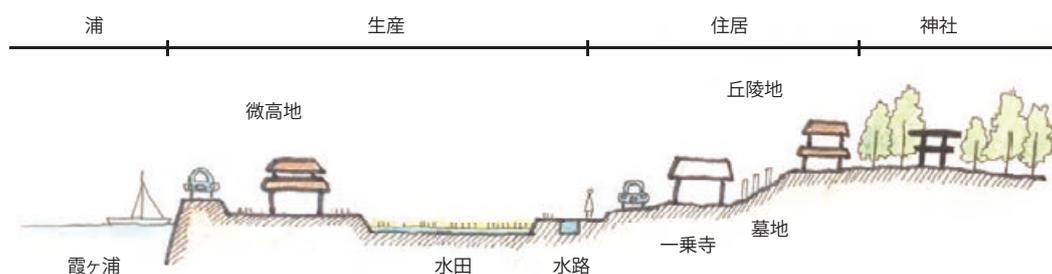


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Earthより



図2 南西部迅速測図(筆者加筆) 国土地理院より



図3 下湊_商店街 撮影=近藤



図4 古宿_集落 撮影=田熊

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

郷域は山地に向かって長く、主に霞ヶ浦沿い、街道沿い、丘陵部の3つの集落が見られる。

街道沿いの集落には鎌倉時代に築かれた麻生城の跡が現在羽黒山公園として残っている。また、江戸時代にこの地を治めた新庄氏が構えた陣屋跡地が現在は小学校となっており、古くから小規模ではあるが城下町が形成され栄えていたことがうかがえる。

霞ヶ浦沿いの古宿では、平安時代には津と呼ばれる自治単位が存在したことが確認されており、漁業を生業とした集落が形成されていた。現在も、麻生町内には複数の漁港の存在が確認できる。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

城下川が南北に通っており、上流の谷戸では稲作が豊かに行われている。集落の中には、古い水路が一部暗渠化した状態で残っている。街道沿いの集落では、自宅の敷地の中に小規模な畑やビニールハウスなどの小規模な生産地を持つ家が見られた。

霞ヶ浦沿いは堤防が築かれており、現在は集落から浦は直接は何えない。漁業協同組合と漁港の存在が確認され、現在もウナギ、ワカサギ、シラウオなどが水揚げされている。新田では、いちごのビニールハウスが多く行われていた。

・集落構造

現在の国道355号線に並行する道は迅速測図からも古いメインストリートと考えられ、現在も商店や飲食店が立ち並ぶ商店街となっている。陣屋跡地の周囲も道幅が広く敷地の大きい住宅が見られた。

浦沿いの古宿では、1軒1軒の敷地が細長く、背丈ほどの生垣に囲まれている。また、図6に示すような屋敷配置が典型として見られた。

・地域経営

田町、宿、蒲縄、下湊、玄通は丘陵部の大麻神社、古宿、新田は浦沿いの八坂神社でそれぞれ祭りを行う。また浦沿いの集落内には墓が見られなかった。

・建築意匠

今回多くの集落で見られた、出桁造りや窓に庇をつけるなどの特徴ある住居が麻生にも見られた。



図5 古宿_漁港 撮影=太田

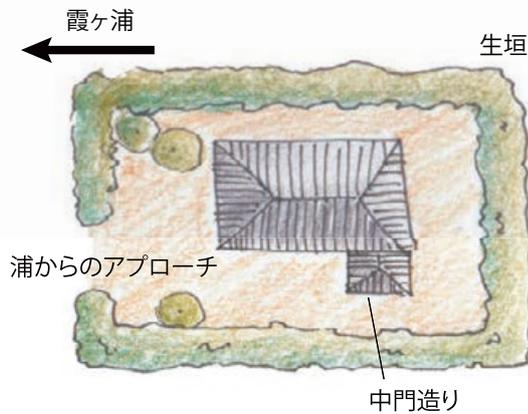


図6 古宿に見られた屋敷配置のダイアグラム(筆者作成)



図7 田町_商店街の裏で農業を支える水路 撮影=太田

3) 考察

国道355号線から丘陵部にかけての集落は、現在も商店街が残ること、市役所・裁判所などの公共施設が多いことから、城下町として栄えた近世の性格が色濃く残っていると考えられる。集落構造に関しても武家屋敷の敷地が現在も引き継がれ、その大きい敷地の中に住居を複数建設するケース、住居と生産地を持つケースなどが見られた。

一方、浦に面した古宿では、屋敷配置に図6のような特徴が見られた。浦に対して間口の狭い細長い敷地形状になっていることは漁村であることに由来すると推察できるが、中門造りや出し桁造りなどは合理性によるものではないと思われる。これは、堤防による「漁村の陸封」の影響ではないか。かつての住居は浦に向いていたが、堤防の完成により船は漁港にまとめられ、浦との連続性が失われた。このことで、住居を設える際の価値基準が生業との関係性から経済力の誇示へと変化したとも考えられる。

以上のように、麻生の中心部には大きく2つの集落が確認できたが、その相互関係は伺えなかった。

4) 集落を象徴する風景と名前

「表裏一体村」

集落の中心地(表)はそれぞれ生垣に囲まれた中門造りの住宅、商店街から成り、一見水からは断絶されているように見える。しかし生産地(裏側)は「浦」という資源によって支えられ、つながり、半農半漁、半農半商の産業形態をうみだしている。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

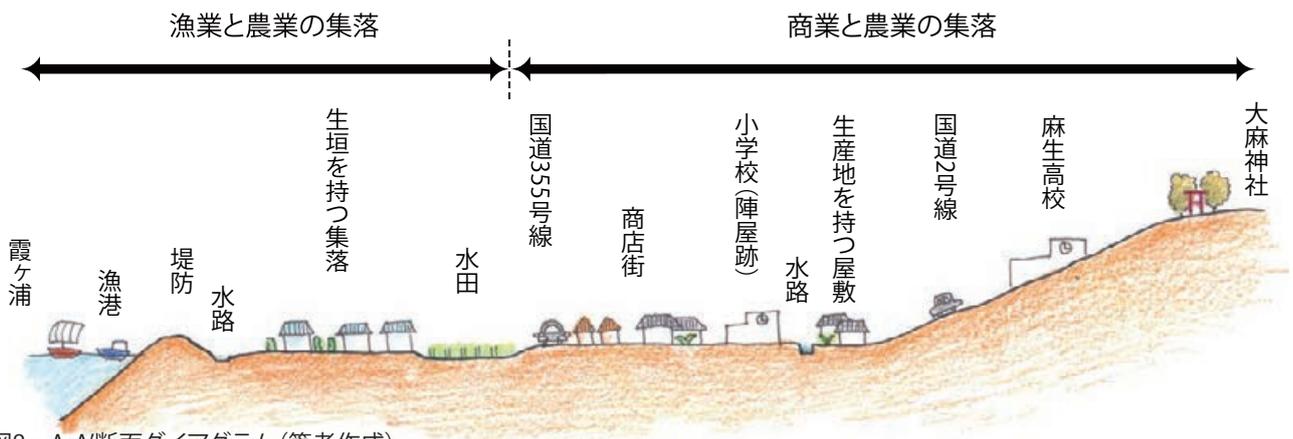


図8 A-A断面ダイアグラム(筆者作成)



図1 比定の大字領域(筆者加筆) 国土地理院より



図2 土地条件図(筆者作成) 国土地理院より



図3 平野部の干拓地における広大な生産地 撮影=杉山



図4 段丘部の道路と土砂流出防止用の植栽 撮影=稲田

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

現在の行方市小高を中心とするあたりに比定される。また、常陸国風土記にも小高里についての記載がある。迅速測図、基盤地図、土地条件図から、更新世段丘上(以下段丘部)、霞ヶ浦沿岸部の自然堤防上(以下平野部)に帯状の集落の存続が確認できる。比定領域内には原始から近世までの史跡が多くこのころ。霞ヶ浦沿岸部では、1938年に雇用対策や食料増産のための83haもの大規模な干拓が実施された(註1)。

2) 実見によって得られた客観的情報

比定領域付近の集落の立地の特徴は、平野部と段丘部で大きく異なっていた。よってこの二地域に分けて報告する。

・環境

<平野部>霞ヶ浦の干拓地や海岸平野、内陸側では隣接する谷戸や切土地がそれぞれ圃場整備されていた。干拓地では減反等の影響で一部レンコンへの転作が見られ、海岸平野ではハウス栽培や太陽光発電が見られた。

<段丘部>谷戸が樹枝状に走る複雑な地形のなかで比較的広い整形地が確保でき、かつ複数の谷戸に隣接している土地に集落が形成されていた。台地上ではナス、サツマイモ等の畑が見られ、谷戸を水田として利用しており圃場整備はされていなかった。

・集落構造

<平野部>帯状集落の端部に八坂神社が立地し、大きな住宅では高さ1mほどのマキの生垣が見られた。

<段丘部>段丘面周縁部に側鷹神社が立地していた。県道から離れたところでは、側溝が整備されておらず雨水等が道路に直接排水されていたが、聞き取りによると洪水等の被害はないとのことであった。また、道路の補装が簡易であり、畑と道路とのレベル差がなく、土壌流出防止のため畑をジャノヒゲで縁取る等の工夫も見られた。また、樹高2~4mほどの高いマキの生垣が見られた。

・地域経営

<平野部>今回の調査では共同体についての情報は得られなかった。

<段丘部>南上での聞き取り調査から、平野部と段丘



図5 側鷹神社の境内で飼育されていた金魚 撮影=杉村



図6 段丘部における強い創造性 撮影=田熊



図7 「自足的職人組合村」 撮影=シヨウ

部との間での互助的な関係はなくそれぞれ独立していることが判明した。また、平野部の住民よりも段丘部のほうが方言の特徴が強くあらわれていた。

3) 考察

<平野部>安定した土地に立地したうえで、切り土や干拓、圃場整備や転作を採用していることから、新しい技術の導入に対して好意的である。また、環境に対しては能動的かつ大規模な変化をもたらすことで安定した生産を確得し、持続性へとつながっていると考えられる。

<段丘部>多様さに富む地形を活かした生産地の確保や、自作的な暮らしの工夫といった環境のスケールに即した営為によって集落内で自己完結した生活系を獲得している。このため、近代的な技術を導入する必要がなく古くからの姿を残し続けていると考えられる。また、この自己充足性が共同体の特徴にもあらわれているといえ、その強固さは側鷹神社の活き活きとした金魚の姿にも見て取れるであろう。

4) 集落を象徴する風景と名前

<平野部>「技術的管制部村」

新しい技術を積極的に取り入れ、その適正な制御によって持続性の獲得をしている。

<段丘部>「自足的職人組合村」

古くからの優れた創意工夫の蓄積を活かし、強い共同体による自己完結した持続性を保持している。

5) 断面ダイアグラム(図8参照)

参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典8 茨城県』角川書店、1994年

註1.「農林水産業/茨城県」より確認。(2016.8.19閲覧)

URL: <http://www.pref.ibaraki.jp/tsukuru/norinsuisangyo/>

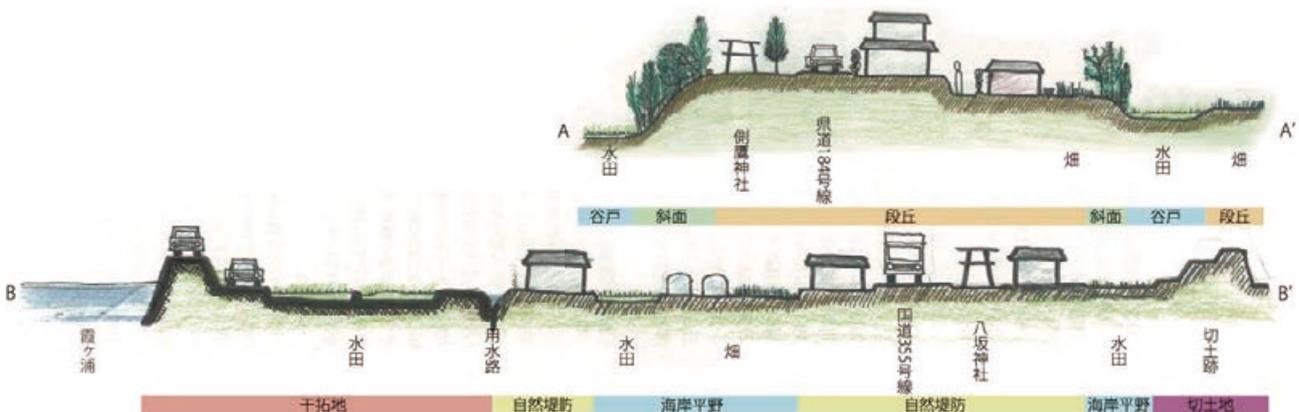


図8 断面ダイアグラム(筆者作成)



図1 比定の大字領域 (Google Earthより)



図2 土地条件図(筆者加筆)



図3 迅速測図

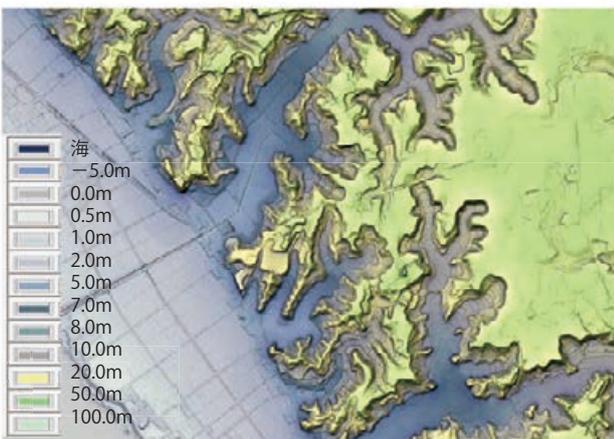


図4 標高地図(カシミール3Dより)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

麻生町行方の北西部に比定されるが、2005年に北浦町、玉造町と合併し行方市が発足したことにより麻生町は廃止となった。行方郷の地理としては現在行方市の南部に位置する。中央部には谷戸が広がり倭武天皇がこの地の山海の眺め、土地の形状の優れていることを愛で「行細(なめくわし)の国と称ふべし」と言ったことが行方の地名の由来になっているという。

2) 実見によって得られた客観的情報

行方郷の北西から郷域に入り中央部を中心に実見した。その後南部の水田地帯を通り浦沿いの集落を回った。

・環境

谷戸の谷部に水田が広がっており、浦に向かず南北に伸びた目立たない谷戸地形を上手く利用している。風景としても周りを森や山に囲まれた低地の水田は非常に美しいものであった。一方で同じ谷戸地形でも耕作放棄地となっている畑も存在した。迅速測図では溜め池である場所は現在水田として整備されており、浦沿いにかけての水田は平成13年頃に圃場整備がなされたよう。

・集落構造

中央部の谷戸では非常に立派な門を構える住居がいくつか見られた。また、低地の水田だけでなく、丘陵部に畑もあり、様々な農作物を出荷しているようである。また、煙草の生産を行っていた構造の住居が見られた。丘陵部の高地だけでなく、斜面の途中にも住居が建てられているのが特徴的であった。

・地域経営

浦沿いの集落では養魚場がいくつか見られ、漁港にも人がいたことから漁業が生きているとみられる。中央の谷戸部では高地を挟んで整備された水田と耕作放棄地が存在していることから、あくまで憶測だが小さな集落同士の繋がりは薄いのではないかと感じた。

・交通

国道355号を境に南北で大きく地形が変わっている。



図5 斜面上にみられる住居



図6 立派な門を構える住居



図7 谷戸の低地を生かした水田

3) 考察

郷域中央部で高地を挟んで管理された水田(以下a)と耕作放棄された土地(以下b)の二つが見られ、ここに一つ行方郡行方郷における住民のつながりが見えるのではないかと思います。aを持つ集落は迅速測図でも存在が確認され古くから続いている集落であるのに対し、bを持つ集落は迅速測図ではその姿を確認できないため比較的新しい集落であると思われる。こうした背景から、この地では集落同士の連携があまりとられず、そのため同じ郷域内で距離も近い土地であるのにこのような差ができてしまったのではないかと推測する。また、入り組んだ谷戸という地形がこの差をもたらしているということも考えられる。さらにaを持つ集落では立派な門が多く、生活で金銭的な不自由はあまりないように見られたことから、千年村として続く集落の背景の一つに、独立したような集落でその土地だけで生産を完結するような生活様式もあるのではないかと考える。以上憶測であるので、ヒアリングなど詳細な調査を要する。

4) 集落を象徴する風景と名前

「谷戸が恵んだ村」

谷戸の地形を生かした秘境とも言える水田は、人々の生活の財源としてはもちろん、風景としても人々の恵みになっていると感じた。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

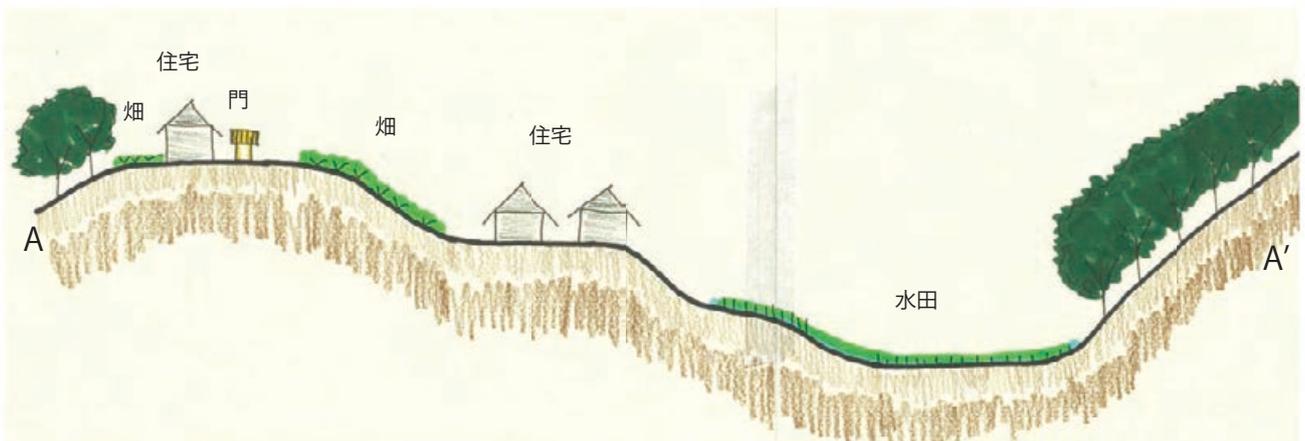


図8 断面ダイアグラム

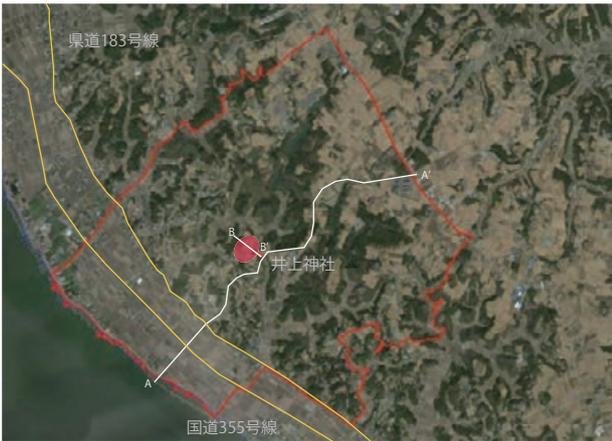


図1 比定の大字領域(筆者加筆) google earthより



図2 土地条件図 国土地理院



図3 迅速測図 農業機構・農業環境変動センターより



図4 B-B'間 井上の全体像

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

井上郷は奈良・平安期に見える郷名。「和名抄」常陸国行方群十七郷の1つ。

土地条件図(図2)を見ると大まかにこの地域は北東の段丘が連続する部分と南西の霞ヶ浦沿いの海岸平野の二つで構成されている。空撮(図1)と土地条件図を比較して見ると段丘部には水田、山地斜面には森林が広がりその間に集落があるといった、地形を活用した集落構造が分かる。海岸平野と山際の間には迅速測図(図3)の時点からある街道が現在は県道183号線として残り、その街道沿いの集落も共に変わらず存在する。ただ、県道183号線より南西側に国道355号線が通り水田がより等間隔な形に変更されている。

2) 実見によって得られた客観的情報

A-A'間(霞ヶ浦沿い～山の上)を道沿いに実見した。

・環境

井上郷内では全体的に生業として米を生産をしているように伺えた。霞ヶ浦沿いには 現在使われていない船(図5)や養殖場後が見られたがどちらも現在は使われていなかった。段丘部の谷戸でも米の生産が目についたが、それ以外の畑は個人の趣味程度にとどまり、また耕作放棄地も多くあった。

・集落構造

A-A'間ではAから、(1)霞ヶ浦沿いや水田の間に分散的に生活する集落、(2)県道183号線沿いに住む街道沿いの集落、(3)段丘の形状を生かし谷底の水田と尾根の森林の間で生活する集落、また(4)最北東部の地形が平坦になっている部分では家・畑・水田がセットな分散型集落と、大まかに4種類の集落をみることができた。またこのうち(2)と(3)は迅速測図時点を見ることができる。

・地域経営

段丘部では、香取神社、井上神社共に地形が平坦に差し掛かる前のもっとも高い地点に神社が配置されている。また双方ともその下の段丘沿いに集落が形成されている。



図5 霞ヶ浦沿い 使われていない船が並ぶ



図6 (3)谷戸に住まう集落の住宅



図7 (3)谷戸に住まう集落の畑

3) 考察

また、今回の調査では2)の集落構造で述べた4種の集落がそれぞれの環境に応じた庭の配置や畑などの所有の仕方の違いなどを見ることができた。(1)霞ヶ浦沿いの集落では、それぞれ広い庭を持ち、生垣などは特に見られず外に対して庭が開放的であった。また、養殖場も自分の庭の一部であるようであった。(2)街道沿いの集落は庭は狭く、街道を挟んで住宅が向かい合っているためか、住宅と街道の間の狭いスペースにコンクリート塀を立てていた。(3)谷戸にある集落は斜面に住んでいる為、道路とは異なるより高いレベルに住宅を立てていた。その道路と住宅のレベルの差に視線を遮断するように生垣や樹木が植えられており、外に対して閉鎖的であった。(図6)斜面など家と水田の間の活用の難い場所に畑が配置されていた(図7)。(4)北東の平坦な場所に位置する集落も(1)と同様に外に対して解放的で各家ごとに水田、畑、森林があった。

また、全域的に井上郷内の調査中、人をあまり見かけなかったことや、耕作放棄地、放棄された養殖場が目立ったこと、神社内の石像が破損されたままになっていたことから、昔から続く郷内での生活の維持が難しい様子がうかがえた。

4) 集落を象徴する風景と名前

「地形に沿う4種の集落」

霞ヶ浦沿いから山の上まで地形に沿いながらそれぞれ異なる暮らしをしていたのが印象的であった。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

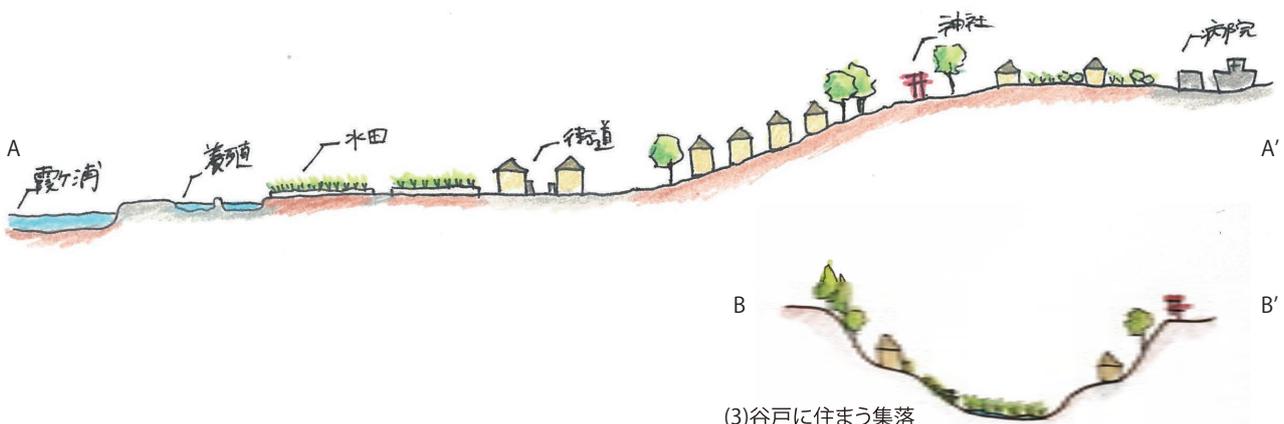


図8 断面ダイアグラム

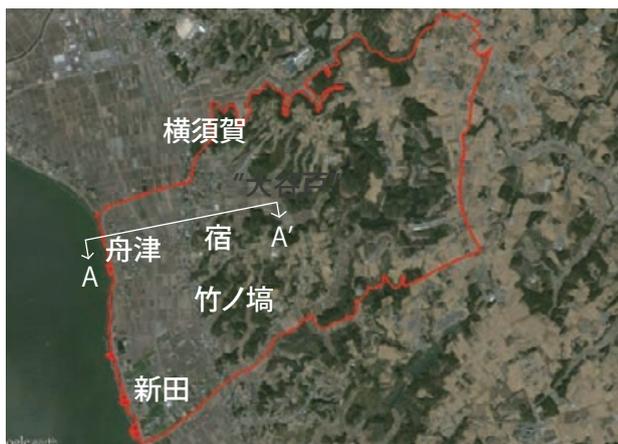


図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapsより



図2 迅速測図(筆者加筆) 国土地理院より



図3 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 竹ノ塙の手賀古墳郡と見られる場所 撮影＝貫洞

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

和名類聚抄に記載があった「堤賀」という集落は旧玉造町南西部に比定されるとある。鳥名木古墳と手賀古墳がそれぞれ、〈横須賀〉東部と、手賀の〈竹ノ塙〉に近くに位置する。

霞ヶ浦から海岸平野-谷戸-丘という段階を踏んで緩やかに山合いへと接続する北部の〈舟津・宿〉と、南部の海岸平野に散在する家々のまとまりとしての〈新田〉が迅速図に確認できる。

2) 実見によって得られた客観的情報

迅速図にて確認できる、舟津・宿・新田を実見した。

・環境

谷戸から霞ヶ浦方面に注ぐ水路があった。

聞き取りによると1970年代の常陸川水門の閉鎖以降は淡水化した霞ヶ浦の水を地下を通じて2段階に汲み上げて農業に利用しているとのことで、〈宿〉の背後に広がる「大谷戸」でも従来の地下水と併用しながらポンプ水を使っている様子が見られた。

・集落構造

〈舟津〉霞ヶ浦沿いに家屋が集中しているものの、海岸沿いには堤防が築かれており、漁業を営んでいる様子は見られず、むしろ背後の海岸平野に広大な水田を抱えている様子が目立った。

〈宿〉県道沿いに連なる集落は、背後に水田として利用されている「大谷戸」を抱えていた。

〈新田〉海岸平野において水田と、コイ、フナ、キンギョの養魚いけすがパッチワークのように張り巡らされていた。

・地域経営

聞き取り調査によると、〈新田〉では富山からの移住者が〈舟津〉の土地を間借りして生産を行っているとのことだった。

聞き取り調査によると、7月に行われる手賀祇園祭りでは、〈宿〉、〈舟津〉、〈竹ノ塙〉、そして北側の玉造郷に属する〈横須賀〉から4つの山車が、街道を通過して〈宿〉に位置する八坂神社に集まるように、引き回されるとのことだった。神社の看板によると、この八坂神社はもともと〈舟津〉にあったという。



図5 〈宿〉背後の“大谷戸” 撮影＝貫洞



図6 “大谷戸”に見られたポンプアップ設備 撮影＝貫洞



図7 手賀祇園祭(7/22)での宿の山車 撮影＝松木・高野

3) 考察

祇園祭りで山車を引く4つの集落は、それぞれ水田での生産を基盤としつつも、微妙に異なる性質を持つ。街道に面する宿場だった事が想像できる〈宿〉、迅速測図上で背後に畑の生産地を擁する〈竹ノ塙〉、漁師町だった事が想像できる〈舟津〉、玉造郷に位置し海岸平野に特に広大な水田を持つ〈横須賀〉と様々だ。

このような4つの集落が祭りをなかだちに連帯を強めるきっかけとはなんだったのだろうか。要因の一つとして、円滑な農業生産のために、4つの集落が共通の1つの神社に集まって祭礼を行う必要性があったのではないかと考えられる。これら4つの集落ではそれぞれの生産地に用水を引いて農業を行っており聞き取りによると、地下水は有限であるため、過去に谷と浜において水利のトラブルがあったという。

この争いは、霞ヶ浦が淡水化したのち、2段階ポンプアップ式の水利が生産地に張り巡らされてから落ち着いたという。このような、特徴的な水利が見られるのは、このような長い祭りにおけるつきあいが背景にあるのではないか。

4) 集落を象徴する風景と名前

「住み分け、汲み上げ、祭りで会おう村」

別々の生産地を持つ4つの集落がそれぞれに農業生産をしながらも、年に1度、祭りを通して連帯する姿を表現した。

5) 断面ダイアグラム(図8参照)

参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典14 神奈川県』
角川書店、1994年

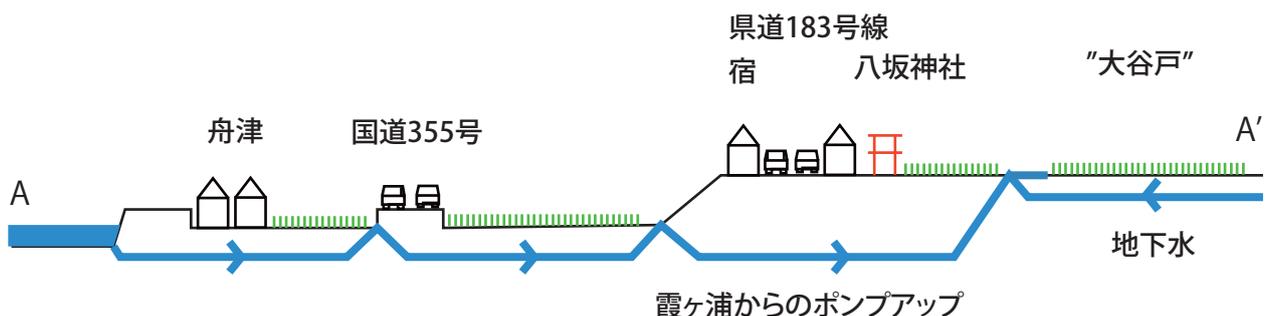


図8 舟津-宿-“大谷戸”断面ダイアグラム(筆者作成)



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapsより



図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図3 迅速測図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 高須にある水路 撮影=シヨウ

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

玉造町玉造(大字なしの地域)を中心とする同町中央部に比定される。領域内に古墳群がある。2005年9月に、麻生町・北浦町と合併して行方市となった。

浦沿いの自然堤防上や、加茂に古くから集落が立地しており、台地上の松林と荒原が開拓されて畑地と宅地になっている。東西に鹿島鉄道が通じたが、現在は廃止された。1987年かすみがうら市と行方市を結ぶ霞ヶ浦大橋が開通した。

2) 実見によって得られた客観的情報

迅速測図に確認できる高須・加茂を実見した。

・環境

高須は自然堤防の微高地に集落が立地し、湖岸の低地で米が生産された。霞ヶ浦から旧堤防を貫いて一部暗渠化した水路が通っており、点在する溜池に注いだり、最終的に田んぼに給水していた。

加茂は全体的緩やかな斜面を有し、一部段丘によって急な斜面となっている。台地上ではラッカセイ、葉タバコなどが生産されていた。

・集落構造

高須は浦側から自然堤防上に道路—住宅—水路—畑の順で並び、さらに内地側に水田が広がった。自然堤防上小規模の畑や溜め池が見られたが、漁業をやっている痕跡がほとんど見られなかった。また、霞ヶ浦ふれあいランドや道の駅まで足を運び、当地の特産物が販売され、観光情報も掲示されていた。

一方、加茂は斜面に沿って古い家々が階段上に並び、空き家が少々見られるが、生活に使われる民家が多く、農業や漁業の道具や、小舟などが見られた。

・地域経営

高須は元々船渡しで栄えていた集落だが、霞ヶ浦大橋の開通に伴い、観光船渡しとなったことが聞き取り調査によって分かった。また、信仰の中心になる神社・お寺が見られなかった。浦沿いの道から少し入った所に鉄を塗装して石に見せかけた作りの鳥居が見かけたが、詳細は確認できなかった。

加茂の斜面の頂上にお寺(宝幢院)とお墓があり、綺麗に整備され、現在でも使われている。また、斜面地にも幾つか小さくまとまった墓が見られた。



図5 加茂の着いた雰囲気集落 撮影=シウ



図6 加茂斜面頂上にあるお墓 撮影=シウ



図7 加茂頂上から見るお寺の門(雲の下へ帰る村) 撮影=シウ

3) 考察

高須は環境面など優れているものはあるが、千年村として評価するにはより詳細に見る必要がある。よってここでは加茂について報告する。加茂では、通りすがり人が少なく、住民だけの生活空間となっている。また、斜面地に立地しているため日当たりや眺望などの自然環境が恵まれており、穏やかな雰囲気であった。特にお寺やお墓が斜面の頂上に立地しており、集落の中で象徴的なヒエラルキーを可視化し、無意識の中、生と死の時間を一つに繋がりにしたことによって、人々は集落への帰属意識を持てるようになった。それが持続要因の一つであると考えられる。都市で暮らす「故郷喪失」した人々にとっても癒しの場所となると感じた。

4) 集落を象徴する風景と名前

「雲の下へ帰る村」

集落の中で信仰の中心や死を祀る場所を見ることで、集落で暮らす人々の人生観・世界観を垣間見ることができる。加茂の穏やかで平和な雰囲気は、その斜面の頂上に立地する寺と墓に理由があると考えられる。空や雲の最も近い場所に、人生の終わりを帰属することを日頃の生活の中に意識することによって、土地に愛着を持ち、その土地で長く生を営むことに繋がっている。一人一人がこのような生き方をした結果、集落が長く続いてきたと考えられる。

5) 断面ダイアグラム(図8参照)

参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典14 神奈川県』角川書店、1994年

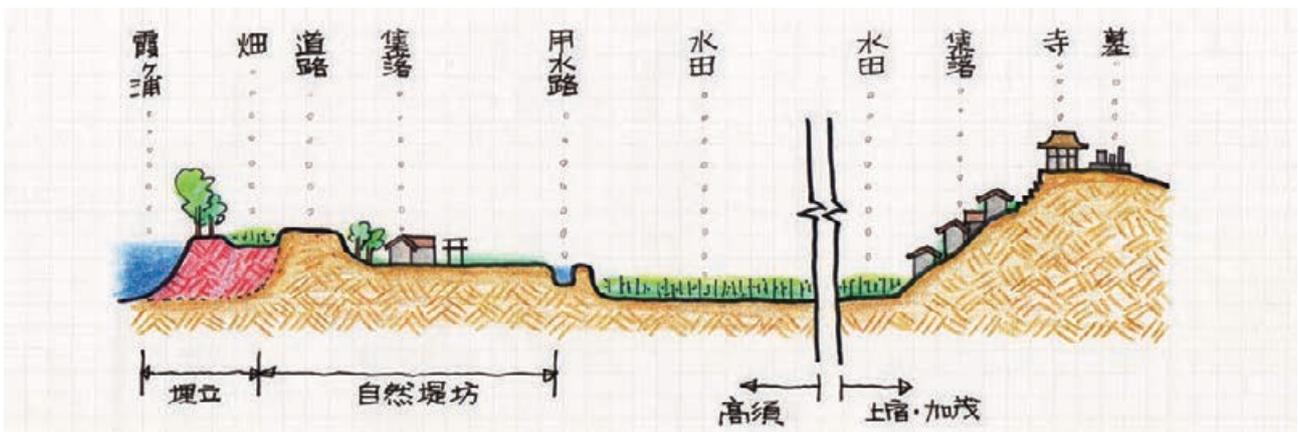


図8 断面ダイアグラム

B-01

かしまくん まつらのこう いばらぎけん かしまし ひらい あおう くにすえ ながす さだ きたき ねさんだ しもはなわ やわら
 鹿島郡松浦郷／茨城県鹿嶋市平井・粟生・国末・長栖・佐田・木滝・根三田・下埜・谷原 担当：五十嵐早紀（千葉大学）



図1 比定の大字領域(筆者加筆)GoogleMapより



図2 土地条件図(筆者加筆)国土地理院より



図3 迅速測図(筆者加筆)国土地理院より



図4 敷地境界線のブロック塀跡 撮影=五十嵐

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

鹿島郡松浦郷は現在の鹿島市平井・粟生・国末・長栖・佐田・木滝・根三田・下埜・谷原に比定されている。平井は調査地の中で、唯一鹿島灘に面した地域であり、比定スケールも大きい。粟生・国末が東西に分かれているが、これは鹿島臨海工業地帯建設によるものである。周辺は鹿島神宮の影響で、神社や寺院が多数あり、さまざまな祭りが行われていた。

2) 実見によって得られた客観的情報

海岸沿いである平井を重点的に実見し、続いて谷戸である木滝、佐田、下埜を実見した。

・環境

平井は鹿島灘に面しており、海岸線とほぼ平行に浜堤がみられた。これは、波によって移動してきた堆積物によってできるため、以前は浜堤まで波が来ていたと考えられる。しかし、現在はかつて海であったところが埋め立てられ工場地帯となったことにより、海岸線が遠のき、漁業を営む家も減少している。

また、谷戸地形の木滝、佐田、下埜は低地に水田、斜面から台地上に集落という形が見られた。

・集落構造

松浦郷全体を通して人の出入りが少なく、特に平井は古集落の手入れが行き届いておらず、かつて住居があったとみられる跡がよく見られた。

平井は浜堤よりも海側にまで集落が広がっており、庭の土壌は海砂であった。かつては農業が主体であったが、現在は工場地帯の影響で減少している。

木滝は緩やかな斜面上に集落を形成しており、台地上には宅地開発による新しい集落が形成されていた。一方、佐田は低地と台地の高低差が大きく、台地上に集落を形成していた。また、下埜は急な斜面上に住宅が並び、台地上にまで続いていた。

・地域経営

平井の人は県道255号から上がる標高が高いところを「オカダ」、一方自分たちの住むところを「ハマダ」と呼んでおり、独自の呼び方があった。また、県道付近には八幡宮があり、周辺の人々の信仰であった。現在も八幡宮から鹿島神宮へ続く参道とみられる道路が残っている。



図5 ハマダとオカダの間にある八幡宮 撮影=高橋



図6 波がきていたことが分かる貝殻 撮影=高橋



図7 かつての海岸線に通る道路 撮影=五十嵐

3) 考察

かつてこの村は農業を主体として成り立っていたが、鹿島臨海工業地帯ができたことにより生産主体が大きく変わった。鹿島臨海工業地帯は1960年より計画され、民有地であった農地を用地買収することで確保し、1973年に工事が完了した。現在は茨城県下最大の工業集積を誇る。これらの影響で、農業を営む家は減少を続け、埋め立てたことにより漁業も衰退し、元にあった生産地を失っている。ここに、手入れがされていなかったり、住居跡が多い理由が伺え、工業地帯の影響力の大きさが分かる。

内陸部の木滝・佐田・下埜周辺も工業地帯の影響を強く受けており、低地の農地も耕作放棄しているところが多々見られた。

4) 集落を象徴する風景と名前

「鹿島開発によって拓かれゆく村」

鹿島神宮への参道であったり、谷戸の地形であったり、松浦郷の形を見せるものはあったものの、全体として、鹿島開発の影響が強く見られた。今後この村は近代化によりさらに拓かれ、かつての生業は薄れていくだろう。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

参考文献

編纂委員会編『角川日本地名大辞典 8茨城県』角川書店、1991年
鹿島臨海工業地帯 - wikipedia

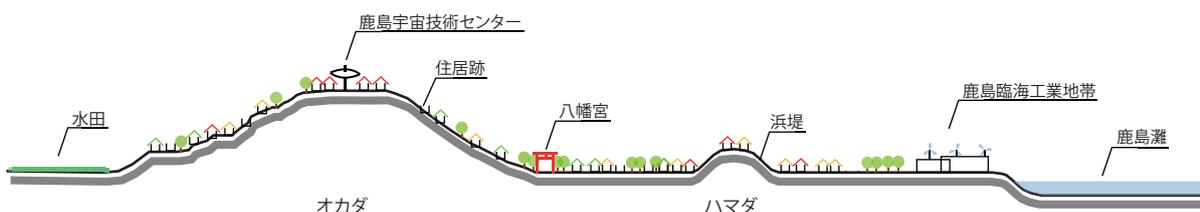


図8 a-a'断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapsより



図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図3 迅速測図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 〈爪木〉屋敷を囲う高い生垣 撮影＝渡邊

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

鹿島郡鹿嶋郷は、現在の鹿嶋市宮中・鉢形・高天原・爪木・大船津に比定されている。

爪木から大船津までの北浦沿いには堤防が築かれており、爪木の入江部分は護岸整備されていることが確認できる。また、爪木・大船津において、砂州・砂礫の位置に集落が形成されている。

宮中の鹿島神宮は神武天皇元年(紀元前660年)に宮柱創建とされる常陸国一宮であり、参道は鹿嶋市街地の茨城県道18号茨城鹿島線から鹿島神宮の大鳥居へと続いている。

2) 実見によって得られた客観的情報

迅速測図に集落が確認できた大船津(図1丸枠)・爪木を実見した。この二つの地域について報告する。

・環境

〈大船津〉水田の名残である暗渠化された水路と漁港の跡地を利用した釣り場が確認できたが、生業として田畑や漁業を利用している様子は見られなかった。

〈爪木〉北浦と直結し、昭和中期まで舟の移動経路として利用された江間跡の水田用水路が複数通り、高さ3m程のマキなどによる高い生垣が敷地を囲っていた(図4)。

・集落構造

〈大船津〉集落の中心には鹿島神宮の参道が浦の一之鳥居(図5)まで通っていた。参道に対して短冊状に細長い敷地を持つ家が多かった。

〈爪木〉北浦沿いに水田に囲まれた集落が形成されており、中心には熊野神社・天神社・薬師神社が鎮座していた。集落と水田の境目において、南方では水神宮が祀られている様子が、西端では手前に家名・屋号を記した新しい墓、奥に古い墓石を置く配置で同様に並ぶ集落墓地が見られた(図6)。

・地域経営

〈大船津〉個人で管理している広場付き稲荷神社や、小規模な集会所が見られた。稲荷神社は社の背面まで手入れが行き届いていた。

〈爪木〉集落中心部の数軒の家では、屋敷神と見られるものが主要通りに面した形で、それぞれ異なる屋敷神を祀っていた(図7)。中心部の水田跡地は芝生を敷いて住民が集まれるように整備されていた。



図5 〈大船津〉鹿島神宮の西の一之鳥居 撮影＝渡邊



図6 〈爪木〉集落で共通する形式の墓地 撮影＝渡邊



図7 〈爪木〉屋敷神「なったん様」 撮影＝渡邊

3) 考察

〈大船津〉集落中心部に位置する稲荷神社の手入れが行き届いていたことから、住民が集まれるスペースを清潔に保とうという姿勢や神社を継承しようという意思が感じられた。他地域で仕事をしている人が多く、住宅地としての役割が強い印象を受けたが、地域の歴史に対する誇りと鹿島神宮への帰属意識を多くの住人が共有し、先述した一部の人々の努力によって住人の繋がりや集落内での共同意識が保たれていることが持続要因の一部であると推測される。

〈爪木〉集落の南端にある水神宮は、中心的な水路に北浦向きで立ち、主要な生業である水稲耕作を見守っているようであった。この様子から集落の水田を共同で見守る姿勢が窺えた。さらに、共通する形式の墓地、生垣の高さ揃えや水田跡地の広場への更新からも、村としての集団意識の強さや健全な地域経営の実践を推測できる。

4) 集落を象徴する風景と名前

〈大船津〉「参道に参集村」

住民各々が参道沿いに住んでいるという強い意識を持ち、寄り集まって住んでいる地域である。

〈爪木〉「みちまでがウチ、ウチまでがみち村」(図7)

個人で祀っている屋敷神が集落の氏神のように通りにまで出ており、道と家の境界線が曖昧である。

5) 断面ダイアグラム

(図8、9参照)

参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典8 神奈川県』角川書店、1983年

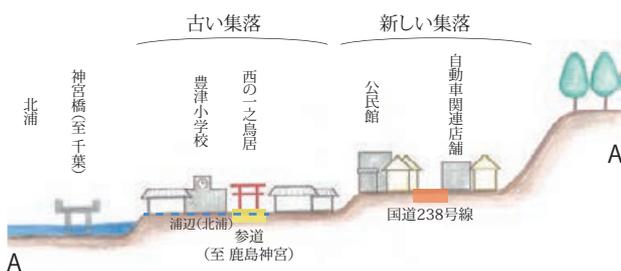


図8 A-A'断面ダイアグラム

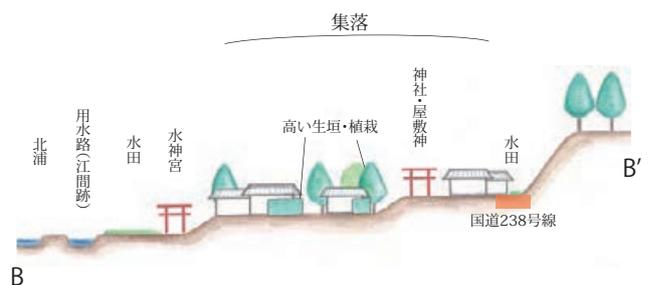


図9 B-B'断面ダイアグラム

B-03

かしまくん ぬまおごう いぼらぎけん かしまし たや さるた たやぬましんでん たのべ ぬまお すか やまのうえ つまぎ
 鹿島郡瀧尾郷／茨城県鹿嶋市田谷・猿田・田谷沼新田・田野辺・沼尾・須賀・山之上・爪木 担当：金盛晋也（千葉大学）



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapsより



図2 集落内の生垣 撮影＝金盛



図3 山之上地区の耕作地 撮影＝金盛



図4 山之上地区南方の谷津田 撮影＝金盛

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

北浦の東岸に位置するこの郷は旧豊郷村に比定され、郡司などの役人が政務を行った建物郡跡が点在していることから、古くから存在する集落であることがわかる。瀧尾郷の中心には谷底平野があり、その周囲を完新世段丘が囲っているため盆地状の地形をしている。谷底平野では古くから稲作が行われ、住居は段丘状、もしくは須賀地区付近に立地している。角川地名大辞典によると、須賀地区は瀧尾郷における中心的存在で、道路が集中し、早くから栄えていた。各年代の航空写真の比較より、沼尾地区の団地を除けばほとんど開発されておらず、少し道路が整備されたに留まる。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

比定範囲の南東に位置する山之上地区の水源は40~50m下の地下水から得ており、かつては井戸も存在していた。水道が通された現在でも生活の大半は地下水に依存している。斜面地は杉に優先される樹木に覆われているが、かつて雑木林として利用されていたもので現在では集落を囲う森のようになっている。段丘上に集落が存在するため浸水や地盤が強いことによる地震等の危険性が極めて低い。現在は自家用の家庭菜園程度の畑作を行っているが、かつては大規模なものであったらしく、同時に養蚕も行っていたが、養蚕はタバコの生産にシフトし、現在ではタバコの生産も行っていない。(約45年前に終了)

・集落構造

集落の住居は山之上地区の中央を通る道路よりも盛り土された地面の上にさらに生垣を作るために家屋を視認することができないほど隔てられている。また一部生垣と樹木が同化したような箇所があり一層家屋を隔離している。

・地域経営

田谷沼の水田は瀧尾郷より東の海岸沿いに位置する明石地区の住民によって開墾され現在でも管理されている。山之上地区は南方にある谷戸に水田がありここにて稲作を行っている。



図5 水田の保有関係(筆者加筆) 地理院地図より



図6 タバコを生産していた家屋 撮影=金盛



図7 じわじわ集落が木々に覆われる様子 撮影=金盛

3) 考察

北浦周辺の集落には珍しく、台地上にまとまった集落が存在する山之上地区は鹿島神宮境内附郡家跡の存在から他の瀧尾郷に比定される大字の集落よりも発生が早いと考えられる。また前述したように堅固な地盤、潤沢な地下水、隣接する谷戸に広がる豊かな水田と、集落の持続に必要な要素が高い水準で全て揃っていることからこの地域において権力を持っていたものが住んでいたことが想像できる。ヒアリングによればこの地にも少子化問題が存在し、現在3人しか子どもが存在していないことに加え、若い働き手は集落の外の企業に大半が勤めており、集落内の農業を主な生業とした人は少ない。また、外から新規の人が入っていくことはなく、集落の規模が小さくなっているがそれにあわせるように集落が木々に覆われ隠れていく。こうした様子に集落がもつ排他性を感じつつもその排他性によって集落が開発を受けることなく、持続してきたことの要因の一端が見えた。

4) 集落を象徴する風景と名前

「全部のせもりもり村」

もともとの非常に高く遮蔽能の高い生け垣にくわえて集落全体を覆っていた斜面上の雑木林が使われなくなったことによって森林化したため山の上地区の集落全体が周囲から隔離された空間になっている。しかし集落単体でも十分持続可能な要素を数多く持つため、この地があえて隔離を選択したのではないかと感じてしまう。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

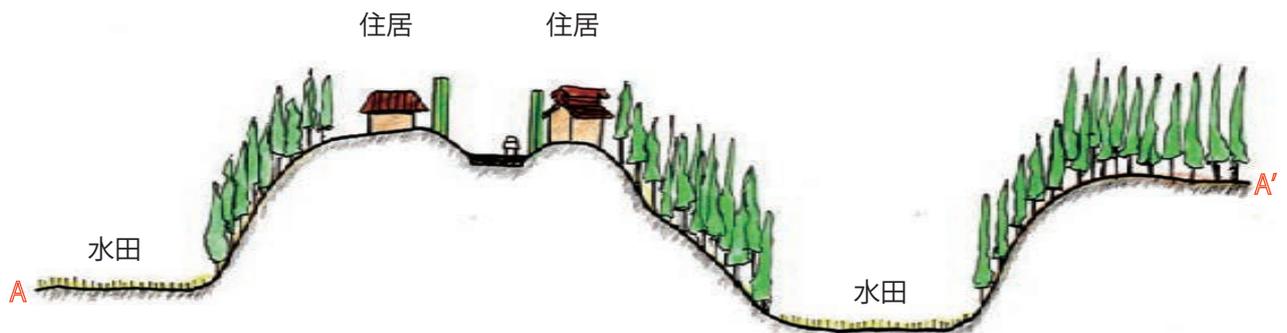


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Earthより



図2 迅速測図(筆者加筆) 農業環境技術研究所より



図3 標準地図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 〈水原〉廃れゆく漁港 撮影=北野

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

行方郡大生郷は現在の潮来町大生・釜谷・水原・築地・延方に比定されている。

北浦に面して典型的な谷戸の地形が見られ、迅速測図(図2)より谷底平野は古くから水田として利用されてきたことがわかる。

大生神社の創建は神護景雲元年(767年)に和州城上郡春日(奈良県桜井市)の地に勧請したのが始まりとされ、大同元年(806年)に藤原氏が東夷東征の際、当地に遷座したと言われている。大生神社と大生神社東部にある養森神社はともに古代氏族・多氏の神社であり、養の祭祀を持っていた。

台地上には水田耕作をともなった弥生時代末期の3世紀後半から、6世紀後半までは多くの古墳が築造され、田の森・養森・棒山・水原・大生など県内最大規模の8つの古墳群がある。

2) 実見によって得られた客観的情報

北浦沿いに見られる集落と谷戸の地形に注目し、釜谷・水原地区を重点的に見て回った。

・環境

〈水原〉北浦沿い集落は堤が作られてから農業を営む集落として発展した。それまでは水害が多く、住宅は床下浸水するなど居住に適していなかった。

〈釜谷〉谷戸には中池があり、中池から水を引いて水田として利用されている。段丘上には神社があり、広大な畑が広がる。

・集落構造

〈水原〉洲吠崎周辺の集落は、区画整理されておらず迷路のようで、昔から変わらない集落構造であることが伺えた。この辺りではかつてより漁業と農業を並行して営んでいる(半農半漁)ことがヒアリングにより明らかとなった。しかし現在は漁業の衰退が見られた。

・地域経営

〈釜谷〉養森神社は大生神社とともに多氏の神社であり、12月1日の例祭では神前にて輪を作り、手拍子をしながら左回りを繰り返し、村内・家内安全、無病息災を祈る。段丘上の古墳群は開発されることなく整備されており、地域の子供達の学習の場ともなっている。



図5 〈釜谷〉谷戸の水田と斜面林 撮影=松木



図6 〈釜谷〉古墳群 撮影=北野



図7 〈釜谷〉古墳とともに生きる村 撮影=北野

3) 考察

〈水原〉北浦沿いの集落は200年～300年前に形成されたと考えられる。この辺りの集落は農業のみ営む家と、農業と漁業を並行して営む家に分けられるが、現在は漁業の衰退が見られる。これは北浦の水質悪化、鹿島臨海工業地帯の完成などによる跡継ぎ不足などが考えられる。衰退する漁業の一方で、浦沿いに堤ができたことによる水害の減少により、農業はさらに発展したと考えられる。

〈釜谷〉中池周辺では、低地を水田、台地を畑として利用する典型的な谷戸の風景が見られる。家屋は少ないがビニールハウスや水田が整備されており、中池が重要な水源であることがわかる。古墳群は現在でも宅地などとして開発されることなく残っており、古墳としての整備や維持管理がこまめに行われていると考えられる。

4) 集落を象徴する風景と名前

〈水原〉「変わりゆく半農半漁村」

前述の通り漁業と農業を並行して営んでいた北浦沿い集落が、時代の変化によって農業中心の生活に変わってきている。

〈釜谷〉「古墳とともに生きる村」

段丘上の大生神社や養森神社を中心とした古墳群は畑や林、あるいは広場などとして整備されており人々の生活と一体となっている。観光の場や子供たちの学習の場となる貴重な財産である。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)



図8 図3 A-A' 断面(立面)ダイアグラム

B-05 なめがたぐんおうがごう いたこちようおおが あそうちよう ねごや くらかわ うぎき やばた いしがみ しらはま
 行方郡逢鹿郷／潮来町大賀および麻生町根小屋・蔵川・宇崎・矢幡・石神・白浜 担当：甲斐貴彬（早大B4）



図2 土地条件図（筆者加筆）国土地理院より



図3 迅速測図 国土地理院より



図4 「アグリサポート麻生」の立札 撮影＝甲斐

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

北浦沿いの海岸平野とその奥の谷戸から成る。白浜から対岸の鹿嶋市まで北浦大橋がかかり、県道186号線が郷域内を南北に貫いている。土地条件図から白浜、宇崎、矢幡の沿岸部で砂州上に集落が立地していることが分かる。

宇崎には嬪野(よめの)神社、白浜には成光寺や稲荷神社等の寺社がある。

2) 実見によって得られた客観的情報

迅速測図で集落が見られる山際の根小屋・矢幡と沿岸部の宇崎・白浜を実見した。山際の集落は本調査では千年村として評価することが難しかったので、沿岸部について報告する。

・環境

北浦に沿って高さ2、3 mほどの堤防が築かれ、西側には複雑に入り組んだ山地斜面が見られた。

耕作放棄地は見られず、大部分が水田であった。特に宇崎の水田には「アグリサポート麻生」と書かれた立て札があり、水田の管理が外部に委託されている様子が見られた。

・集落構造

海岸平野を水田として利用しながら、点在する砂州上に屋敷林で囲まれた集落または10軒程度の家のまとまりを構えるという集落構造であった。

沿岸部の集落の中でも白浜が最も大きく、街区は入り組んでいた。

・地域経営

宇崎にお寺はなかったが集落の端に墓がまとめられた区画が見られた。

白浜には成光寺、稲荷神社があり稲荷神社の立て看板には二月初午に例祭があると書かれていた。

集落のまとまりごとに数隻の船が泊まる船着き場が見られたが、聞き取りによると宇崎では現在は2、3軒ほどしか漁を行っていないとのことだった。その中でも白浜には漁業組合があり、その前の船着き場には10隻ほどの船が泊まっていた。



図5 白浜の路地 撮影＝高野



図6 白浜の漁港 撮影＝高野



図7 ひとつの集落単位(田んぼに浮かぶ村) 撮影＝甲斐

・観光

郷域外ではあるが、宇崎地区西の高台に「なめがたファーマーズヴィレッジ」、「レイクエコー」、「白浜少年自然の家」といった体験型学習施設があった。

3) 考察

砂州上の安定した土地に集落を構え、その周りを水田にするという千年村として評価に値する構造であった。この単位が沿岸部で点在し、各々で生産地を保有してきたと考えられる。北浦大橋および県道186号線の開通により対岸の鹿嶋やそのほかの地域へのアクセスが便利になったことから、他地域へ働きに出ようになり、農業を基盤とした生産形態が変化しつつあると推測できる。一方で、自然環境や農業をテーマとした体験型施設や「アグリサポート麻生」の存在から農業者人口の減少等の農業を取り巻く問題に対して積極的に取り組む意識が見られた。この活動は生産地の保存に大きな役割を果たしており、そのおかげで集落の姿が残り続けている。これらは小さい集落単位で行われているとは考えにくく、沿岸部における集落同士の関係性を推測できる。

4) 集落を象徴する風景と名前

「田んぼに浮かぶ村」

砂州上に集落を構えながら、生産地である田畑を見守ってきた村。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

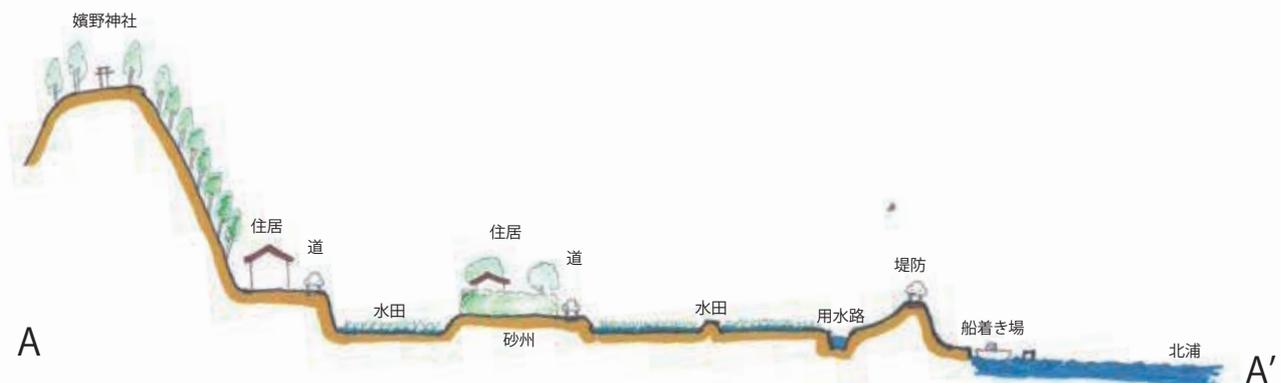


図8 断面ダイアグラム(筆者作成)

本稿では利根川水系の末端に位置し海岸部に接続する霞ヶ浦周辺の千年村候補地の集落形態の検討すべき特徴について記しておきたい。

1. 霞ヶ浦周辺の地形と千年村候補地の特徴の概要

茨城県から千葉県境には利根川が流れその両側には台地が続いている。

今回疾走した茨城県霞ヶ浦はその西側を稲敷台地の先端とし、東側は鹿島台地と呼ばれる。また利根川の南側にあたる千葉県北部は下総台地と呼ばれる。いずれも洪積世に形成された土地である。また川に沿っては一段低い沖積低地がひろがり、霞ヶ浦では浅い湖沼へと展開する。これらが稲作や現在特産物の蓮根栽培や小規模の漁業をささえる。また台地と低地との間には部分的に河岸段丘が形成されている。これら一帯に千年村候補地(「和名類聚抄」から大字規模以下にまで比定された既往成果を千年村プロジェクトによりプロットした場所)が多く点在している(図1)。



図1 約6000年前(縄文時代)の関東平野。霞ヶ浦周辺は千年村候補地との連関を強く示している。
出典: www.city.ryugasaki.ibaraki.jp

また低地と遠浅の元内海で構成されていた霞ヶ浦はその水際を、この千年にわたって自然変化と人工的開発の両面から大きく変えていった。

このような環境の中で、台地、もしくは河岸段丘に比較的古い集落が形成され、沖積低地を生産の場所として展開していくという立地が見られた。これをここでは総称して段上集落とする。それとは別に霞ヶ浦に平行に展開する集落配置がみられ、これを仮に浦沿集落と呼ぶことにする。結果的に段上と浦沿に加え、従来の低地部の微高地上の低地住居が見られた。段上と浦沿い(岸边沿い)そして低地上の微高地という集落配置の傾向は2012年の千葉県の疾走調査にも共通するパターンであった。

ただし段上集落は霞ヶ浦の西側に特に多く見られた。また、そこでの千葉県の土地利用のパターンとは明らかに異なる点があった。それについて次に検討する。

2. 千葉県の類似例と比較した場合の霞ヶ浦の段上集落の特徴について

千葉県の段上集落は〈台地上の畑-中腹に位置する集落-低地で行われる稲作〉という構成が一般的であった。これは自給のみならず多様な交換用作物の観点からもよく考えられた土地利用であった。しかしながら霞ヶ浦の段上集落において純然とした畑作地を持つ例は稀であった。それは、千葉県に比べて各大字の所有する台地の面積規模が小さく、それぞれの集落は中腹のみならず台地上にも展開されているからである。おそらく台地上は集落が優先され付属する自家栽培用の畑を保有する形態が一般的である。

この相違の第一の理由には土地の高低差があげ

られる。たとえば千葉県下の千年村候補地の一つであった武射郡長倉郷(現山武郡横芝町長倉)はその千葉県北部の千年村を表す代表的な例である。

国土地理院による電子国土Webにおいては各地の標高を得ることができる。それによると同地の台地上の畑作地の標高が約35m、台地際の河岸段丘上の集落の標高が約20m、そして川際の稲作地は約5mであった。同じく埴生群玉作郷(現成田市松崎・上福田・下福田)においては畑作地と集落が混合しているものの約30m、川際の稲作地は約5mであると、共通する高さの傾向が見られた。

これに比べて今回訪れた霞ヶ浦西岸の千年村候補地の標高を以下に挙げる(なお所有関係については未調査である)。

・共01 信太郡阿弥郷(現土浦市烏山および阿見町阿見)

〈台地上の畑作地はないー集落部(阿見)23mー浦沿の耕作地2~3m〉

・共02 信太郡高来郷(現阿見町竹来)

〈周囲の畑作地25mー、集落部(竹来)20mー浦沿の耕作地2m〉

・共03 信太郡嶋津郷(現阿見町島津から美浦村舟子・木原)

〈集落部(舟子)20mー浦沿の耕作地2m〉

・共04 信太郡信太郷(現美浦村の大部分)

〈集落部(宮地)20mー段下の耕作地4m〉

・共05 信太郡乗浜郷(現桜川村全域および東村阿波崎・伊佐部)

〈台地上はゴルフ場へ転用25mー集落(阿波崎)3mー浦沿の耕作地0.1m〉

・共06 鹿島郡幡麻郷(現神栖市下幡木)

〈集落(下幡木)3mー浦沿いの耕作地1m〉

といった具合であった。

近世に浮島であった共05乗浜郷と共06幡麻郷のみ低地上の微高地であるが、その他の上記の地域はすべて段上集落であった。しかしながらこの段上集落は千葉県に比べて相対的に標高が低い。その結果台地上の土地もさらに有限となり、先にも記した通り千葉県の事例と異なって一括した畑作地を持つまでには至っていないのであろう。

この土地利用のキャラクターは、同地の初期的な立地特性をよく表している可能性がある。というのも縄文時代中~晩期に形成された上高津貝塚を含む記念公園・上高津貝塚ふるさと歴史の広場の標高も約26mであり、上記の段上集落の高さと同様の傾向と立地条件を持っているからである。霞ヶ浦の場合、低く狭小な台地が集落の発生地となり、その後続く交換経済用の農業、漁業生産は、その下の浦沿いを歴史的に人工開発することによって発展させてきたと推測できる。

そのキャラクターが現在に続く時、それは時としてネガティブな現象を生み出す。5月17日に訪れた北浦地区のB-01鹿島郡松浦郷(図2)であったが、付近の鹿島工業地帯のために低地の耕作地が40年前に住宅地に転用された(一番最初に入居してきたという人物にヒアリングを行った)。しかしながら利便性がよくなかったため長期にわたって売れず、最近不動産業者が一括してその土地を購入し、ようやくベッドタウンとして成立しかけているように見えたが、その先行きはまだ不安定であった(図3)。



図2 鹿島町木滝周辺
画面中央が住宅地に転用された低地の耕作地



図3 鹿島町木滝の台地上から住宅地に転用された耕作地を見る。背後に鹿島工業地帯が広がっている。

3. 霞ヶ浦周辺の集落配置の一特徴について

また、霞ヶ浦周辺の迅速測図に既に掲載されていた古集落を訪れる時、たびたび道に迷うことがあった。具体的には共01内の中郷地区、共04内の信太古渡地区、共06内の下幡木地区、B04行方郡大生郷の現潮来町出口、荒久、小屋、新田の4地区が集まった北浦沿いの洲上の微高地である。特に迷ったのは最後者であり、調査メンバーと別れて再び出会うまで一時間を要した。その迷いは道が地形に合わせて曲がっているため、方向感覚を失ったようである。また歩くことによって判明する集落の主要な通りが現れている(図4)。

これらについて地形を客観的資料から検討する

と、ロケーションを把握しやすい浦沿に平行に展開する集落ではなく、台地上、もしくは微高地上であった。これらが霞ヶ浦の千年村候補地に共通する古集落の複雑さを表している。地図でよく眺めてみると、これらはいずれも地形に沿って居住に限界のある地域のなかで集落が発展していった様子を想像することができたが、詳細な検討が必要である。

しかし、これらの特徴は例えば条里制の発展した地区に対して特有の複雑な景観を示しており、その時代の政治形態と集落の関わりを考察するなど、その出自を検討することは興味深いだろう。

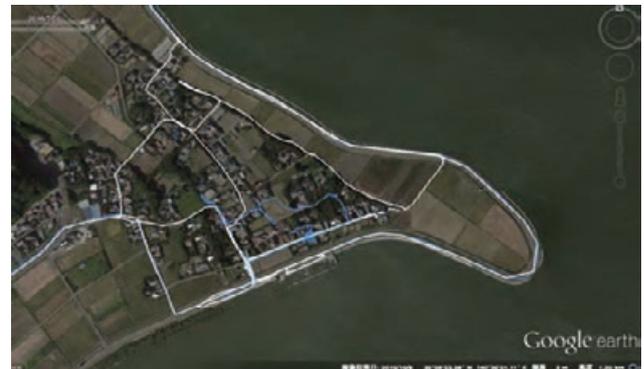


図4 潮来町出口、荒久、小屋、新田地区と調査員のトラックログ。青色がグループ行動。白色が単独行動。地形に合わせて集落を歩いていることがわかる。迷子になったのは、道が地形に合わせて曲がっているために方向感覚が失われたかららしい。

4. 今後の展望(個人的に一番安定していると思っただ地域)

霞ヶ浦の漁村以外の千年村候補地を検討すると特に以下のような傾向を読み取ることができた。

- ・標高差の少なさに由来する土地利用の層の単調さ
- ・台地、微高地上の複雑な自然発生的(非条里制的)集落配置

これに台地上の畑作地の展開が加わると、非常に安定した景観が生まれると実感したのは、B03 鹿島郡瀧尾郷(現鹿嶋市須賀)である(図5)。

現在まであまり開発は進んでおらず、1970年代の航空写真と比較しても少し道路が整備されたにとど

まる。

須賀の三叉路には樹齢の高い大木が残され、それぞれ神社や小学校への入口となっている(図6)。それを元に自然地形上に発展したと思われる街道沿いの集落の背後には広大な耕作地がある。そしてその周囲を鹿島台地が取り囲み多数の寺社が点在している。全く無名であっても十分な生産が確保されている優良な千年村のあり方を感じることができた(図7)。

なお筆者が参加したグループは2日目のAルートには立ち寄っていないことを考慮されたい。

参考文献

千葉県千年村と限界集落の立地に関する比較研究

高橋大樹*梶尾智美*木下剛*池邊このみ*



図5 鹿島町須賀
太平洋と内海、台地と低地に挟まれ、関東東部の複雑な地形を全て含んだかのような場所。



図6 鹿島町須賀の中心部分にある三叉路の大木が密生する様子。



図7 鹿島町須賀の背後に広がる耕地から中心部の神社の森を見る。

調査グループの間で、湖岸に点在する集落の湖との繋がりの希薄さが再三指摘されていた。しかし、これらは背後の農地や丘陵にバックアップを持っていたことによる「諦めの良さ」なのではないか。ゴージャスな民家の建て替えは、単に漁業を破棄したやる気の無さというよりも、したたかな家の存続の意思にも見えてくる。

1. 漁村の陸封の歴史

平地の印象が強い茨城南部だが、あらためて地形図を見ると、この地域は標高30メートルほどの丘陵と水面を含む低地とが入り組んだ地形をなしていることがわかる。霞ヶ浦もそうした低い台地に挟まれた低地のひとつである。東南を稲敷台地、西北を行方台地という洪積台地に挟まれ、それが霞ヶ浦の大きな輪郭を作っているが、水辺には僅かな平地があって、湖を縁取っている。

潮来市から行方市にかけての霞ヶ浦西岸も、低地と台地のコントラストがはっきりした地域である。湖岸には標高5メートル以下の低地が続き、漁村由来の集落が点在している。湖岸と平行に古い街道、現在の国道355号線が走り、所々に宿場町がある。低地の西側には行方台地の崖線が見える。台地には開析谷が枝状に入り込み、雑木林の丘と畑地と、等高線を描く谷戸の水田とが複雑に入り組んでいる。それぞれの地形も土地利用も異なっているが、村域は広く、低地と台地にまたがっている。

私たちは行方郡香澄郷、現代の行方市麻生町富田のあたりに車を停めて周辺を歩いた。西浜の街道沿いでは、夏祭りのための山車が用意されていて、比較的若い住民が作業に集まっており、その周辺の共同体が、少なくとも祭事に関してはまだ維持されていることを伺わせた。街道と湖岸に挟まれた低地

は、その細長い地形のために土地利用が線状かつ縞状のパターンを描いているため、「縦断方向の風景」と「横断方向の風景」の対比が鮮やかである。街道や湖岸にそって移動すると均質な風景が続くが、内陸から湖岸にむけて移動するとまるで年輪のように土地利用の縞が観察できる。おおむね台地の上部は畑地、谷は水田になっていて、台地の端は斜面林が残る崖線となっている。低地は圃場整備されたような水田が広がり、街道沿いの宿場町があり、さらに水田があり、漁村があり、湖岸の護岸施設がある。

明治期の迅速測図から最新の空中写真まで、地図や写真で地域の変遷を時系列に眺めると、この土地で最も変化が激しいのは水際の形状である。1940年代の空中写真からは、西浜や仲浜の集落が水面に直に接していることが見て取れる。浜と屋敷の間に道はなく、湖岸に沿って濃い樹林帯が見える。防風林のようだ。浜には小さな舟が点々と繋がれ、それぞれの家がそのまま水際へのアクセスをもっていたことがわかる。1960年代の空中写真では、浜と集落の間に湖岸の道路が建設されているのが見える。「縦断方向」のインフラの侵入である。ただ、浜に係留されている舟はまだ1軒に1艘ほどの分布があり、道路を跨ぎながらも家と湖は個別の直なアクセスがあっただろうことがわかる。1970年代のいくつかの空中写真では、護岸の施設の様子はそれほど変化がないが、係留されている舟の数が少なくなり、湖岸には植物が繁茂し、水質汚染が進んだらしく浮遊性の藻類が発生していることも見える。80年代の空中写真には、道路と湖の間に護岸堤が建設される様子が写っている。堤の外には船溜まりが作られ、舟はそこに集められていて、これは現在の湖岸の形状にそのまま引き継がれている。現在では屋敷と湖の間に、道路と排水路と護岸堤があり、小さな漁港が集落ご

とに設けられている。こうして施設化した湖岸によって、それぞれの家と湖との空間的・直接的な関係は絶たれている。

仲浜の集落と霞ヶ浦とを隔てる堤防と排水路と道路の間には、いかにも使いかたねて放置されたような幅数メートルの空地が続き、小さな樹木の苗が植栽されていた。その、まるで途方に暮れたような空白地帯の残存は、集落が湖への関心を失った印でもあるように見えた。それぞれの屋敷の庭先や納屋の様子からも、糸魚川の海岸で見られたような、陸封された漁村の海への志向が感じられなかった。この浜に限らず「明らかに漁村由来の集落であるのに、現在の姿からは湖との繋がりが感じられない」とは、調査グループの間で再三指摘されていたことでもある。

2. 堤防の理不尽さと出桁化粧造

私たちは仲浜の集落の1軒、堂々とした出桁造の民家にヒアリングする機会を得た。社寺建築のようなその家は、意外にも比較的新しく、平成3年(1991年)の建築だった。インタビューに応じてくださった家主によると、やはりかつては庭先が浜で、そこから舟を出して漁をしていたという。今でも少しは漁をし、鰻などを採っている。一方で、湖とは反対側の「山のほう」に、水田や山林も所有しており、農業も営んでいる。山林は多くが松だったが、マツクイムシの被害が多くなってきたため、枯れる前に役立てようと伐採して製材し、その木材でこの出桁化粧造の家を建てたとのことだった。

このお話は示唆的であった。漁業だけでなく、農業や林業のリソースがあることは、村域が湖岸から丘陵まで跨っていることと符合しているし、それはもともと、「湖の幸」がそれで自立できるほどには豊穡ではなく、それも集落が湖との接続に固執しない理

由であるかもしれない。

国土交通省によると、霞ヶ浦の開発事業には、治水と利水の両方の目的がうたわれている。

<http://www.ktr.mlit.go.jp/kasumi/kasumi00118.html> 国交省関東地方整備局霞ヶ浦河川事務所

「治水」は、主に沿岸部の洪水対策である。繰り返しこの地域に被害をもたらした洪水を防ぐために、水門や排水路、堤防の建設が明治以来連綿と行われてきた。興味深いのは、霞ヶ浦の洪水が頻発するようになったのは、利根川の東遷をはじめとする江戸の洪水対策がその原因として挙げられていることである。

http://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/83028/83028-8_p1.html 国交省、

河川トップ／統計・調査結果／河川

幕府が繰り返し実施した、江戸川への河川水の流入制限や利根川の拡幅によって、利根川下流に土砂が多く堆積し、水害を深刻化させたという。大都市・江戸の洪水対策のとぼっちを受け、霞ヶ浦は(江戸を襲うかもしれなかった数々の)洪水を引き受けてきたのだ。

一方「利水」は、水源開発である。現在、東京の上水はその80%を利根川水系に依存しているが、昭和43年から始まった霞ヶ浦水源開発によって、かなりの割合が霞ヶ浦から取水され、東京に送られている。国交省霞ヶ浦河川事務所の説明によれば、霞ヶ浦の護岸堤防の高さは洪水対策だけでなく貯水量にもよって設定されている。

つまり、霞ヶ浦は東京の洪水対策のために「制御できない水」を押し付けられ、一方で東京を潤す「制御された水」のために貯水施設化しているというわ

けだ。東京の洪水を引き受け、東京へ真水を送るために、仲浜や西浜は湖との連続を諦めたのである。「より上位の広域的な目的のエンジニアリングによって設計・施工されることで、局所的には理不尽な見え方・あらわれ方をする」というのは土木構造物の特徴である。霞ヶ浦の護岸堤はまさにそのようなものとしてある。

そんな土木施設の理不尽さに対して、浜の集落の
一見無関心な態度はむしろしたたかであるし、出桁
化粧造の、あまり文脈の感じられないむやみにゴー
ジャスな意匠は、集落と湖の関係を絶った護岸堤へ
のしれっとした抵抗であり、家の存続の意思のよう
にも見えた。

これまで重ねてきた疾走調査ならびに詳細調査の中で、今回の霞ヶ浦周辺疾走調査の画期性を指摘すれば、千年村プロジェクト側が行方市麻生に対して特段の提案をしなかったことであろう。もう少し丁寧に述べると、千年村プロジェクト側が特段に提案する必要がなかったというよりも、すでに麻生で様々な取り組みがなされており、そのことをむしろ千年村プロジェクト側がきちんと学ぶべきだとの認識を調査グループが共有したところこそが、きわめて重要である。

これまで千年村プロジェクトが疾走&詳細調査で遭遇してきた「寡黙な村」に比較して、麻生が所在する行方市は、初めて出逢った「饒舌な村」であった。もちろん遭遇した当初は「寡黙」だと感じて、付き合いにつれ「饒舌」であることが判明するのは、村でも人でも同様である。その点でいえば、出逢った当初から行方市が「饒舌」＝対外的発信が盛んであることは、今回の疾走調査でたまたま立ち寄った「なめがたファーマーズヴィレッジ」でも実見したところである。この施設は行方市・J Aなめがた、そして駅ナカに展開する「らぼっぼ」等で知られる白ハトグループの協力で運営される体験型農業テーマパークであり、小高い丘に立地する小学校跡地を再利用している。公式サイトで述べられる次のことば(このような詩的表現は、おそらく全国各地で確認できる「饒舌」な事例のひとつである)からは、小学校跡地という場所のもつ歴史性・物語性(いうなれば場所性)に配慮していることが、うかがえる。

>>

2013年に少子化で廃校になってしまったものの、地元の人たちの成長を100年以上も見守りつづけてきた、とても大切な場所です。この地をもう一度、笑顔でいっぱいになりたい。たくさんのお会いをつくり、

たくさんのお夢を育てていきたい。そんな想いがあったから、あえてこの場所を選びました。

<<

ありがちな「饒舌」さに留まらず、行方市独自の「饒舌」さを示すのが、地域ポータルサイト「なめがた日和」である。これは行方市と株式会社フューチャーリンクネットワークとの官民共同事業として企画・運営されており、中でも「なめがた今昔物語」「なめがたヒストリー」のコンテンツは、地元の歴史を丁寧にひもといている点で、千年村プロジェクトとしても学ぶべき点ばかり多い。ちょうど千年村プロジェクトの関東班では、2016年の1月から4月にかけて「先達に学ぶ」と題した勉強会を計3回開催し、千年村プロジェクトを進める上で大いに学ぶべき「先達」から、直接に学ぶ機会を得たところであった。その意味で「なめがた今昔物語」「なめがたヒストリー」は、千年村プロジェクトの「先達」と呼んでも過言ではないだろう。

今回の麻生での経験は、千年村プロジェクトが学ぶべき「先達」の一員として麻生を発見した、と換言することもできよう。

ところで学ぶべき先達とは、当然のことながら、すでに鬼籍に入られた先達も、おられるはずである。千年村プロジェクトに先行する瀝青会が、今和次郎の足跡を追ったごとく、警咳に接することは叶わずとも「死後の門人」として私淑すべき先達を求めてみると、うっかり見落としていた存在に思い至る。宮本常一である。

宮本常一は、世間一般に連想される「民俗学者」の枠には収まり切らない存在であることに異論はないだろうが、ここでは千年村プロジェクトの大先達としての位置付けを強調しておきたい。中でも、以下に取り上げる宮本(2001)『空からの民俗学』岩波現代文庫は、千年村プロジェクトにとって将来も基本図書で

あるべき業績である。

『空からの民俗学』は、写真に映し出された人文景観を宮本が読み解く文章を集めており、「空からの民俗学」「空から見る農業景観」「一枚の写真から」の三部から構成されている。第一部となる「空からの民俗学」には、航空会社の機内誌『翼の王国』に連載された、航空写真から土地の生業や開発の歴史を読み解くエッセイが並ぶ。第二部となる「空から見る農業景観」は、副題「空から見、地上を歩いて考えさせられたこと」の通り、飛行機の窓からの眺めと、地上を歩いての眺めからを重ねながら、農業の変遷・近代化を考察するエッセイである。全体の半分以上を占める第三部「一枚の写真から」は、日本観光文化研究所(観文研)の機関誌『あるくみるきく』に連載された、宮本自身が撮影していない風景写真から、宮本が様々なことを読み解くエッセイである。この、航空写真と風景写真、あるいは、上空からの視点と地上からの視点とが交錯する景観の読み解きは、千年村プロジェクトが疾走調査(の事前準備作業)でグーグルマップや「千年村をみつける」の地図を駆使して仮説を組み立て、また疾走調査や詳細調査で歩きながら観察し考察していることと、重なってくる。『空からの民俗学』には文庫化以前の親本がなく、岩波現代文庫のために新たに編集されたとのことだが、まるで千年村プロジェクトが編集したかと思わず勘違いするほどである。

先に触れた「なめがた今昔物語」では、古い写真を順に並べ、景観の変遷と暮らしの変遷が紹介されている。このような各地で現役の先達が成した業績と、今は亡き大先達の宮本常一が試みた風景写真の読み解きを重ね合わせることも、将来的に千年村プロジェクトが各地の千年村(候補地)に寄与しうる社会貢献のひとつではないかと考えるもので

ある。

「なめがたファーマーズヴィレッジ」<http://www.namegata-fv.jp/>

「なめがた日和」<https://namegata.mypl.net/>

「なめがた今昔物語」https://namegata.mypl.net/mp/konjaku_namegata/

「なめがたヒストリー」https://namegata.mypl.net/mp/history_namegata/

今回霞ヶ浦の疾走調査において、主な生産地である水田のある地形について着目し、浦や周辺の台地の関係から、その変遷や転用、維持される形態についての類型化を試みた。特に、水田の立地する狭小な谷の存在は興味深いものであり、谷の規模や形態について定量的な分析を行い「千年村」の存続理由を考察した。

1. 生産地の変遷と転用

共-05 信太郡乗浜郷浮島(図-1-1)

迅速測図で確認される生産地は台地上に畑、浦沿いの浜には製塩や漁村が発達していた。現在の生産地は台地上において畑が維持され、浦は埋立造成が進み、蓮田となっている。集落の位置は旧来の浦と台地崖線の間位置している。浮島の東側の造成が行われず残された入江状の地区は真珠の養殖場として利用されている。



図-1-1 信太郡乗浜郷浮島平面図

A-01 行方郡板来郷潮来(図-1-2)

迅速測図で確認される生産地は、台地の奥に回り込む谷戸の水田と低平地に展開する水田であった。現在では、台地の奥の水田は維持されているものの、低平地の一部は鹿島線鉄道駅の開設に伴う市街地化、ならびに、内浪逆浦の埋立造成による干拓地、そして、ニュータウン化というように土地利用の転用が進んだ。



図-1-2 行方郡板来郷潮来平面図

A-02 行方郡香澄郷富田(図-1-3)

迅速測図で確認される生産地は、台地上の畑、台地奥の谷戸の水田、そして浦沿いの漁村が展開していた。現在では、漁村としての痕跡は消滅し、一部に佃煮の店舗を残すのみになっている。台地上とその谷戸の畑地や水田は維持されている。集落は台地と浦の中間部に位置し、台地に複雑に谷地が入り込むモザイク状の土地利用となっている。



図-1-3 信太郡香澄郷富田平面図

A-03 行方郡行方郷麻生(図-1-4)

迅速測図で確認される生産地は、台地奥の谷戸から浦に展開する谷上の水田である。現在もこの形態は維持されている。集落は台地の尾根筋の道路に面して立地しており、道路からは、集落奥の谷戸に姿はほとんど確認出来ない状況となっている。

以上が、私が確認した主要な郷の生産地と現在の状態の変遷である。これらを整理すると概ね3つの類型が確認される。



図-1-4 行方郡行方郷麻生平面図

図-1

迅速測図+エコリス地図+地理院地図
+GPSログ(160816-17)をKashmir3D上で表示
速度パラメータ:60km/h(最大)~0km/h(最小)

一つ目は、共05信太郡乗浜郷浮島で確認される浦の漁村から蓮田への変化である。これは浦の交通網から生産地への変転である。水深を埋立造成により浅くし、蓮根栽培作業を容易にした人工地形改変であり、土地条件の文脈を巧みに利用した生産形態の変容である。

二つ目は、A-01行方郡板来郷潮来で確認される生産地の居住地への変化である。内浪逆浦の埋立造成によるニュータウン化が代表的な事例である。これは郷という生活領域のスケールとは無関係に、鹿島臨海工業地帯へ通勤する人々のベッドタウンであったという。一つ目の、生産地の転用とは全く異なり、内浪逆浦という土地のスケールのみに着目された表面的な利用目的に特化した変化である。

三つ目は、A-02行方郡香澄郷富田とA-05行方郡行方郷麻生で確認される、台地の奥に回り込む谷地の水田の持続性である。道路に面する集落や樹林地によってそれらの生産地は台地の尾根筋を移動する陸路であろうと浦を水路として利用しようと外部からの来訪者には容易にその存在を確認することができない。廻り込む谷地が多数存在することによって、生産地を「隠し持つ」ことを可能にした。そこには、地形を巧みに利用し、人間の生産活動が強

かに持続される条件の一つとも考えられる。三つ目の特徴は霞ヶ浦の北側の地域で多く確認された。これは地形図からも明らかなように北側の方が南側地域に比べて、狭小で谷地の開析密度と範囲や角度が複雑であることが大きな要因であると推察される。

南側の郷においては、浦に向かって垂直に近い角度に谷戸が展開するとともに、浦に面した低平地の面積が大きい。そのため、外部からの視認性は高い。これらは水田としての利用が多いものの、一方で水深が深い部分においても養殖場としての利用や多少の埋立造成を行い蓮田にするという生産地の転用事例が数多く確認された。

2. 生産地の形態 - 谷と郷の関係から

1節より霞ヶ浦の北側と南側の郷において生産地の形態に差があることを述べたが、2節では、具体的な数値によりその違いを確認したい。図-2は今回の調査の全体図であり、緑色の範囲は現在の水田を意味している。行程は、筆者のGPSログを速度によるパラメータ調整を行い滞留場所を明示している。図-3と図-4は南側と北側エリアの拡大図になる。

南側の共01阿弥郷、共02高来郷、共03嶋津郷の3つの郷、そして、北側のA02香澄郷、A03麻生郷、A04小高郷、A05行方郷の4つの郷を事例に、主な生産地である水田がある谷地についてその規模や形態を比較した。谷は周辺の台地を開析している範囲、つまり、浦沿いの低平地は含まない範囲において、主流と支流の郷内に入り込む角度、本数、長さ、幅を図面上で計測して比較した。集計表は表-1となる。

角度は、合計が概ね180度を超えると浦からは見えない範囲に生産地が展開することを意味する。共



図-2 調査全体図
 エコリス地図タイル+ GPSログ(160816-17)
 をKashmir3D上で表示
 速度パラメータ:60km/h(最大)~0km/h(最小)

02高来郷を除き、ほとんどの郷において180度を越えることが分かった。支流番号は数字が増えると折れ曲がり回数が多いことを意味するが共02高来郷は一本の谷筋のみで比較的単調なものとなっている。

谷の長さの比較においては、南側は共03嶋津郷の約2000mを除き、1000m未満の谷であるのに対して、北側はA03麻生郷、A04小高郷、A05行方郷では1000m以上で、A04小高郷、A05行方郷では3000m近い延長を持つ。

幅については、南側は共03嶋津郷を除き100m未満の細い谷、北側はほとんどで100~200mの幅を持つ谷が多い。これらの長さや幅を掛け合わせることで生産地の面積の概要が把握できる。この比較においては、南側の共01阿弥郷、共02高来郷では概ね5haとなる。共03嶋津郷の約87haは突出しているがこれは谷というよりも河川の河口部の一部であり広大な範囲で耕地となっているからである。北側はA02香澄郷の除き、24~40haの狭小な谷が台地の奥まで生産地として利用されていることが分かる。

以上、角度、長さ、谷幅の3つの指標を積み上げたものが図-5の「谷と郷」比較表となる。数値が大きくなるほど、谷の形状が複雑かつ谷頭の部分まで生

産地として利用されている場所を意味する。数値が2500以上の南側共03嶋津郷、北側のA04小高郷、A05行方郷の特徴はいずれも集落を取り囲むように台地の奥に谷が廻り込んでいる。共03嶋津郷は若干例外的であるものの、郷の生活を支える生産地を結果的に「隠し持つ」ことができた地区であり、地形を巧みに利用する「千年村」の強かさを垣間見ることのできる特徴であるとも言えるであろう。



図-3 「谷と郷」比較エリア(南)
 エコリス地図タイル+ GPSログ(160816-17)を
 Kashmir3D上で表示した画像を加工



図-4 「谷と郷」比較エリア(北)
 エコリス地図タイル+ GPSログ(160816-17)を
 Kashmir3D上で表示した画像を加工

郷名		支流番号と角度(度)			
北		1	2	3	計
共01	阿弥郷	90	138		228
共02	高来郷	76			76
共03	嶋津郷	90	113		203
南					
A02	香澄郷	73	115		188
A03	麻生郷	134	123		257
A04	小高郷	40	119	75	234
A05	行方郷	58	93	79	230

郷名		支流番号と長さ(m)			
北		1	2	3	計(A)
共01	阿弥郷	764			764
共02	高来郷	540			540
共03	嶋津郷	590	1349		1939
南					
A02	香澄郷	106	360		466
A03	麻生郷	443	676		1119
A04	小高郷	1012	1159	740	2911
A05	行方郷	1413	424	522	2359

郷名		支流番号と谷幅(m)			
北		1	2	3	平均幅(B)
共01	阿弥郷	0	150		75
共02	高来郷	100			100
共03	嶋津郷	300	600		450
南					
A02	香澄郷	70	70		70
A03	麻生郷	130	300		215
A04	小高郷	180	200	60	147
A05	行方郷	270	120	120	170

郷名		生産地面積(A*B)	
北			
共01	阿弥郷	57,300	m2
共02	高来郷	54,000	m2
共03	嶋津郷	872,550	m2
南			
A02	香澄郷	32,620	m2
A03	麻生郷	240,585	m2
A04	小高郷	426,947	m2
A05	行方郷	401,030	m2

郷名	角度計(度)	長さ計(m)	谷幅平均(m)
共01阿弥郷	228	764	75
共02高来郷	76	540	100
共03嶋津郷	203	1,939	450
A02香澄郷	188	466	70
A03麻生郷	257	1,119	215
A04小高郷	234	2,911	147
A05行方郷	230	2,359	170

「谷と郷」の比較

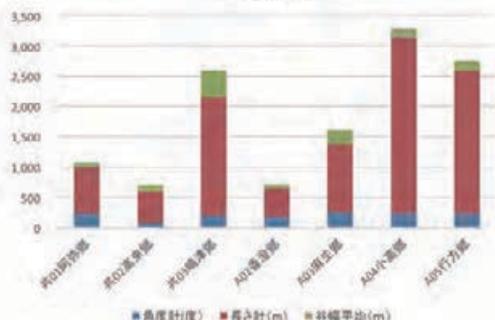


図-5 「谷と郷」比較表

今回の霞ヶ浦疾走調査における、千年村の集落立地の全体像を把握してみる。

集落を地形立地と集落タイプで図1のようにタイポロジーしてみると、霞ヶ浦周辺においても場所によって、集落立地に違いがみられることがわかる。

郷番号	郷名	地形立地(居住域)	集落タイプ
共-01	阿弥郷(阿見)	①台地斜面	農村
共-01	阿弥郷(立の越)	②台地際部	農村
共-02	高来郷(高来)	①台地斜面	農村
共-02	高来郷(大室)	②台地際部	農村
共-02	高来郷(敷馬)	①台地斜面	農村
共-03	嶋津郷(木原)	④自然堤防・砂州	街道(城下町)
共-03	嶋津郷(受領)	①台地斜面	農村
共-04	信太郷(信太)	①台地斜面	農村
共-04	信太郷(信太古渡)	④自然堤防・砂州	街道(城下町)
共-05	乘浜郷(古渡)	④自然堤防・砂州	街道(城下町)
共-05	乘浜郷(浮島)	④自然堤防・砂州	農村
共-06	幡麻郷(下幡木)	④自然堤防・砂州	農村
B-01	松浦郷(平井)	④自然堤防・砂州	農村
B-01	松浦郷(葉生)	①台地斜面	農村
B-03	瀧尾郷(須賀)	④自然堤防・砂州	農村
B-03	瀧尾郷(山之上・田谷)	③台地上部	農村
B-04	大生郷(大生)	③台地上部	農村
B-05	逢鹿郷(根小屋)	②台地際部	農村
B-05	逢鹿郷(宇崎)	④自然堤防・砂州	農村

図1 疾走調査における集落立地パターン

全体を通して、千葉県など多くの千年村にみられた“②台地際部”の地形立地はそこまで多く見られず“①台地斜面部”に多く集落立地が見られたのが特徴的であるといえる。

また、私が今回疾走した霞ヶ浦西南岸と北浦における違いも何点か見られた。

・霞ヶ浦西南岸

①霞ヶ浦沿いだけでなく、内陸の台地斜面沿いに立地する集落が多くみられた。

②自然堤防が発生しやすい、交通の利便性の高い小中河川河口部においては、街道集落や城下町が発達していた。

・北浦

①霞ヶ浦西南岸に比べ、台地上位面が広大で、大規模な畑地利用されていた。そのため、台地上部に立

地する集落が見られる一方、台地際部に立地するものの、北浦沿いに立地する自然堤防上の集落など、多種多様な集落立地がみられた。

②霞ヶ浦西南岸に比べ、鹿島神宮の周辺を除き、街道集落的な集村はあまり見られず、古代より交通の便的に陸路は不利で、純粋農村的な土地利用がみられていたと考えられる。

考察

今回、上記背景より、霞ヶ浦周辺に見られる特徴的な集落立地として、「台地端部斜面に立地する居住地配置とその周辺の土地利用」についてランドスケープの視点より考察する。

1. 関東ローム層の厚さが生み出す地形・地下水

霞ヶ浦流域の台地は関東ローム台地であり、その東端に位置している(図2)。霞ヶ浦流域の台地と、東京の武蔵野台地や千葉県の下総台地との大きな違いは関東ローム層の厚さにある。武蔵野台地のローム層の厚さが5~8mに対して、霞ヶ浦周辺の台地は2~3m程度である。その深さは噴火火山の距離によって、その厚さは比例する。富士山から比較的距離の離れた霞ヶ浦流域はその深さが浅いといえる。

霞ヶ浦流域の地層は、日光や浅間山等の噴火火山灰が断続的に堆積して形成され、地層としては、不透水性の層と透水性の良い層がサンドイッチのように堆積しており、さまざまな層から湧水が湧き出ていると考えられている。

そのため、霞ヶ浦流域の台地の湧水点は比較的に高く、地下水位も高いといえる。地下水位の高さから、台地の縁辺部では手のひら状に小谷が開析され、古くから水田などの土地利用を行ってきたと考えられる。

地盤の安定している、かつ地下水を使うことのできる台地斜面部に積極的に居住地を構えた可能性が高い。

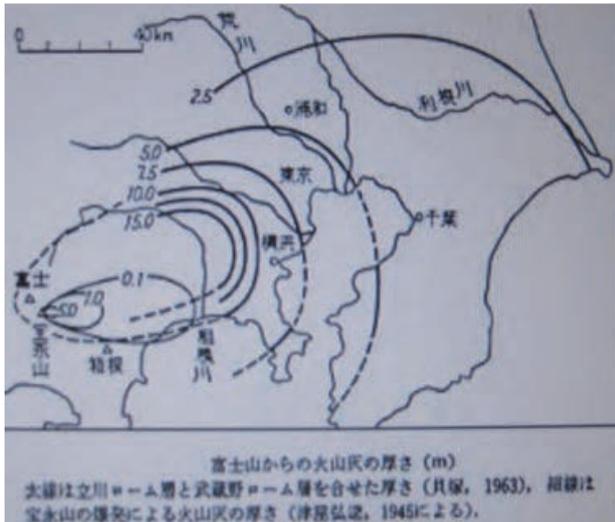


図2 富士山からの火山灰の厚さ

2. 平地林・原野との暮らし

台地端部斜面部の集落立地部より高い台地上位面平坦部に目を向けると、霞ヶ浦周辺の台地はいくら地下水水位面が高いとは言え、「水が得にくい痩せた台地」である。この台地の土壌は関東ローム層を母材とする黒ボク土であり、農耕の視点からすると地力に劣り、作物栽培には困難を伴う場合が多い。特に、この地域の黒ボク土はリンサン吸収係数が高く、作物栽培においてリンサン欠乏を起こしやすい問題点もある。

しかし、このような土地に適した植物もある。ススキとマツ(アカマツ)である。かつて台地上は原野(ススキ)やヤマ(アカマツ)に覆われていたと想定される。ススキは草屋根や農耕や運搬用の牛馬の餌となっていたし、アカマツは薪(燃料)として、都市部に運搬・販売されていた。その暮らしの名残からか、霞ヶ浦周辺の千年村の大字は基本的に台地と低地がセットになっており、低地部の水田だけでなく、台地上の畑地、林も含めた複合的な土地利用を含むよう

な範囲となっている。

現在、平地林や原野の多くが畑地として転用されたため、その姿は一部にしか見られないが、その残された平地林や集落の際を覆う斜面林、屋敷林がモザイク状に一部残っているため、冬季に筑波山から吹く北西の季節風(筑波おろし)や畑地の土塵風から居住域を保護していると考えられる。台地上の集落において、千葉県の子集落や自然堤防集落に見られる家屋を囲むような高生垣が発達していなかったのは、家屋スケールではなく、集落スケールにおいて、平地林・屋敷林を配置することによる防風対策がなされていた可能性が高い。

まとめ

先程考察をした「台地端部斜面に立地する居住地配置とその周辺の土地利用」を今回疾走調査した信太郡高来郷(竹来)に当てはめてみると図3のようになる。



図3 信太郡高来郷(竹来)の土地利用

- ・集落(居住域)の地形立地は台地上でも水を得ることが可能な台地端部斜面

- ・斜面林・屋敷林は集落を囲うように発達(阿弥神社の社叢林の配置も北西からの筑波おろしの影響か?)

・谷底低地には最大限の水田利用

・かつての平地林・原野はパッチ上の畑地として利用

以上のように、霞ヶ浦の台地端部斜面に立地する集落には、そこに立地する意図や理由が隠されており、それがその場の地形・地質・気候と合致した形で存続していることから、千年村の集落立地、集落構造として評価することができると感じた。

一方で、この地域の千年村は、平地林－畑地－集落－斜面林－水田といった、複合的な土地利用、生態系の循環により支えられてきた暮らしがあった。しかし、その暮らしは今回の調査の中で、失われつつあると感じた。霞ヶ浦や鹿島工業地帯といった巨大インフラに向き合うこの地域だけに、今後の千年が具体的に想像できない場所が多く見られるように感じた。

出典・参考文献

霞ヶ浦の水源地としての谷津田の構造と保全 中島紀一
東京の自然史 貝塚爽平

第6章 2017年度筑波山周辺地域疾走調査の目的

6-1. 調査の概要

筑波山周辺地域疾走調査は2017年5月27-28日にかけて行われ、茨城県の筑波山周辺地域に立地する千年村候補地計10箇所を悉皆的に調査した。

また本調査は2015年度文部科学省科学研究費助成基盤研究(B)「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」(26289224)の研究活動のひとつとして行ったものである。

6-2. 調査の目的

本調査の対象地とした筑波山周辺地域では筑波山、加波山、足尾山などをはじめとする筑波連山を取り囲むように千年村候補地が立地している(図6-1)。

筑波山周辺地域は筑波山の豊富な湧水を利用した産業や、石材産業など山と関連させた産業により生活を持続させてきたと考えられる。これらの特徴は、これまでの疾走調査対象地である千葉県(2012年度)、利根川流域(2014年度)、相模川流域(2015年度)、霞ヶ浦周辺地域(2016年度)では、確認されない。したがって特に本調査においては下記(7),(8)の目的を設定した。

本調査の目的を以下に示す。

- (1) 当該千年村候補地の環境的特徴の把握
- (2) 当該千年村候補地の地域経営的特徴の把握
- (3) 当該千年村候補地の交通的特徴の把握
- (4) 当該千年村候補地の集落構造的特徴の把握
- (5) 上記(1)～(4)以外の視点に基づく当該千年村候補地の特徴の把握
- (6) 当該千年村候補地のタイプの抽出と簡潔な命名
- (7) 山沿いの千年村候補地の特異な密集形態の要因の把握
- (8) 河川・湖岸沿いとは異なる山沿いの千年村候補地に共通する持続要因の把握

また、本年度の調査はより河川・湖岸沿いとは異なる山沿いの千年村候補地の特徴を把握しやすくするため、河川・湖岸沿いの低地の千年村候補地も合わせて実見した。

千年村研究は「環境・地域経営・交通・集落構造」の4つの要素が一体となった「継続的な土地固有のシステム」が存在するという仮説の元、それを実証しようとするものである。本調査では筑波山周辺地域に立地する千年村候補地の上記(1)～(5)を概観的に把握し、調査対象地固有のシステム解明の端緒となることと期待する。

また今回の調査においては千年村プロジェクトに新たに参加した学生に向けて、今まで蓄積してきた知見や千年村的視点を引き継ぐことを併せての目的として調査をおこなった。(執筆者:北野)

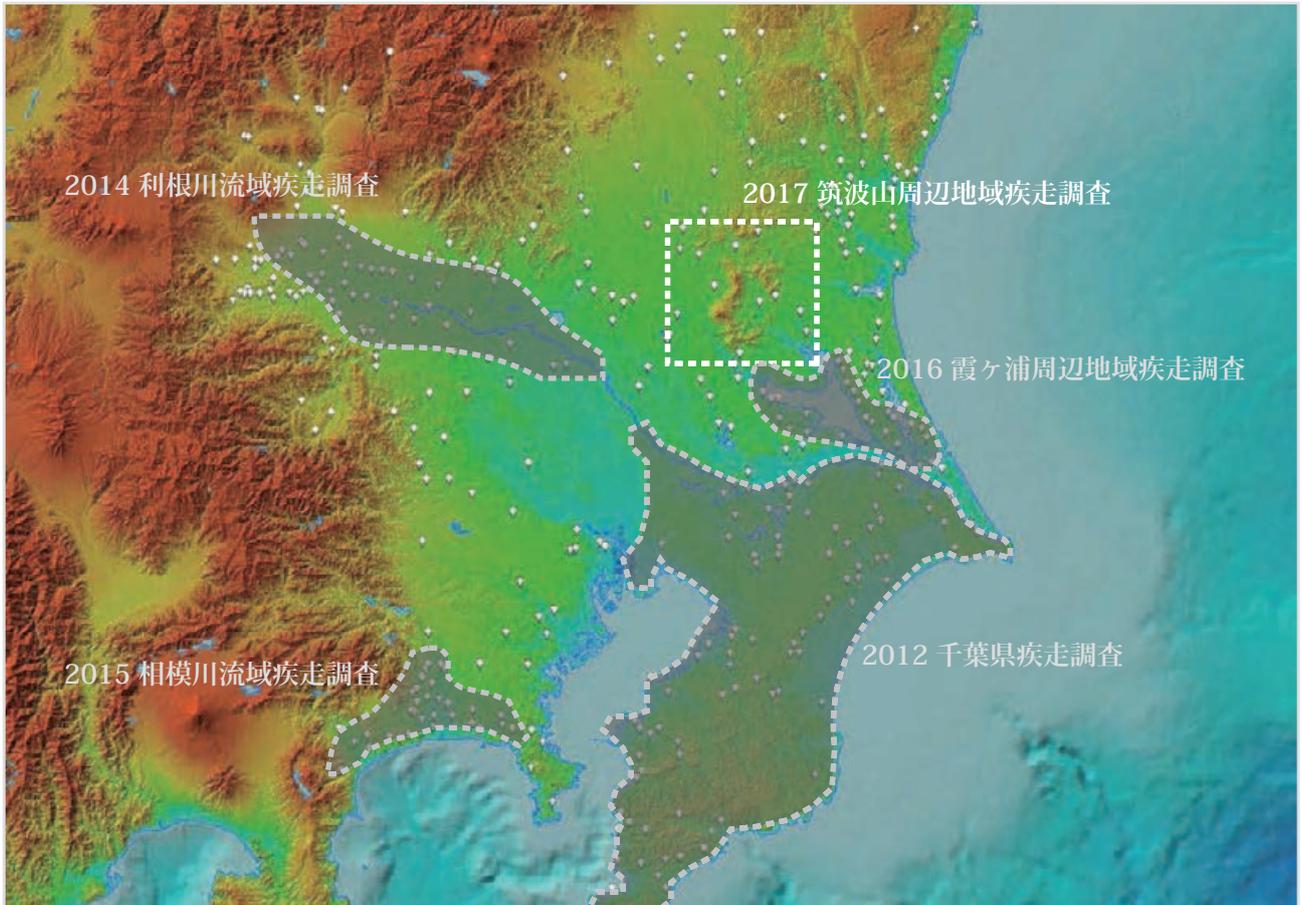


図 6-1 関東地方の千年村



図 6-2 調査対象地

第7章 2017年度筑波山周辺地域疾走調査 各村の報告

第7章では2017年度筑波山周辺地域疾走調査において
悉皆的に調査をおこなった10村の概略を以下の5つの視点から示す。

- 1)文献・地図等の情報から得られる客観的情報
- 2)実見によって得られる客観的情報(環境・地域経営・交通・集落構造等)
- 3)考察
- 4)集落を象徴する風景と名前
- 5)断面ダイアグラム

01	茨城郡夷針郷/茨城県土浦市藤沢	67
02	新治郡月波郷/茨城県下妻市下田・坂井・数須・筑波島・比毛・平川戸・堀籠	69
03	真壁郡真壁郷/茨城県桜川市真壁町伊佐々・羽鳥・源法寺・椎尾・田・東山田・塙世	71
04	新治郡新治郷/茨城県筑西市横塚・久地楽・古郡・向川澄・深見・大塚・徳持・茂田・門井・蓮沼	73
05	真壁郡伴部郷/茨城県桜川市阿部田・羽田・犬田・水戸・青木・青柳・友部	75
06	新治郡巨神郷/茨城県笠間市大郷戸・稲田・本戸・来栖	77
07	茨城郡山前郷/茨城県石岡市山崎・真家・宮ヶ崎・成井・柴間	79
08	茨城郡拜師郷/茨城県石岡市上林・下林	81
09	茨城郡生園郷/茨城県小美玉市花野井・宮田・小曾納・川戸・大谷・竹原・竹原中郷・鶴田・野田	83
10	茨城郡田余郷/茨城県小美玉市上玉里・下玉里・高崎・小川・小塙・川中子・田木谷	85



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleEarthより

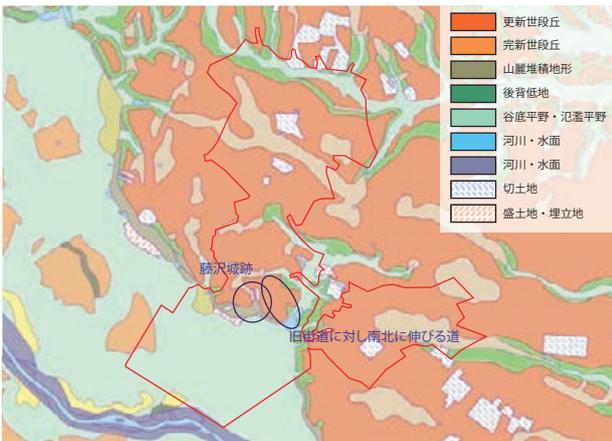


図2 土地条件図 国土地理院より

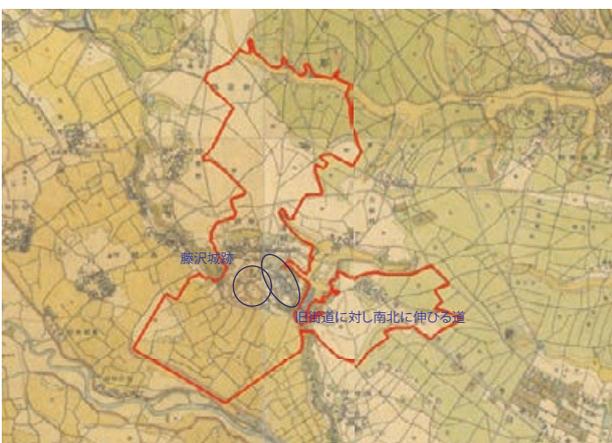


図3 迅速測図 国土地理院より



図4 ため池と低地に広がる田畑 (撮影=稲田)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

茨城郡夷針郷は現在の土浦市藤沢に比定する。

国道125号線(旧街道)沿いに集落が形成されている。郷内に藤沢城跡地があり、そこへ向かう道は、旧街道と垂直に交わる。台地上に住宅や国道、低地に田畑が広がっている(図2)。

明治時代以降、迅速図(図3)では見られない住宅が街道を中心に南北に広がるように増え、藤沢城跡地の敷地内にも既存の道沿いに住宅が建てられている。旧街道の北側の田畑の間には住宅が点在するように建っている。

神宮寺は文明 10年普門寺空海の法弟祐重の開山と伝えられ、藤沢城跡内に位置する。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

低地に広がる田畑では現在も米などの生産が行われていた。ヒアリングによると谷底平野という環境から水の確保に苦勞していたが、昭和49年に行われた土地改良事業により取水環境が整備された(図4)。

・集落構造

街道沿いの宅地は道に対し短冊状の敷地を持ち、その土地を分割しながら世帯数を増やしていた。

また、125号線に対し南東に伸びる道沿いには、長屋門など立派な建築物が多く見られた。ヒアリングによるとこの通りにはかつて藤沢城に関係した人々の武家屋敷(侍屋敷)が立ち並んでいた。またそれらは道から長屋門(陣屋門)―庭―母屋―蔵(納屋)―畑―屋敷林という構造を持っていた。

・地域経営

ヒアリングによると、白山神社の建て替え費は近隣30軒分の還付金で賄われていた。

市指定財の木造地藏菩薩像(図6)や県指定文化財の藤原藤房卿遺跡は地域の財産として保護され、日頃も綺麗に維持管理されていた。

・交通

低地の段丘沿いでは、昭和62年まで筑波鉄道筑波線が通っていたが、現在は茨城県道501号桜川土浦自転車道線(つくばりんりんロード)へ転用されていた。旧常陸藤沢駅は休憩所となっていた。



図5 武家屋敷(侍屋敷)通り (撮影=鈴木明世)



図6 市指定彫刻の木造地藏菩薩 (撮影=稲田)



図7 分割して使われる宅地 (撮影=鈴木明世)

3) 考察

広域で見ると安定した台地上に住み、水の近い低地で生産するという地形による土地利用の明確な差が見られた。さらに局所で見ると宅地も細かく使い分けられている。全体的に立派な屋敷や手の行き届いた庭などから豊かな集落という印象を抱いたが、この豊かさの起因として農業だけではなく、街道沿いの分割された土地の売却や借地による収入があったのではないかと推測される。つまり、短冊状の宅地の表側の住宅は残し、裏側は畑や子孫のための新居を建てたり、借地にしたりと余った土地を使いこなしている(図7)。このように地形や宅地がその環境・時代の条件に応じて使い分けられていた。

また、文化財を地域で協力しながら維持管理していることなどから、地域の集団意識の強さと、歴史に対する誇りを感じた。

夷針郷では宅地を分割し借地にする様子から見られるように、個別的な所作で時間の変化に対応しつつも、地域間で集団的意識を持ち協力し合っていることがこの地域の持続要因の一部なのではないかと推測する。

4) 集落を象徴する風景と名前

「かっちり使い分け村」

地形に合わせて土地を住む/生産する、宅地を変える/残すというように、条件に応じて利用の仕方を明瞭に使い分ける様子が多く見られた。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典14 神奈川県』角川書店、1994年

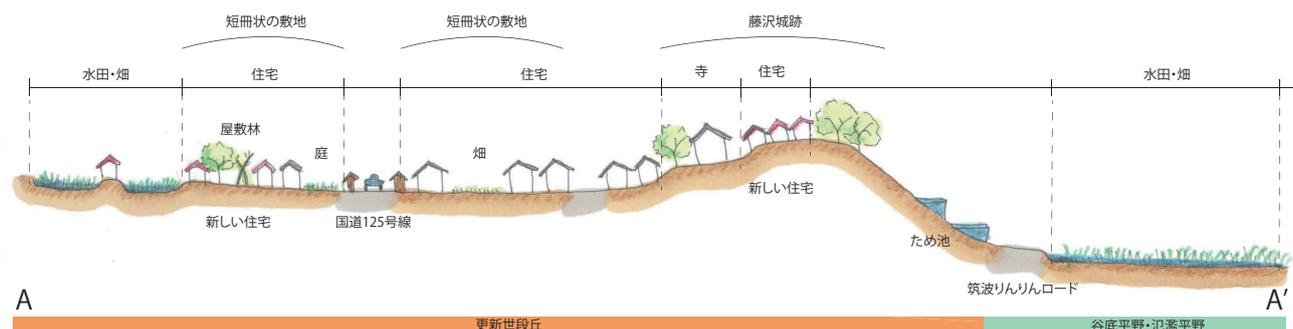


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆)GoogleMapより

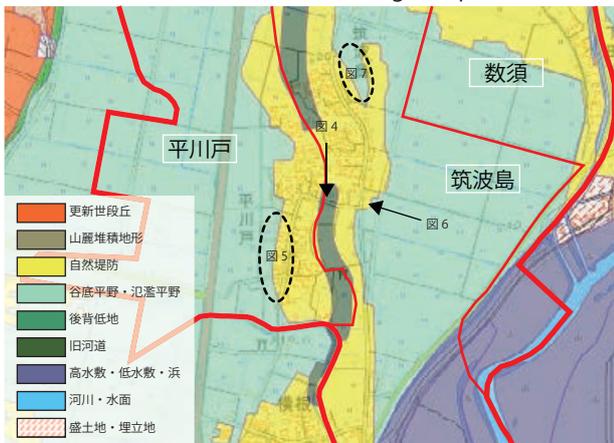


図2 土地条件図(筆者加筆)国土地理院より



図3 迅速測図(筆者加筆)国土地理院より



図4 〈筑波島・平川戸境界〉旧河道(撮影：杉山)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

新治郡月波郷は、現在の茨城県下妻市筑波島・平川戸・堀籠・比毛等、複数の大字に比定される。土地条件図から、比定地の集落は自然堤防の形状に合うように形成される。筑波島・平川戸の隣り合う集落同士の境には旧河道が存在する。迅速測図や航空写真をみると、集落・生産の場所に大きな変化はないが、1992年に常陸バイパスが開通している。

2) 実見によって得られた客観的情報

今回は、筑波島・平川戸を中心に実見した。この二つの地域を報告する。

・環境

筑波島・平川戸ともに、各家の敷地から一段下がった土地は畑に、さらに一段下がった広大な低地は水田に利用され、各家の敷地と周囲の生産地との5-60cmの段差は石やコンクリートで土留めされていた。畑では麦や玉ねぎ・じゃがいもなどが栽培されていたが、所々に耕作放棄地もみられた。過去の災害としては、昭和61年に小貝川が氾濫したが、ヒアリングによると対岸が先に決壊したことで大きな被害を免れたという。現在は災害からのイメージアップのために川沿いが整備されフラワーパークになっている。

・集落構造

〈筑波島〉集落の東端の道路沿いにはブロック塀の家が並ぶが、路地を進むにつれて塀が少なくなり材質も金網やトタン、竹などに変わる。各敷地内の家屋や倉庫は採光のためか西・北側に配置され、どの家も同じような平面構成になっていた(図5)。墓については集落内部に比較的古い共同墓地が、集落外部の道路沿いに比較的新しい共同墓地がみられた。〈平川戸〉集落の東面は防風用とみられる生垣や木々が見られ、カシなどを用いたカシベイと呼ばれる生垣(高さ5m程度)を設けた家もあった(図6)。

・地域経営

ヒアリングによると、筑波島・平川戸は隣接する集落でありながら共同体として明確に分かれており、それぞれに神社・小学校・公民館を持つ。平川戸では子どもが神輿をかついで一戸一戸を回る祭りが存在したという。生産地の管理については、ある50代男性が周辺の水田を一手に引き受けているとのことだ。



図5 〈筑波島〉敷地内の平面配置(撮影:太田)

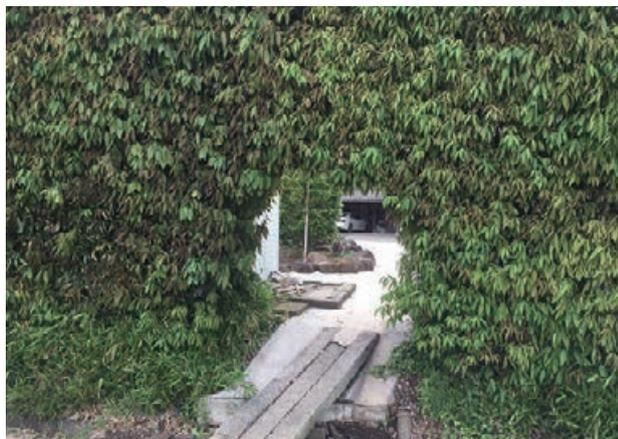


図6 〈平川戸〉カシベイ(撮影:太田)



図7 〈平川戸〉自然堤防際の土地利用

3) 考察

2)の環境の項で示したように、この地域の人々は、自然堤防と氾濫平野の微小な高低差を巧みに使い分けている。集落と生産地の場所は前述のとおりだが、他にも比較的古い共同墓地は安定した自然堤防上に、公民館や比較的新しい共同墓地は氾濫平野を埋め立てた場所に立地することから、集落の中で守るべきものを安全な土地に配置していることがわかる。

また、筑波島・平川戸において特筆すべきことは、過去に河川によって地理的に分断されていたために中核となる神社や小学校区を別々に保持しており、その結果現在までコミュニティの分断が続いていることである。住民は自分の所属するコミュニティに意識的で、どこに集落の境目があるかを正確に言うことができる。この二つの集落が別々なままであることで適切な集落の規模や、安定した生産を保ったことは、持続要因のひとつだと考えられる。

4) 集落を象徴する風景と名前

「微意識村」

旧河道という比較的小さな地形的特徴によって筑波島・平川戸の集落が分断されていること、またほんの数十センチの高低差の土地を巧みに使い分けていることから「微意識村」とした。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

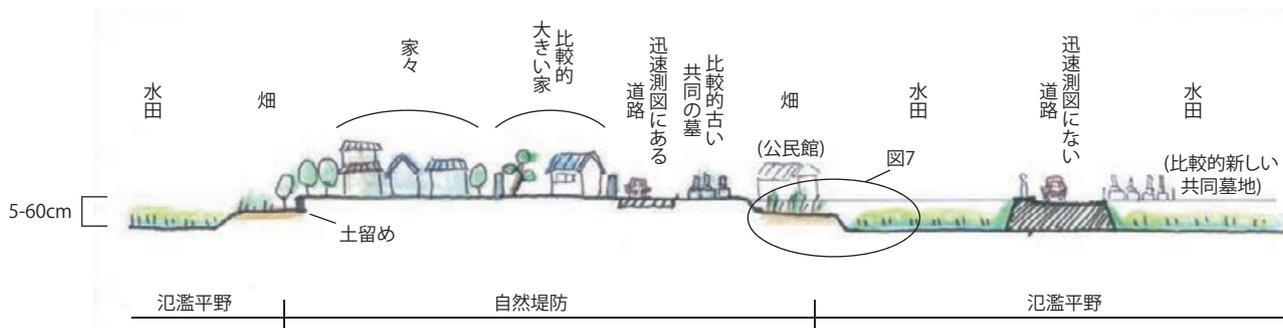


図8 A-A'断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleEarthより



図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図3 迅速測図 歴史的農業閲覧システムより



図4 航空写真(筆者加筆) GoogleEarthより

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

真壁郡伊讃郷は江戸期の伊佐々・田・羽鳥・山田・椎尾・塙世・源法寺・西郷谷・有田・中根の10ヵ村である。いささの川は筑波山西麓を流れて霞ヶ浦に注ぐ当郷付近での別称。伊佐々、羽鳥、東山田、北椎尾、南椎尾に古墳が存在する。古城にある真壁城は真壁郡の中心地に位置している。

地元で産出する真壁御影石による石材加工産業が盛んである。

2) 実見によって得られた客観的情報

迅速測図で確認できる村の形態が現在に至ってほぼ変化していないと見られる伊佐々村を中心に見て回った。

・環境

伊佐々村は完新世段丘上を居住地と畑、低湿地を水田といったように明確に分けた土地利用をしている。

筑波山から流れる小川は用水路として機能し、伊佐々集落南端を囲うように流れて、水田に水を供給し桜川に注ぐ。

・集落構造

集落内は道路幅が2～3 mでとても狭く、住宅の密集度が高い。そして敷地の周囲に高さのある、水分量の多い樹種を用いた生垣が築かれている。これは防火のための植栽であり、かつて住居は藁ぶき屋根であったため火災に十分注意していたことが窺える。

・地域経営

集落内に二か所神社があるが、集落内で神社の管理体制にルールがあり、集落の年配の方が3年交代で受け継いでいる。また、集落農村センターの隣に共同墓地が一か所にまとまって存在する。

・交通

西側の農道までの水田は伊佐々集落の住民が所有している。

廃仏毀釈が盛んで、集落内に寺院跡、壊された仏などがある。



図5 桜川方向から見た伊佐々村(筆者撮影)



図6 防災用生垣(鈴木撮影)

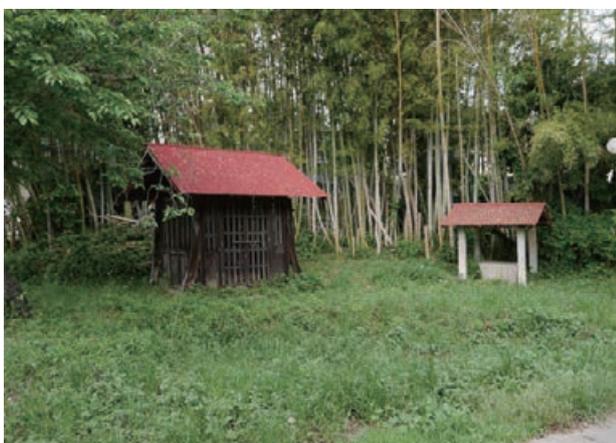


図7 防風のための造りが施された神社(鈴木撮影)

3) 考察

江戸時代は17戸であったが、明治は44戸、現在は100戸あまりの集落である。迅速測図と現在の航空写真を見比べると、村の骨格が変化することなく世帯数が増加していることが分かる。調査により敷地の区分に関して、宅地の配置は規則的でなく、所有の畑が所どころ道路を跨いでいる様が確認できた。また一戸あたりの土地の大きさが一様でなく、一つの敷地に二世帯住宅を構えている場所もいくつか見られた。以上2つの点からこの集落は段丘上の土地を細かく分割し、次世代と土地を共有しながら世帯数を増やしていったことが分かる。

この集落は、段丘上の土地の約半分を畑として利用し、また低湿地は水田としている。石材産業に加えて農業を行い、自給自足の暮らしを営んでいたことが予想される。

伊佐々村を含め郷内の村の主要道路が真壁城のある古城村へと続いているのは、戦国時代に真壁氏の支配下にあった影響だと考えられる。

4) 集落を象徴する風景と名前

「段丘を生垣で区切る村」

この集落は世帯数が増えても段丘上で土地を分け合っている。そして密集度が高くなった分、近隣同士で協力して防火用生垣を築いていたと考えられる。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

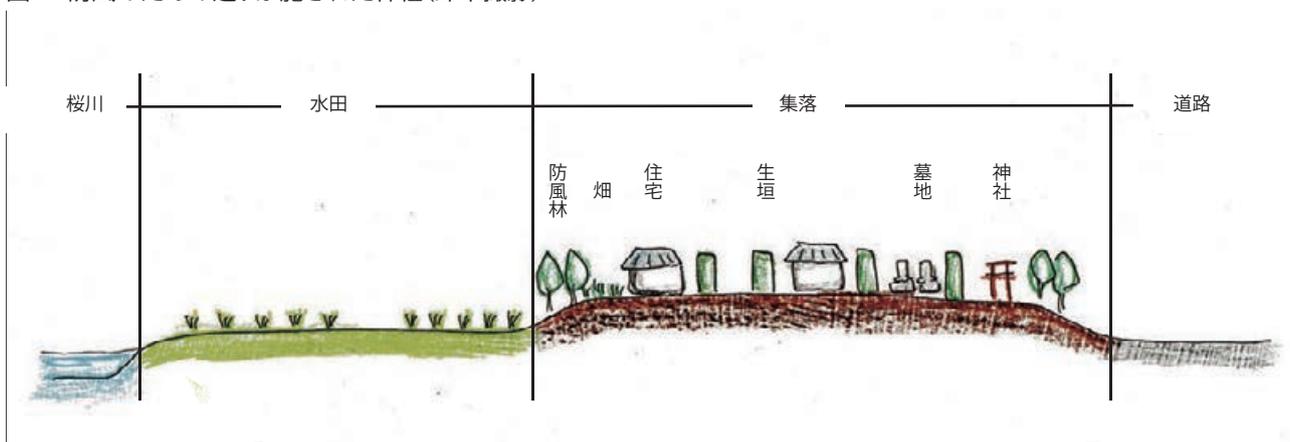


図8 A-A'断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域（茨城県筑西市古郡）Google Mapsより



図2 土地条件図（筆者加筆）国土地理院より



図3 迅速測図（筆者加筆）農研機構・農業環境変動研究センターより



図4 国道50号線から見た低地部と段丘部の境界（撮影：森）

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

新治郡新治郷は筑西市古郡を中心に、同町中央部から北部にかけての地域に比定される（図1）。

土地条件図から、観音川流域の谷戸と、東部から北部にかけて入り込む谷戸があり、この付近には上野原瓦窯跡がある（図2）。

迅速測図から、観音川沿いの山地斜面から更新世段丘上にかけて集落（古郡）の存続が認められる。かつての観音川は川幅が広く、後の国道50号線から分岐した道が段丘上の集落を通過していた。現在の観音川沿いは1914年に耕地整理され、周辺は水田として利用されている（図3）。

2) 実見によって得られた客観的情報

主に観音川沿いの谷戸と上野原瓦窯跡付近の谷戸に挟まれた段丘上の集落である古郡と隣接する大國玉（桜川市）について報告する。

・環境

古郡の集落は観音川沿いの斜面地から段丘上にかけて集落が立地している。段丘下の低地では観音川の水を利用した水田が広がり、斜面地ではマツや竹の林が見られる（図4）。段丘上では畑作や稲作、養豚などによる混合農業が行われている。段丘上に点在する水田にはそれぞれ取水ポンプが設けられ、水源確保の工夫が見られた（図5）。また、北部では混合農業の他、太陽光発電による土地利用が見られた。

・集落構造

低地端部の車道に面する所では高さ2mほどの生け垣を設けた住居が見られた。段丘の際にそっている集落は斜面地の雑木林を背にして、旧道側に蔵を構えた比較的古い集落が見られた（図6）。また、北部では立入禁止の看板が立てられ、その先に集落が見られた。

・地域経営

古郡の東端には香取神社があり、ここでは日露戦争や太平洋戦争における古郡出身戦没者の慰霊碑が建てられていた。また、西端では墓地が見られ、いずれも段丘上の比較的高い位置を選んで、立地していた。



図5 段丘上の畑と取水ポンプを利用した水田(撮影:森)



図6 斜面部を背にする段丘上の古い集落(撮影:森)



図7 段丘上に広がる水田、畑(撮影:阿部)

・交通等

古郡の東端の新築の住宅では旧道沿いの門は老朽化しており、低地側の車道に対して玄関を設けている様子が見られた。

3) 考察

斜面地の雑木林や低地端部の生け垣の様子から、古郡は低地部からの風に対する意識が見られる集落であり、段丘際で防風林として必要な植生は残し、段丘北部では適度な伐採による耕地の拡大が集落経営を可能にしてきたと考えられる。

また、段丘上は古郡と大国玉という大字で分かれているが、大字を跨いで生産地を保有している様子から大字ごとの開発ではなく、互いの大字間で相互補完しながら土地利用が進められたと予想される。

廃墟化した養豚場や荒地などが点在し、広大な土地に対する人手不足がうかがえたが、太陽光発電に代表される新たな収入源の確保にも積極的な姿勢が見られた。

4) 集落を象徴する風景と名前

「大地は潤い、台地を潤す村」

古郡の集落では、台地(段丘上)という立地特性を踏まえ、適切に植生を残しながら技術を取り入れた水源確保などを行ってきた。土地の担い手不足など、時代変化に応じた適切な土地利用と、それに応じた産業形態の変化がこの村の持続要因だと考えられる。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典8 茨城県』角川書店、1983年

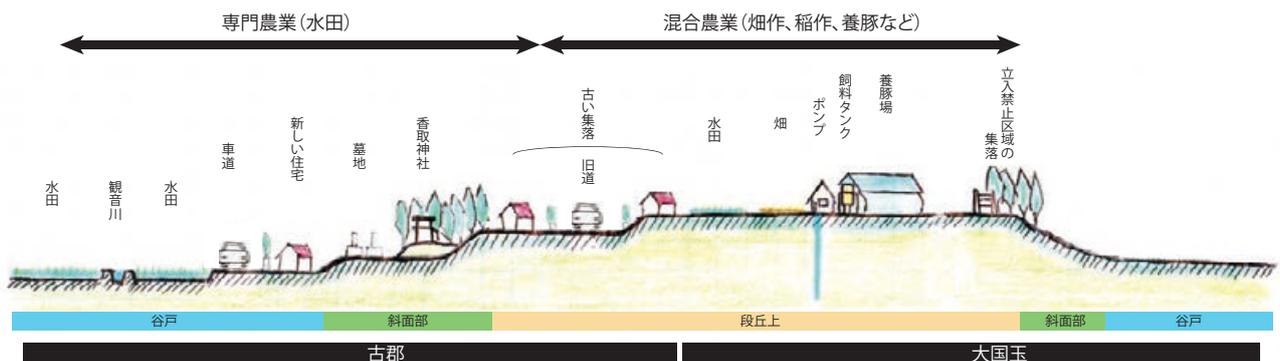


図8 A-A'断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapより



図2 迅速測図(筆者加筆) 国土地理院より

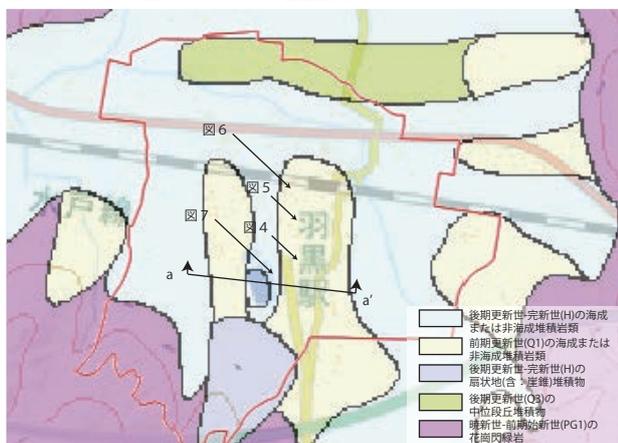


図3 地質図(筆者加筆) 地質調査総合センターより



図4 区切られている農地:境界を持つタイプ(著者撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

北部を通る国道50号は1963年～1970年の国道50号一次改築で開通したもの。水戸線は1889年に敷設、羽黒駅は1904年に開業した。当初は石材を山から運ぶためのトロッコ用の貨物駅であったが、1910年から旅客営業を開始した。そのため石材店は駅周辺に多い。当駅の出入口は現在北側のみとなっている。

2) 実見によって得られた客観的情報

今回は遺承地とされる友部に重点を置いて現地調査を行った。

・環境

集落内部の微高地上では細かく区切られた畑があり、生垣等による境界を持つもの(図4)／境界がなく建築と接しているもの／住居の敷地内部にあるもの等、様々なパターンが見られた。さらにその中でも比較的大きな畑では麦が栽培されていた。

・集落構造

現在の友部には40ほどの石材店が存在し、稲田で採掘される稲田御影石という白い石を扱っている。集落内では石材が至る所で見られた。聞き取り調査によると、住居の基礎に自社で扱っている石を利用することもあるとのこと。また、石材の端材を利用したような石積みを数ヶ所発見した。(図5)

線路北側に位置する東山香取神社は724年(神亀元年)に創建し、水戸線敷設の際に社殿を後方山林へ移設したために杜が分断された。(図6)現在でも線路南側にて杜の名残が確認できる。祖霊社の祭神は通称「イワキリ様」と呼ばれ石材採掘業者から信仰されていた。

・地域経営

墓石には白いものが多く、稲田御影石による影響が伺える。榎箕ヶ池付近の微高地上に集団墓地があった。

・交通

駅の向きや道路を鑑みると友部中心部へのアクセスはさほど良くは無いが、山からの石材の運搬に関しては利便性が高い。線路により分断されているため、南北で開発の差が見られた。

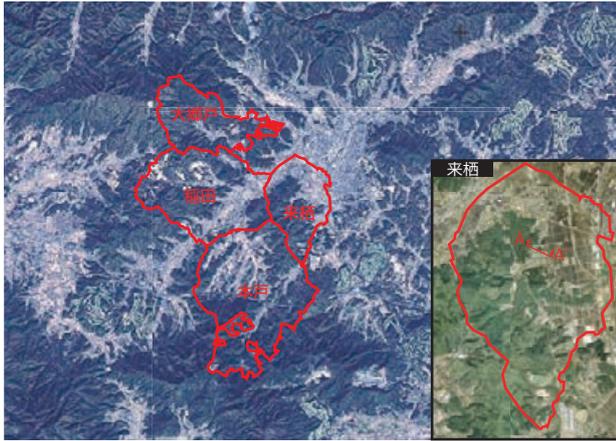


図1 比定の大字領域(筆者加筆) 国土地理院 電子国土基本図(オルソ画像)より



図2 5万分の1地形図(1905年測図・筆者加筆)「今昔マップ on the web」より



図3 参道に沿った山際に広がる集落 撮影＝荻野智樹



図4 畑・蔵・家屋・裏山がセットになった構造 撮影＝荻野智樹

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

新治郡巨神郷は現在の笠間市西部の大字である大郷戸・稲田・本戸・来栖に比定されている。稲田北部の石切山脈では稲田白御影石が産出される。本戸は樹枝上に谷戸が入り込み、水田が広がる。それを取り囲む台地上に複数の集落が点在する。来栖は上郷・中郷・下郷の三つの集落に分かれ、上郷に位置する来栖神社の参道沿いに各集落が広がる。

2) 実見によって得られた客観的情報

今回の調査では来栖の中郷について重点的に調査したため、来栖について報告する。

・環境

山際を南北に来栖神社の参道が通り、それより東の低い土地は水田であった(図3)。集落南部に谷戸があり、谷津田が広がっていた。集落中部には古墳があり、現在は頂上に石造の祠が安置されていた。

・集落構造

各家屋は畑・蔵・家屋・裏山が一セットとなっていて(図4)、低地には広大な水田を持っていた。隣り合う家の庭同士は塀などで区切られることなく緩やかに繋がっていた。谷戸を見下ろす高台には集落の共同墓地があった(図5)。各家の畑や庭などはよく手入れされ、水田のあぜ道には芝や花が丁寧に植えられている様子が見受けられた(図7)。

・地域経営

ヒアリングによると中郷には33世帯が住んでいて、その多くは「長谷川」姓であるといい、その本家には1711年来栖に定着したという記録が残っている。集落での連絡は回覧板ではなく「イイツギ」と呼ばれる伝言手段が今も使われているという。冠婚葬祭は中郷全体で行い、墓地も共同であった。また、11月の来栖神社の例祭では宮司が上郷・中郷・下郷と巡業するという行事があったが、準備の苦勞から下郷は現在では参加を辞め中郷で折り返しているという。

ヒアリングによると周辺集落からは「来栖に嫁ぐなら裸で薔薇しょい」(来栖に嫁ぐなら裸で棘薔薇を背負った方が良く)と言われたほど来栖はよく働かなくてはならない集落だったという。



図5 谷津田を見下ろす共同墓地 撮影=荻野智樹



図6 果樹や栗・たらの木などが植えられた裏山 撮影=荻野智樹



図7 丁寧に芝が植えられた畑への橋 撮影=荻野智樹

3) 考察

中郷を調査する中で、来栖全体の様子が見えてきた。「来栖に嫁ぐなら裸で薔薇しょい」の言葉に現れているように来栖の人はよく働くという印象があるようである。裏山・畑・広大な水田という豊かな生産地をもつこの集落は、耕地整理・機械化以前は農作業は過酷であったと推測される。その厳しさは来栖の人々を働き者にし、負担が減った現在では、その余力を庭仕事や畑仕事に向け、それを楽しんですらいる。

また、来栖神社の参道で貫かれた来栖は三つの集落に分けられることにより、その内部でのまとまりを維持しやすくなっていると推測できる。そしてそれぞれの集落は、来栖神社の例祭によって結ばれていて来栖全体としてのまとまりも維持されてきたと考えられる。中郷内部でも冠婚葬祭や墓地が集落共同であることや、隣り合う家の境界が曖昧である構造は、集落の構成員同士の結束の強さを示している。

農作業負担が減った現在でも住民が畑や庭をやりがいを感じながら高度に手入れしていること、集落毎での結束が強いこと、そして例祭による村全体の連帯があることが来栖の重要な持続要因になっていると推測される。

4) 集落を象徴する風景と名前

「手入れを楽しみ、みなでまとまる村」

仕事は多いながらも、豊かな環境があり農作業へ喜びを感じられること、また地域の結びつきが強いことがこの村の特徴だと考える。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典8 茨城県』角川書店、1983年

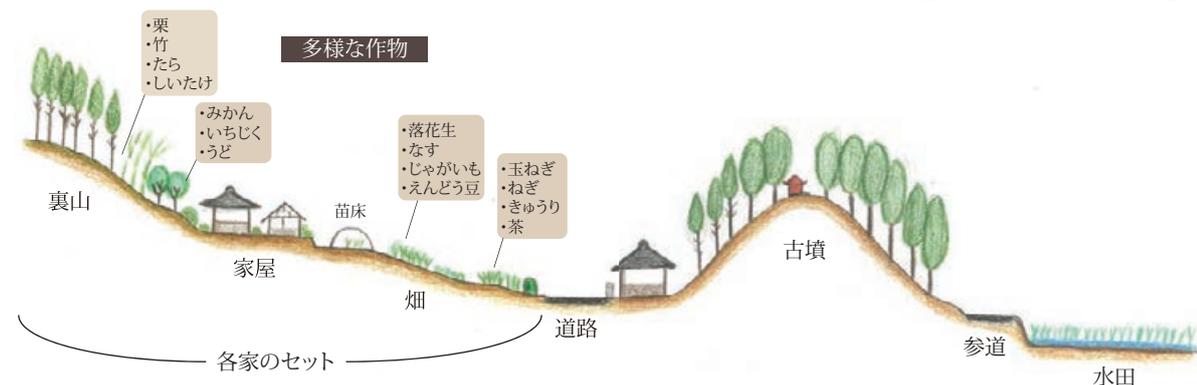


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapより



図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より

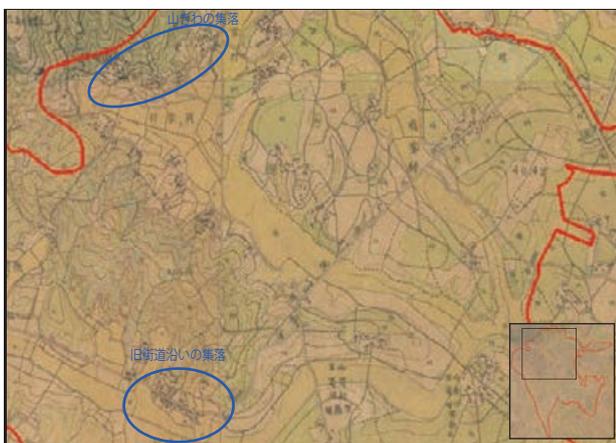


図3 迅速測図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 水田とビニールハウス(撮影:伊藤)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

茨城郡山前郷は、現在の茨城県石岡市山崎・真家・宮ヶ崎・成井・柴間に比定されている。

航空写真によると山崎や真家などは園部川などの河川により複数の谷戸が形成するため、起伏に富んだ複雑な地形になっていることがわかる。迅速測図にも見られるような古くからある集落は、宿山崎に見られるような旧街道沿いか、真家の北部に見られるような山ぎわの台地の縁に沿って形成される場合が多い。また、土地条件図を見ると谷底にあたる平野部は水田に、山ぎわの斜面は果樹園や畑作地として利用されることが多いことがわかる。

福寿院(記録焼失のため詳細な成立年代不明)を中心に800年の伝統を誇る念仏踊りである「真家みたまおどり」が毎年8月15日に開催されている※1。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

曲がりくねった道や平面、斜面など谷戸がつくる複雑な地形とその細かい使い分けがいたる箇所で見られた。平野部での水田(図4)に対して、台地部では特に柿の栽培が多く見られた(図5)。柿農家へのヒアリングによると、同地域における柿栽培は日露戦争後(1904年以降)に始まったとのことであった。それ以前はネギなど他の農作物を栽培していた。

・集落構造

地形を意識した道沿いの集落は低地と斜面の境界に設置され、断面図に見られるような水田・家屋・裏林というようなセットが複数確認できた。また一方で小堀(図2)では谷戸に囲まれた台地の上に集落が形成され、家屋の作りは壮麗なものが多く見られた。

・地域経営

ヒアリングによって、伝統行事と農業という二つの観点から地域経営に関する情報が得られた。「真家みたまおどり」では、福寿院、明圓寺、全龍寺を中心にまわる行事となっている。もともとは福寿院の行事であったが、人口が減るにつれて、範囲を拡大して存続しているという。また、県道278号線沿いには「JAやさと 園部直売所」を起点に柿など、周辺で作られた農作物が選別され東京に出荷されている(図6)。



図5 斜面上に広がる柿林(高野撮影)



図6 JAやさと園部直売所に隣接する柿選果場(撮影:伊藤)



図7 水田と隣接する柿林(撮影:高野)

3) 考察

真家における風景はグラデーシンのようであった。そのような風景が成立していると言えるのは、谷戸や台地、筑波山の山地などによって生まれる様々な土地の要素が生活者によってきめ細かく利用されていることが観察されたからであった。柿の栽培は集落一体に見られたが、特に水田に隣接するように栽培が行われているのが印象的であった(図7)。図7に見られる柿林はその土地の形態から、おそらく元は水田であったことが推測される。転用の事例が豊富であることはつまり、それを可能にする土地の条件が揃っているということの意味するのではないか。

谷戸や台地に加え、筑波山の麓にあたる地形が凝縮された本地域では、実に様々な土地のセットを確認することができた。地形の濃密な移り変わりがあるからこそ土地利用が多様で栽培される農作物も豊かであると考えられる。これらの要素が凝縮して真家の景観が成り立っていることがわかった。

また、柿栽培が導入される以前も山ぎわに設定された豊かな土地をうまく活用し、今日とは異なる美しいグラデーシンの風景が広がっていたということに違いはないだろう。

4) 集落を象徴する風景と名前

「凝縮された地形のグラデーシオン村」

谷戸、台地、山地など様々な地形が作る土地の特徴を余すことなく利用している景観のグラデーシオンが印象的であった。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

参考文献

※1「石岡市観光協会ホームページ」(2017/6/23閲覧)

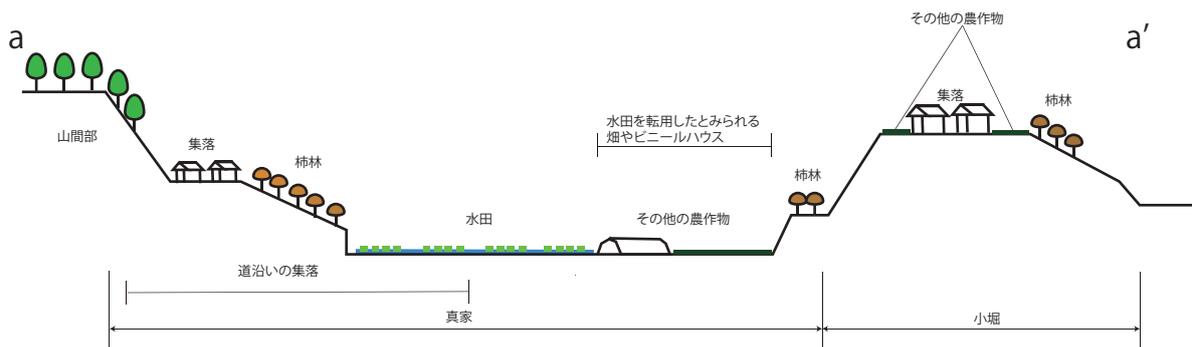


図8 a-a'断面ダイアグラム

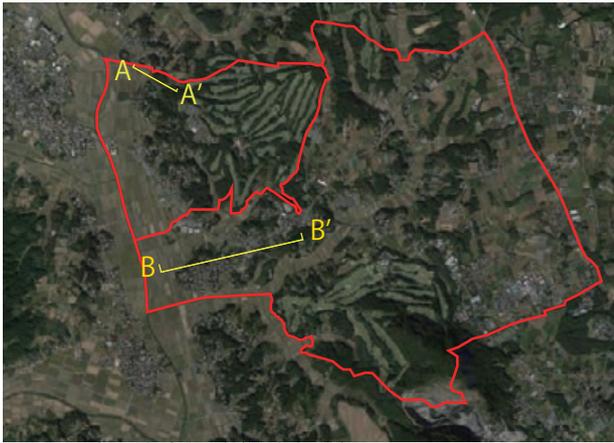


図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapより

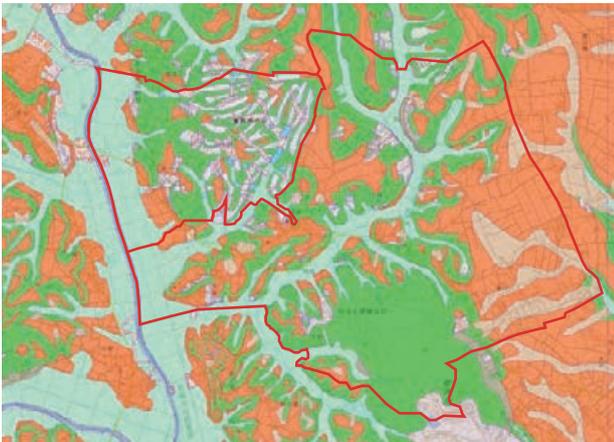


図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より

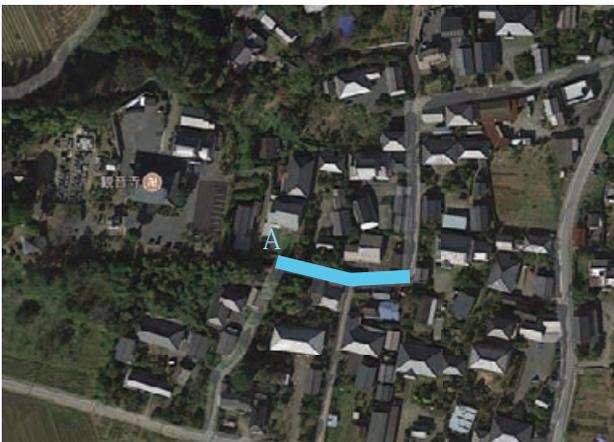


図3 観音寺に続く道A(筆者加筆) Google Mapより



図4 観音寺から下林を見下ろす(撮影:甲斐)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

〈上林〉 面積:2,133,471 m² 人口総数:269人

〈下林〉 面積:6,437,659 m² 人口総数:2158人

(平成22年10月1日現在)

郷域の西側に恋瀬川が流れており川沿いの低地は水田として利用されている。上林と下林の集落は山地斜面および更新世段丘上に位置し、上林の集落よりさらに上の山地と下林の南部の山地は開発されそれぞれゴルフ場として利用されている。郷域の東側には台地が広がり、果樹園として利用されている。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

比定領域の集落の様子は、上林と下林で大きく異なっていたため、この2地域に分けて報告する。

〈上林〉ヒアリングから、30年ほど前から上林・下林地区一帯の農業用水には霞ヶ浦からポンプアップされた水が用いられていることがわかった。それ以前はため池や雨水を利用していたが、度々干ばつによる飢饉に見舞われた。この用水ができた前後で、水田の面積は変わっていない。

〈下林〉ヒアリングから、小規模な水田は耕作を委託しているものが多いことがわかった。

・集落構造

〈上林〉小高い丘には鹿島神社が鎮座し、段丘の斜面には田畑と家がセットとなり、交互に並んでいた。さらに段丘上には、丁寧に手入れされた栗畑が広がっていた。ヒアリングから、栗は管理の手間が少なく、兼業農家には向いていることがわかった。

〈下林〉観音寺に続くA(図3参照)の道沿いの屋敷には立派な門と大きな母屋が見られた(図5)。新たに家を建てている世帯もあり、ヒアリングによると2011年の東日本大震災により大きな被害を受けた母屋を建替えているとのことだった。

・地域経営

〈上林〉ヒアリングから、40年程前に住民の農地として使っていた土地をゴルフ場として売ってしまったため、専業農家だった住民の多くが兼業農家になった。また、都心への通勤者に対する補助制度があるため、都心に勤務しながら上林に住み続けることができる。



図5 広い敷地と立派な門構え(撮影:甲斐)



図6 谷戸の平野の際に家を構える(撮影:松木)



図7 上林の段丘から街を望む(撮影:豊田)

〈下林〉ヒアリングによると、30-50代は勤め人が多い。また、下林の住宅密集地は本坪と呼ばれ、世帯数は昔から変わらず100戸前後である。

3) 考察

〈上林〉上林では山地斜面の半分以上が開発されてゴルフ場になり、またヒアリングから農家の多くが兼業であることが分かった。これは、上林が斜面地に立地し、十分な労働力を確保するのに必要な農地と宅地の拡張が困難であったため、農業生産のみで生活を成り立たせることが出来なかった結果であると考えられる。それゆえに、上林に住み続けるため、田畑をゴルフ場が開発し、石岡市からの補助を受けながら兼業農家を営み、畑には手のかからない栗の木を植えているのだろう。

〈下林〉上林・下林それぞれの面積と人口の統計から、下林は上林に比べて面積あたりの人口が多いことが分かる。これは、下林には深い谷戸があり斜面地と平野の際に居住に適した場所が多く存在するからであると考えられる(図6)。そのため、谷戸と段丘上の広大な生産地を維持できる労働力を確保できるのだと考えた。

4) 集落を象徴する風景と名前

〈上林〉半勤半農村

〈下林〉ひと・田畑・谷戸を抱く村

上林は産地斜面の半分以上が開発されてしまったため、住民は都内で働きながら上林で農業を営んでいる。対して下林は深い谷戸に住民と田畑を抱いており、住み続けるために適応している。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

・上林 断面図A-A'

・下林 断面図B-B'

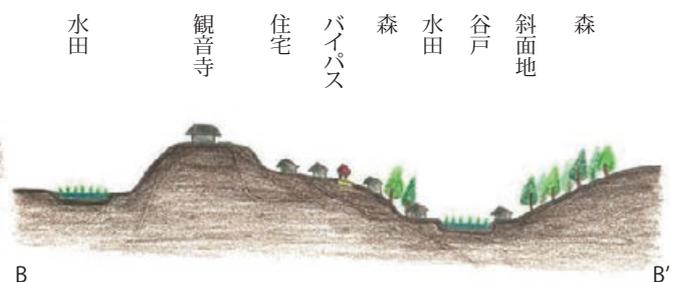
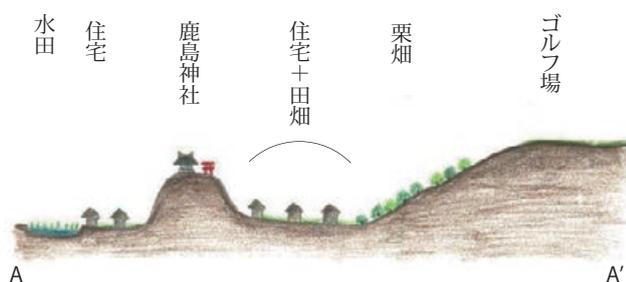


図8 断面ダイアグラム

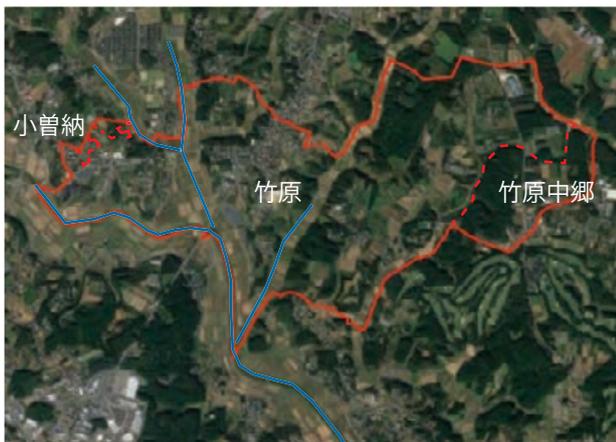


図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapより



図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図3 迅速測図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 短冊上の敷地、西に家を寄せた配置(撮影＝西野)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

茨城群生園郷は現在の竹原、竹原中郷、小曾納などに比定される。竹原を中心に調査を行った。水戸街道の宿場町として栄えた。旧水戸街道は竹原の交差点から竹原神社(図5)のある西に折れ曲がる。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

川により舌状に段丘が分かれている。段丘上に集落が位置しており、谷底平野は水田として利用されている。段丘の中心を街道が通り、家屋の裏の斜面が森林となっている。

・集落構造

川を挟み竹原神社以西(坂下)、竹原神社～竹原椿山稲荷神社、竹原椿山稲荷神社以東(大正地)の大きく三つの集落に分かれる。

竹原神社より西の旧水戸街道沿いは、敷地が短冊上に分割されている。また西に建物と北側に建物を寄せ、東側に道路を設けた配置が見られた。(図4)

・地域経営

竹原神社の斜面には住民の手で植えられたアジサイが埋め尽くされていた。(図7)6月から7月にかけて「竹原アジサイまつり」(今年で4回目)、7月22日、7月23日に「アワアワ祇園」(1645年の伝染病を由来とする)が行われる。

竹原椿山稲荷神社(図5)にて「アワアワ祇園」の準備を行う、裏町に住まいを持つ中高齢者の住人の方々から、ヒアリングを行うことができた。「アワアワ祇園」では竹原の裏町(由来は竹原城からみて裏)上町、横町、中町、川を隔てた坂下、大正地の地区が毎年取り仕切りを持ち回りで担当し、祭りを行っている。街道沿いの集落(裏町、上町、横町、中町)が特に古く、坂下、大正地は近代以降(要調べ)に開拓されたものである(ヒアリングより)。

竹原椿山稲荷神社でのヒアリングにより、生園の由来は小曾納ではないか、と指摘を受けた。竹原は農地が少ないことから集落外に働きに出ることで生計を立てている。現在農地の運営は外部に委託している(ヒアリングより)。



図5 竹原椿山稲荷神社(撮影=西野)



図6 アワアワ祇園の行われる竹原神社(撮影=鈴木)



図7 斜面をアジサイが埋め尽くす(撮影=鈴木)

3) 考察

段丘が多く、農地が限られた竹原はかつて街道沿いの宿場として栄え、現在では働きに出て生活を営んでいる。農業以外の方法で生活を成り立たせている構図が見て取れる。

竹原神社のアジサイの整備、「竹原あじさい祭り」、「アワアワ祇園」など住民の交流活動が盛んである。話を伺った竹原椿山稲荷神社で祭りの準備をしていた人々が10名以上いたことから、集落としての集団意識の高さが伺える。また川向こうの新たに来た人々も巻き込んで祭りを行うこと、もともと宿場町であったことから、郷域における新規住民の来訪に対して寛容である。外部との関係を積極的に持つ地域経営の強さが持続要因として考えられる。今後は祭りの準備を次世代に受け継いでいくことが課題である。

4) 集落を象徴する風景と名前

「川越えお祭り村」

農地が少ないことを逆にとり、街道沿いが栄えた時代は宿場町として、現在は外に働きにでることで生活を営む。また郷域における新規住民が開拓した川向いの集落を交えて祭り行うなど、外部との関係を絶たない地域経営が持続要因である。

5) 断面ダイアグラム

(図8,9参照)

参考文献

竹中理三他編『角川地名大辞典8茨城県』角川書店、1983年

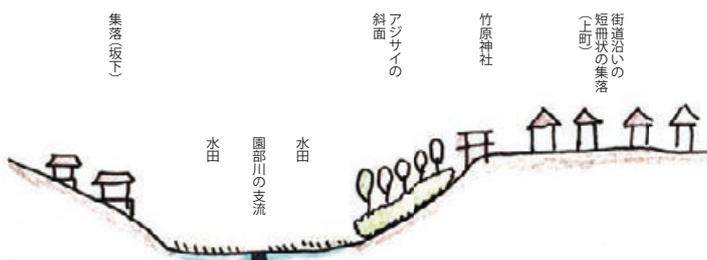


図8 A-A'断面ダイアグラム

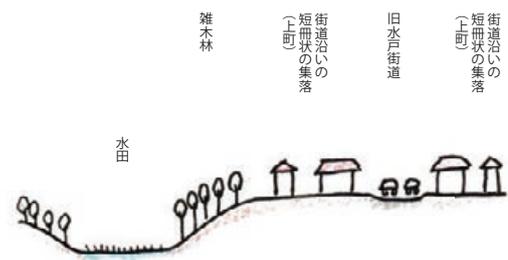


図9 B-B'断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleEarthより

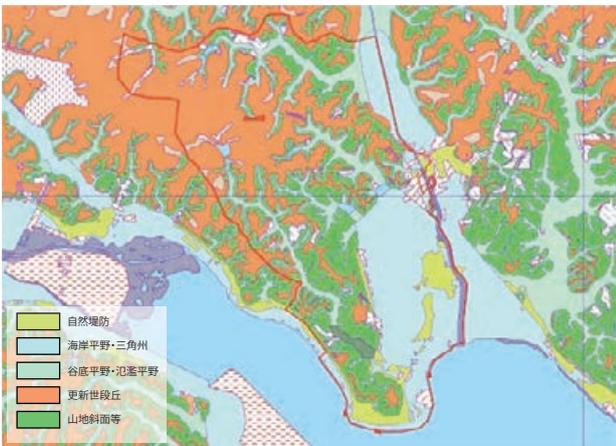


図2 土地条件図 国土地理院より



図3 迅速測図 国土地理院より



図4 下玉里航空写真(筆者加筆) GoogleEarthより

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

「田余」という地名は倭武天皇がかつてこの地を訪れ井戸を掘らせたところ、『よく淳(たま)れる水かな』と言い、里の名を田余と名付けたという説がある。この井戸は現在の上玉里にある大宮神社付近の玉井であると考えられている。

この地は地名の由来にもあるように湧水や霞ヶ浦の水などの資源の豊かさから、古くから豪族が住んでいた。そのため田余郷には現在でも古墳が多く見られる。

土地条件図から、田余郷に比定される五つの大字のうち、下玉里・川中子は自然堤防上に、その他の大字は谷戸を囲むように山地斜面や台地上に集落が分布する。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

上玉里では谷戸に水田が分布し、蓮根と稲が栽培されている(図5)。一方、下玉里や川中子において低湿地の水田では蓮根が栽培されており、水田と県道の間のは自家用と考えられる。

・集落構造

上玉里を通る県道144号線沿いの市役所支所や小中学校などの公共施設、その他比較的新しい建築は土地条件図の更新世段丘上に分布する。

下玉里では県道194号線の南側に蓮田と畑、北側に住宅が分布し、場所によっては南側に住宅が建てられている、南北で同じ幅のソーラーパネルが設置されているなど、県道を挟んだ南北で土地利用に関係性が見られる。

・地域経営

下玉里において集落の構造が短冊状であることは、霞ヶ浦の水資源を平等に利用するためであると考えられる。実見では水田としての土地利用の他に、コイの養殖が確認できた。

各家々に屋敷神の祠が見られ、鳥居のあるものや小型のものなど規模が様々であった。

・交通

栗又四ヶ・田木谷には2007年まで鹿島鉄道が通っていた。



図5 上玉里の谷戸(筆者撮影)



図6 蓮田の幅に呼応する塀の幅(北野撮影)



図7 細長く分割された蓮田(筆者撮影)

3) 考察

霞ヶ浦や園部川の豊かな水資源が得られる平野部、複雑に入り組んだ谷戸の地形が、古墳時代から人間の生活が持続し、現在も広範囲にわたって蓮根栽培・稲作などが見られる大きな要因であると考えられる。

新しい家が北西部の更新世段丘に進出していることから、田余郷の谷戸は開発圧力に対して強く、生産地が守られていると感じた。

下玉里の県道を挟んだ土地では、南側が荒れていると北側の住宅前の植木も荒れている、南側にソーラーパネルがあると北側にも同じ幅のソーラーパネルがあるなど法則性が見られた。このことから、県道を挟んだ南北の土地の所有者は同じ人物(または一族)であると考えられる。南北どちらかの土地の状態から、もう一方の土地の様子も推測できる。

4) 集落を象徴する風景と名前

〈上玉里〉「谷戸に添って生きる村」

古くから谷戸を生産地として利用し、生活してきた上玉里にとって、谷戸は切っても切り離せずに「添う」ような集落だと考えられた。

〈下玉里〉「短冊の列を道が貫く村」

県道を挟んだ南北の土地で、幅や利用形態などに一定のパターンが見られた。

5) 断面ダイアグラム

(図8参照)

参考文献

竹中理三他編『角川地名大辞典8茨城県』角川書店、1983年

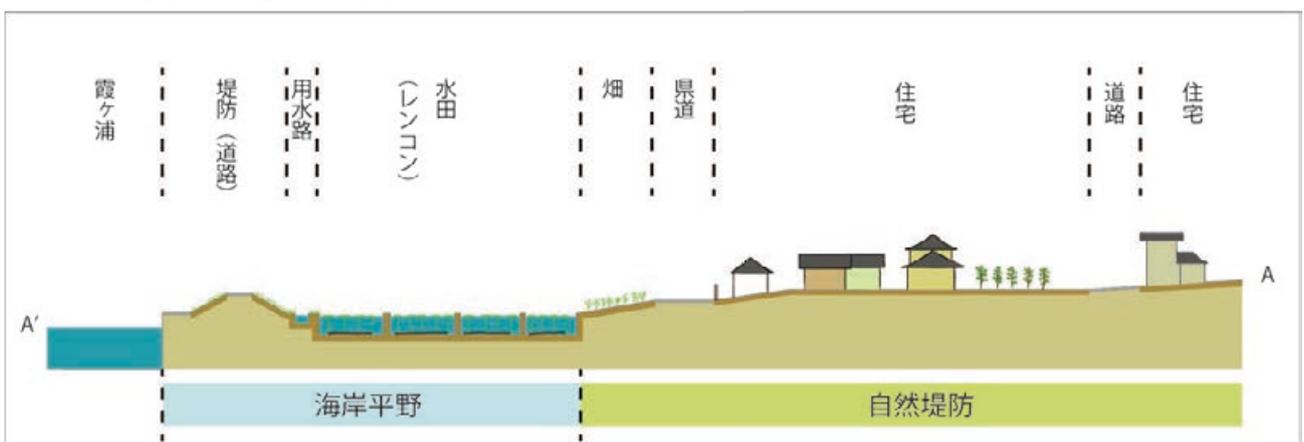


図8 断面ダイアグラム

■茨城県山崎周辺の景観

茨城県の山崎周辺を車で移動すると、体が速度を伴って気持ちよく上下し、なだらかな丘が続くことが体感できた。

舌状台地の上に果樹園、その下に集落があった。谷には水田が続いていた。生活と生産の場がリズムカルにつながっていた(図1)。

直感であるが、この集落形態の結びつきは相当に持続的、あるいは原型的なものではないかと感じた。

その直感のある程度客観的なものにするために、当方が以前に提示した先行形態論(註1)による分析方法を適用して、集落分析におけるその有効性を検討してみるのがこの論の主眼である。



図1 茨城山前郷の道の高低の様子

■先行形態分析とは

先行形態分析の要は以下に集約される。

- 人間の諸活動によって大地へ働きかけられる形態設定(所有制による土地区画の設定、生産地の設定、土木工事、建築工事)には必ず前後関係があり、その関係性の刻印(順序)は決して消えない。
- そのため過去に形作られた大地の形態は、現在ま

でを通じて継続的に生活環境に影響を与える。

- その結果、機能の転用(作物、事業内容の変換)こそあれども、各先行形態は無意識のうちに温存される。(註2)

■道路と敷地の先行形態分析

その事例は様々あるが、最も分かりやすい例として、道路と敷地との関係が挙げられる。

まずT字の辻の場合を想像してみたい。T辻には水平の道とそこにぶつかる垂直の道で構成されている。この場合、水平と垂直の道が成立した前後関係は、水平の道路が垂直の道路に先行していたか、もしくはそれらが一体に計画されたかのどちらかである。上端を意味なくたち切られた垂直の道路がまず先行し、そこに水平の道路が敷設されることはありえない(図2)。

次に集落立地と道路との関係を検討したい。

まず確認したい。二つの集落を結ぶのみの小道を作るのではなく、互いに隔てられた集落群をつなぐより大きな空間性を持った道路をひくことができるのは誰であろうか? 私か、あるいは私たちか? そのいずれでもない。それは私たちの上で私たちを統括するような権力者の存在抜きには考えられない(現在でもそうである)。その意味で道路は都市計画の発生を示しているものともいえる。

よって集落立地と道路との関係には大きく二つの組み合わせがある。

- ひとつは少数の集落とその間をつなぐ小道である。この場合の小道は集落の核と核とを繋ぎ、集落と生産の場をつなぎ、また等高線に等しい場所を通すような環境的条件に左右されてデザインされている(図3左)。
- もうひとつが、先のより遠隔の地を結ぶ交通路、経

済路である街道である。

この場合街道は先行する集落とは別の理論でデザインされる。近代における鉄道も同じ性格を持つ。さらに新しく作られた街道は、新しい街づくりを誘発する。これが宿場である。その場合の町割はいわゆる短冊形という、道路に対して各戸が垂直に接する形態をとる。この形態は先行して計画された道路に基づき後にデザインされた形態である、もしくは街道と一体的に計画される(図3右)(註3)。

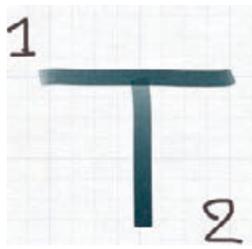


図2 T字の辻

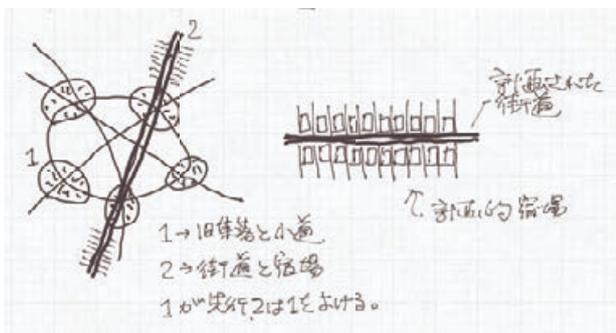


図3 集落立地と道路との関係

■大字、郷領域の成立の吟味

この先行形態論にくわえて、以下の層を組み合わせることによってその土地の基本的キャラクターと、その後付与された新しい活動基盤を把握することができるかもしれない。その順序はおおよそ以下ようになる。

- ・立地の前提層：集落を成立させ、その位置を決定する地形・地質。さらにそれらによる生存領域(サバイバル・セット)の確定
- ・大字・郷領域の設定：上記サバイバル・セットによ

って構成されていると推測される大字領域、さらにその集合である郷の検討

- ・大字・郷領域と街道の関係：先行する大字・郷領域と、後発した街道にもとづく新しい生存地域の把握
- これらを確認することで、ある地域における複数の集落の歴史的成立過程が、形態的に把握可能である。

■茨城県山崎・真家の先行形態分析とその持続的評価

上記方法論を茨城県山崎において検討してみたのが図4である。

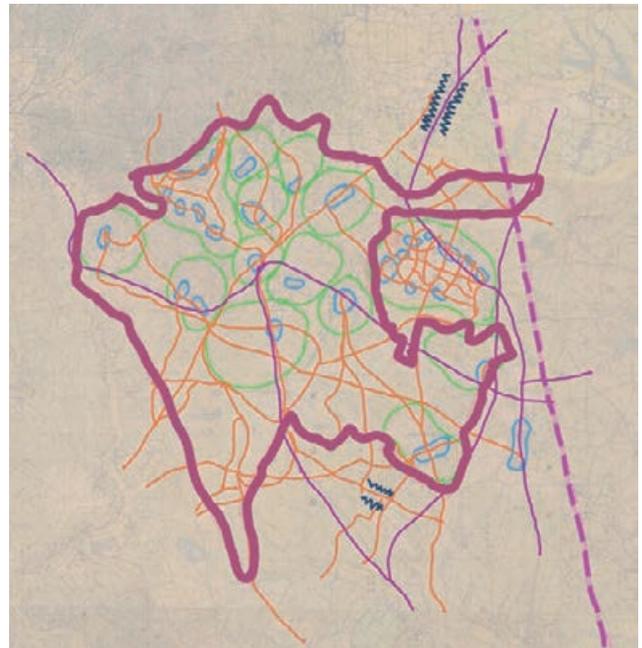


図4 茨城県山前郷の先行形態分析図

迅速測図作成時を基本とし、そこに郷領域を反映させ、その領域内部に存在する各先行形態を分析した結果以下のことが明瞭に判明した。

- ・集落(水色)は集落を成立させる生産地(緑色)にかならず併設されるか包含される。そのため舌状台地に展開する同地域は谷と丘の関係を有効利用して、集落と生産地の場所、生産物を設定している。
- ・各集落は他の集落につながる複数のセミラチス的な小道(茶色)を持っている。これは地域経済、生活

道路、地域内の生産地へのアクセスという明瞭な目的を持っている。

・それら集落と生産地のセットである大字を複数包含して郷が形成されている。山崎、真家の場合は概ね舌状大地の形態に沿ってその領域が確定されている。

・近代に主要な公共道路となった街道(ピンク色)は以前の小道を拡幅するか、上記小道の論理を反映しない方法で敷設される。その顕著な例は鉄道の常磐線の敷設のされ方である。

・そして宿場的短冊型の集落(青色)は必ず街道に面して成立しており、またこれが最も大事なことだが、それ以前に成立していたと思われる集落、生産地、小道の密接な関係の外部に存在していることである。

以上

註1)「先行形態論」『セヴェラルネス+』鹿島出版会
2011に所収

註2)これら形態設定の順序関係のある地域において全く消してしまうのは、地震などの大災害後に稀に実行される道路と敷地を根こそぎ改変する区画整理事業である。この行為は生産地においては圃場整理事業が概ね対応する。

註3)なお、都市計画が集落成立の当初よりなされている場合がある。その場合には交通路計画が、千年村の発展基盤をなす。具体的には関西の条里制による村落や荘園である。そこでは街道による物資流通、納貢を基本にした作物経済が村落成立の当初から目的とされたのである。

新治郡巨神郷は現在の茨城県笠間市西部に比定されている。来栖はその区域のほぼ中央部、筑波山と友部丘陵に挟まれた、谷戸が発達した丘と低地が入り組んだ地域にある。来栖の字域は三峰山という名の低山の北東側半分とその北東に広がる河川沿いの低地とにまたがっている。低地はほぼ水田化されている。上郷、中郷、来栖、下郷といった集落があり、三峰山の山裾に沿って点在している。いずれの集落も水田の広がる低地からやや高いところに住宅と畑があり、その背後に丘陵の斜面が林地をなす、典型的な農村集落の型を見せている。

長谷川家は中郷の山際、集落で最も高い位置にある。家は道から30メートルほど奥まっていて、手前は畑として使われている。部分的に2階建ての母屋と、倉庫や車庫として使われている納屋と、土蔵がある。納屋と母屋に囲まれた場所は砂利敷にされ、作業場所や駐車場所として使われている。玄関は母屋の南面にあり、そこから西側は芝生の庭である。その先に花壇や蔬菜園がある。家の北側は三峰山へ続く斜面である。広葉樹の雑木に混じって植林らしいスギやヒノキが植えられている。

長谷川家にお邪魔したのは、庭仕事をしていた他の家の住民から、あの家が一番古いと教えてもらったためであった。前庭で雑草取りをしていたお婆さ

んに千年村の調査の趣旨を話すと、見ず知らずの私たち4人を玄関に招き入れ、お茶菓子をつまんで下さった。この家の歴史を裏付けるかのように、蔵にしまっていたという江戸時代の文書、寺の山門の改修に寄進した礼状や、草津へ湯治に行くために発行された「往来証文」などを見せて頂いた。



以下は、そのお婆さん、長谷川みついさんと、その時に偶然家におられたみついさんの長女に伺った話である。

長谷川家は、中郷の長谷川の「兄弟(一族をそのよ うに呼ぶ、とのこと)」のなかでは最も古いとされている。この家から線路(JR水戸線)まで、集落の家はほとんど長谷川姓である。この家の裏山に一族の祠があり、毎年末には集落の人が揃ってお参りする行事があった。母屋は昭和44年に改築した。それ以前は茅葺きの家であった。家の周囲の畑はすべて自家用。水田を持っていて、20年ほど前に圃場整備が行われた。ご主人が亡くなってからは担い手がいなくなり、現在は田は他人に貸している。農機械も耕運機以外は売り払った。集落の墓地が少し離れた丘の斜面にあり、当家の墓は其中で一番高いところにある。

みついさんは87歳、北山内村の出身で、通っていた農学校が新制高校に移行した最初の卒業生であった。高校を卒業してすぐにこの家に嫁入りした。当時、来栖の人は働き者として知られており、来栖に嫁に来るのは「はだかではばらしい(素肌にイバラを背負うようなもの)」と言われた。この家の家族はご主人と両親、合わせて4人だけだったので、食事の支度はそれほど大変ではなかった。お嫁に来た頃は戦後すぐで麦飯ばかりの貧しい食事だったが、町

とは違って食べ物に困ることはなかった。ただ、お米以外に葉タバコの生産をしていて、農作業はとても忙しかった。近所から怠け者だと思われないように、朝は寝ていてもまずは雨戸だけは開けた。

現在はこの家に一人住まいである。子供は2人で、1人は東京在住、孫がいる(みついさんにとっては曾孫)。もう一人は千葉在住の長女で、ご主人が亡くなってからは頻繁に訪れてくれる。お盆や正月には家族が集まってしばし賑やかになる。しかし、以前は総出でやっていた冠婚葬祭も、今ではすっかりなくなった。

「ここへ来られて、一番楽しかった思い出はなんですか」という質問にみついさんは、楽しいことはない、働いていた思い出ばかり、と答えて少し笑った。

お話を伺った後に家の外へ出て、庭と裏山の林を拝見した。みついさんが杖をつきながら歩いてこられ、歩きながら色々と解説してくださったのだが、その様子が印象的であった。さきほど、楽しいことはないと言っておられたのと裏腹に、裏山の林の果樹や、庭にあるツツジの古樹、庭の一角に設えられた花壇に植えられたイカリソウやエビネやユキノシタなどの山野草について語るとき、みついさんは実に楽しそうだった。

裏山は、林床の草刈りが丁寧なされた非常に綺麗な雑木林であった。長谷川家は前庭も裏山も、納屋



や母屋の中も、非常に片付いて手入れが行き届いた様子だったが、頻繁に訪れる長女が多くの作業を引き受けているそうである。

生活を彩る楽しみや喜びは、ご本人にまともに質問しても、返答が言葉にならないことはよくある。

しかし、みついさんはこの土地の暮らしを楽しみ、喜んでおられる。少なくとも私たちにはそのように見えた。

水田や畑も含めて、農家の生活風景を形作っているのは生業としての農業である。生業が失われると土地の維持管理がされなくなり、生活風景は周囲の自然に侵食されて消滅してゆく。長谷川家も生業が失われた農家である。しかしその生活風景は千葉からの出張メンテナンスに支えられていた。

東京や千葉の長谷川ファミリーにとって、盆と正月に集合する「来栖のおばあちゃん家」の意味は小さくないだろうと思われる。その場所に象徴的な意味を見ている外部の人たちが資源となって存続する、そのようなありかたも千年村の「長続きのひみつ」のひとつと数えてよいのではないだろうか。

1. はじめに

2017年度に実施された筑波山周辺疾走調査を受けて、大字に着目して気づいたことを2点ほどまとめておきたい。1つは「野帳における大字の字界表記の混乱」である。2つには「大字を単位として地域をみることの意義」である。

2. 野帳における大字表記の混乱

2017年度の筑波山周辺疾走調査の「野帳」では、抄郷の位置が複数の大字に比定される場合に、比定されたすべての大字の字界を示したものと、比定された複数の大字を囲む輪郭線のみを示したものが混在していた。前者は抄郷の比定地に複数の大字が含まれることが自明であるが、後者の場合、当該抄郷が単一の大字に比定されるとの誤解を招きやすく問題がある。隣接する大字の字界も省略せずすべて表記するようにしたい。加えて、『角川日本地名大辞典』で抄郷の比定地としてあげられた大字と、野帳の各地図上に表示された大字との間に齟齬(過不足)が認められた。辞典等に記載された大字は過不足なく「野帳」の地図上に表示したうえで、注目の大字や重点的に踏査すべき区域を特定しておく必要がある。

以上、大字を基本単位として地域を検分するという、千年村プロジェクトの調査方法の根幹に関わる問題につき、念のため確認したしだいである。

3. 大字から地域をみることの意義

(1) 大字とは

大字とは、明治の市制・町村制施行時に、近世の藩政村や町の名に由来する村名・町名を残したもので、住所の中で市町村名の次に示される地名がそれである。地域の人々が、この大字なる単位をしっ

かり認識しているというのは、今回の疾走調査では、土浦市藤沢、真壁町(まかべちょう)伊佐々(いさざ)等の大字で言質をとることができた。地域の人々は大字を行政区(住民自治組織)の区域として認識している。一大字一行政区ということもあれば、一つの大字に複数の行政区が含まれることもある。いずれにせよ大字とは、たんに過去の町村名を引き継いだ空間的領域というにとどまらず、地縁的・社会的な結びつきを今に伝える領域でもあるのだ。ただし、後述するように、この社会的な結びつきの強度は、大字によって様々である。農村部では地域社会のまとまりを維持している大字も多いが、都市部ではその限りではない。経験的に、一つの大字に複数の行政区が含まれる場合に、行政区間の結びつきが強い大字と、その逆に行政区間の関係が弱化したり断絶したりしてしまっている大字もあるようである。

(2) 攪乱への耐性と資源の賦存

このような地域社会のまとまりは、行政区が行う様々な活動や古くから行われている祭礼等に発現しているといえるが、生産や生活を支える資源の利用、その空間的発露としての土地利用にも多分に現れている。例えば、下妻市筑波島(ちくわじま)・数須(かずす)・平川戸(ひらかわど)・堀籠(ほりごめ)・坂井(さかい)・比毛(ひけ)の各大字は、必ず自然堤防と後背湿地の両方が含まれるように字切りされており、前者は居住地として、後者は耕地(主に水田)として利用されている(図1)。いうまでもなく自然堤防は攪乱(洪水)から相対的に安全な居住環境を提供し、後背湿地は水田に適した環境(生産地)を提供する。後背湿地は自然堤防より攪乱に見舞われやすいため、居住地としての利用は限定的である。このように、攪乱に見舞われやすい低湿地の大字には、安全な居住地と肥沃な生産地を両立可能な土地利用を行える環境

条件が備わっている。また、そのような資源の配分を可能とする空間的枠組みとして大字が機能しているといえる。一方、段丘や丘陵地帯に位置する大字も特徴的な字切りがなされている。例えば、桜川市真壁町の田(た)・羽鳥(はとり)・東山田(ひがしやまだ)・椎尾(しいお)の各大字は、必ず谷底平野・氾濫平野、更新世段丘、扇状地、山地のすべてを含み、それらに跨るように字切りされている(図2)。前述した低湿地の大字と比べると、水田として利用されている谷底平野・氾濫平野の占める面積割合が小さく(ただし扇状地も水田として利用されている)、山地(山林)の面積割合が大きくなっていることに加えて、大字自体の規模が低湿地のそれと比べて広い傾向が認められる。この傾向はこの地域に限らず全国的に認められるというのがこれまでの経験則である。

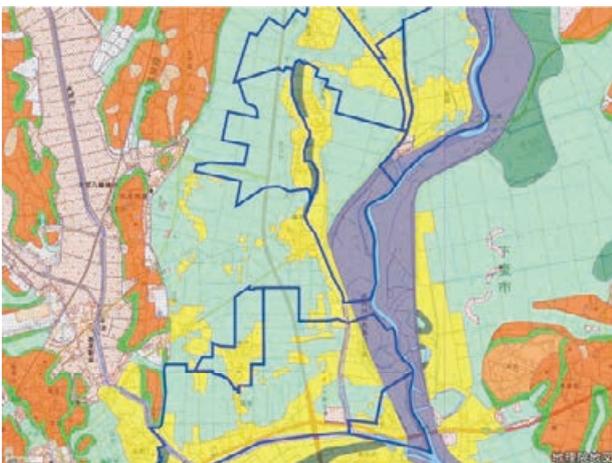


図1 低湿地における大字の字切りの例(下妻市筑波島他)

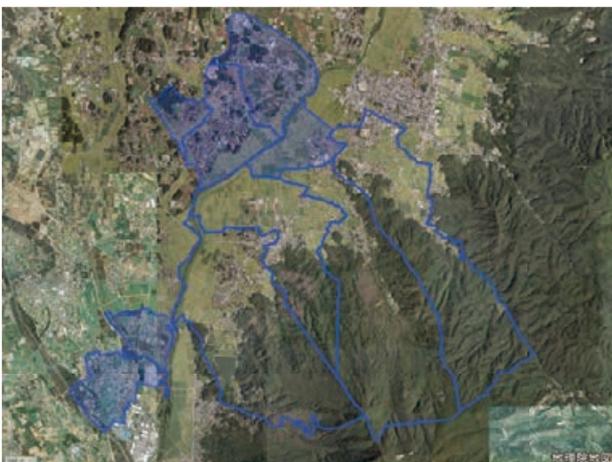


図2 平地と段丘等に跨る大字の字切りの例(桜川市真壁町田他)

このことは何を意味しているのであろうか。一つには、下流域の耕地における安定的な水利および生産を支える水源林・入会林としての意義があるだろうし、いま一つには、水田の相対的狭さ(=生産力の相対的な低さ)を山林が直接的に補完してきたということも考えられる。むろん山林は水田の代わりとはならないが、狩猟や採集の対象とはなり得たはずである。ところで、上記真壁町の各大字の場合、居住は扇状地や更新世段丘上を専らとしてきた。このことから、低湿地の大字と比べて攪乱(洪水)への耐性は優れていたと考えられる。逆に低湿地居住は攪乱のリスクを冒して水稻の生産性を高めようとする立地選定といえる。いずれにせよ大字という単位には、攪乱のリスクに対し一定の填補をするとともに土地からの生産物を持続的に獲得するに足る資源(性)が備わっているのではないか、との仮説を提起しておきたい。

(3) 持続可能な資源利用を支えるしくみ

攪乱への耐性と資源の賦存は長期的な生存の必要条件であるが、それだけでは十分とはいえない。攪乱への耐性を維持し、賦存する資源の持続可能な利用・管理が行われて初めて長期的な生存が可能になるからである。そして、このような資源の利用・管理は大字を単位として行われているという点が重要である。

① 低湿地の大字:下妻市堀籠

例えば、上述した低湿地の大字である、下妻市堀籠のイオンモール下妻店・カインズホーム下妻店は氾濫平野の水田及び自然堤防上の畑の転用によるが、集落中心から最も離れた耕地を宅地として開放したものである(図3)。大字の中で最も利便性の低い耕地を売却または貸与して現金収入を得たものと考えられる。また畑を多く含んでいたことから水田をなるべく温存しようとした意図があったかもしれない。

その逆に、集落に近い耕地(水田)での農地転用は極めて限定的であり、まとまった規模の水田が維持されている。

後述するように、台地と平野に跨がる大字と違って、低湿地の大字にはまとまった規模の樹林地・荒地等がほとんどない。また、わずかな自然堤防上は既存集落として利用されている。そのため、開発の機会は勢い生産地、すなわち攪乱に見舞われるリスクの高い低湿地に集中することになる。この場合重要なことは、攪乱のリスクをいかにして低減しようかということと、農業生産への悪影響を極力回避しつつ土地資産の運用が図れるかということである。前者は、立地選定や建築構造・建築工法が重要になってくるし、後者については、生産性の低い土地を有効活用していく視点が重要になるだろう。



図3 低湿地の大字における開発への挙動(下妻市堀籠・比毛)

② 平野と段丘に跨がる大字:石岡市上林・下林

一方、更新世段丘、山地斜面、谷底平野・氾濫平野段丘に跨がる石岡市上林(かみばやし)・下林(しもばやし)では集落に顕著な拡大はみられないが、山林(山地斜面)がゴルフ場として開発されているほか、下林東部の段丘上の灌木地・荒地(迅速測図による)の一部で面的な宅地化(事業所及び住居)がみられる(図4)。これらの開発には類似性が認められる。それは、いずれの開発も生産地ではなく山林や灌木地・荒地等の低未利用地若しくは相対的に生産性の低い土地を対象に行われたということだ。

確認はとっていないが、これらの山林・荒地は、上林・下林ともに当該大字に含まれる集落の入会林・入会地であったと考えられる。入会林・入会地はかつて農業生産に欠かせない資源とされてきたが、燃料革命や化学肥料の登場により利用価値が低下し、放置されるケースが増えている。こうした利用価値の低い土地を金銭的な価値に変換しつつ、生産地(主に水田)はしっかり温存するという、集団的な意思決定が介在したと思われる。

さてその結果、上林では大字内の山林のほぼすべてがゴルフ場(東筑波カントリークラブ)として開放され、残る面的な緑地は大字西部恋瀬川沿いの谷底平野・氾濫平野に展開する水田のみとなった。この水田を農地転用するという意思決定がなされない限り、この大字にもはや開発を受け入れる空間的余裕はない。上林に直面する恋瀬川右岸の大字柿岡では、県道7号線に沿って用途地域が指定され、その連担で上林区内の水田(市街化調整区域)にも事業所が建設され始めている。また、県道7号線が台地斜面にぶつかるあたり、鹿島神社の側に事業所(コンビニエンスストア等)が建設されている。今のところ上林地区の水田が大規模に転用される兆しはみられないが、そうなった時はこの大字が農業を完全に放棄した時である。また、台地と平野の際(山地斜面)に営まれている旧集落とゴルフ場との間に山林が残されているが、これは集落とゴルフ場とを隔てるいわば緩衝緑地として意図的に残されたものと考えられ、地形的な理由もあってやはり俄に開発されることはあるまい。一方、下林には谷底平野・氾濫平野の水田以外にもまとまった緑地が残されている。完新世段丘上の畑や樹林地である。今後もし開発の機会があるとしたら、それはこれらの、宅地への転換ポテンシャルが高い、緑地を対象として行われるであろう

う。規模の大きな大字にはこのようなスケールメリットあるいは冗長性(リダンダンシー)が認められ、伝統的な生産活動(農業)を維持しつつ余剰資産を運用に回すことが可能である。



図4 平地と段丘等に跨る大字における開発への挙動
(石岡市上林・下林)

4. 持続的な資源利用を支えるしくみ(生存戦略)の再構築～おわりにかえて

農業生産が続けられ、農村的土地利用が優占する大字においては、大字を単位として今後の地域経営を考えていくことは依然として重要な意味をもつであろう。それは、上述したような、持続的な資源利用を支えるしくみが大字を単位として今も継承され、土地利用における集団的な意思決定に反映されていると考えられるからである。

一方、今回は検証できなかったが、農業生産が行われなくなり、都市的土地利用が優占する大字では、大字を単位として今後の地域経営を考えていくことの意味は相対的に小さいかもしれない。このような大字では、もはや新たな開発を受け入れる空間的余地を残しているところはまれである。山林はおろか水田までもが開放しつくされて、土地利用は飽和の状態にある。また、かつては居住が避けられていたような、攪乱に見舞われるリスクが高い低湿地(後背湿地、谷底平野・氾濫平野等)も遍く宅地化されており、大字を単位として伝統的に培われてきた、持続

的な資源利用を支えるしくみは失われている(図5)

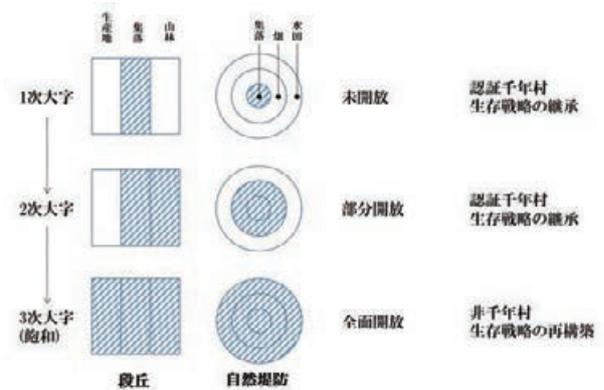


図5 大字と開発への挙動

こうした大字で新たに開発の機会があるとすればそれは再開発ということになる。しかし、この再開発の機会を捉えて、攪乱のリスクを軽減する敷地利用や建設方法を試みていくことは考えられてよい。また、人口減少や都市縮退の局面においてダウンゾーニングや逆線引き(市街化区域の市街化調整区域への編入)等の手段を通じて、かつての大字が有していたような、自然環境の構造に根ざした、攪乱への耐性を備えた土地利用に転換していくことも検討されてよかろう。持続的な資源利用を支えるしくみの再構築である。一口に大字といってもその実態は様々であり、人口の動態、産業構造、土地利用の状況、開発需要の動向等々の観点から、大字が置かれている状況に合わせて柔軟に対応していくべきであろう。

1. 概要

今回の調査地である筑波山周辺は関東平野の北東に位置し、近世まで関東と東北をつなぐ交通の中継地として栄え、近代以降は鉄道や高速道路などの主要な路線から外れた地域にある。このため、東京からほど近いにもかかわらず千年村的に良い意味で近代化の波に取り残された、ということができよう。同じような地域として、2014年に疾走調査を行った群馬県北部の利根川流域がある。そうすると、今回の調査地の千年村には古い集落構造が残っている可能性が高い。

また、これまでの調査地である山地や海沿など周辺環境の影響が強い千年村に対して、この地域の千年村は平地に離散配置されており、より一般的な姿を見ることができると期待した。

2. 千年村を疾走すると見えてくる不思議な風景

私が所属する東京都市大学福島研究室は、「見ただ目でわかる千年村」を切り口とし、千年村の見ただ目から集落構造を類推し、未来の建築設計に活かすことをテーマにしている。

今回の疾走調査では、最初に訪れた茨城県夷針郷/茨城県土浦市藤沢に不思議な風景を見ることができた。航空写真を見ると、この集落は東西を貫通する国道125号の両側に家が並ぶ典型的な道型の集落のように見える(写真1)。しかし、実際にこの道を歩いてみると道の左右で町並が異なっている(写真2)。写真の向かって左側(国道125号の北側)には道に大きな木々が面しており、家は道から奥まった所にあるためよく見えない。しかし、右側(国道125号の南側)には道に面した木々が少なく、家が道に面しているためよく見える。



写真1 茨城県土浦市藤沢周辺の航空写真



写真2 国道125号

玄関の位置と方角も道の左右で異なっている。左側は大きな門を持つ家が多く、その奥にある玄関は道路に平行で家の正面から入るようになっている(写真3)。それに対して右側は門を持つ家が少なく、玄関は道路に直行し家の側から入るようになっている(写真4)。通常の道型集落である商業集落や宿場町であれば、道の左右で町並や玄関の入り方は同じはずである。



写真3 国道125号の左側の家



写真4 国道125号の右側の家

また、この道は国道で交通量も多いにもかかわらず、歩いてみると家の門や塀にヒューマンスケールが残り、庭を花畑として開放しているなど植栽も豊かであった(写真5)。道の左右で町並が異なり、歩いてみると道に親密さがある、という体験は、最後に訪れた茨城郡玉余郷/茨城県小美玉市下玉里でも同様に得ることができた。



写真5 植栽豊かな庭

3. 「見た目」から集落の発生と変容を類推する

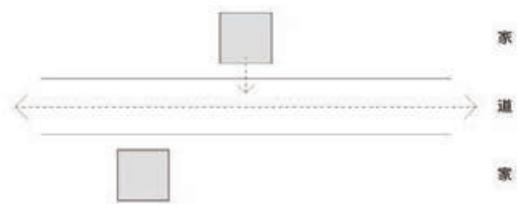
このような集落はどのようにしてできたのであろうか？まず、通常の間型集落である商業集落や宿場町の発生と変容の過程をダイアグラム化してみる。

〈道型集落(道起源型)の発生と変容の過程〉

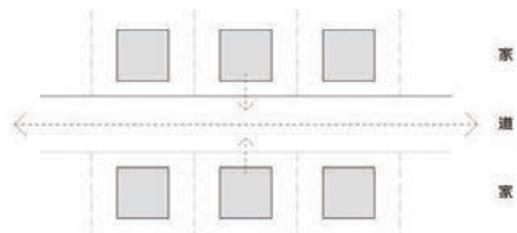
①最初に、行政機関などによって交通のために道が作られる。



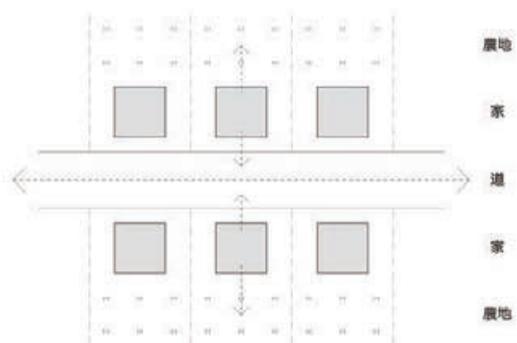
②その後、通過する人々を対象とした生業(飲食や宿泊など)の家が道の脇に建ち始める。この家は道から生業の糧を得るので、家は道の両側に同じ様に建つ。



③その場所が交差点などの交通の要衝や宿泊に適していた場合、道からの生業の糧が増加し、家は道の両側に隙間なく建ち並び、集落を形成する。



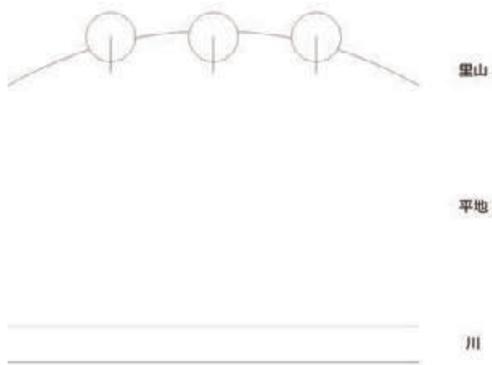
④社会構造の変化によって道路からの生業の糧が減少した場合、後背地を農地化して生業の糧を増やし集落を持続する。



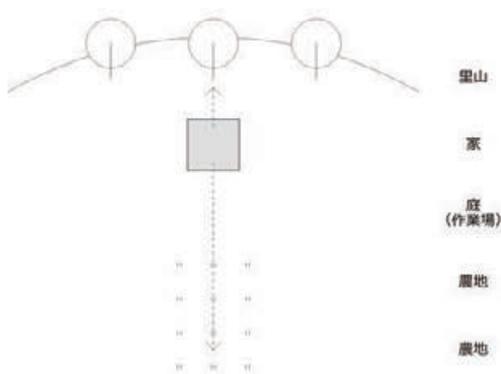
通常の間型集落は道の発生を起源としているため、左右は方位や周辺環境に関わらず同じ様な町並になる。次に、道の左右の町並が異なる集落の発生と変容をダイアグラム化してみる。

〈道型集落(家起源型)の発生と変容の過程〉

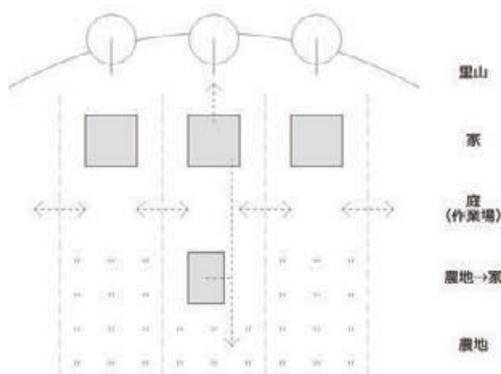
①最初に、里山と川という環境資源を持つ平地がある。



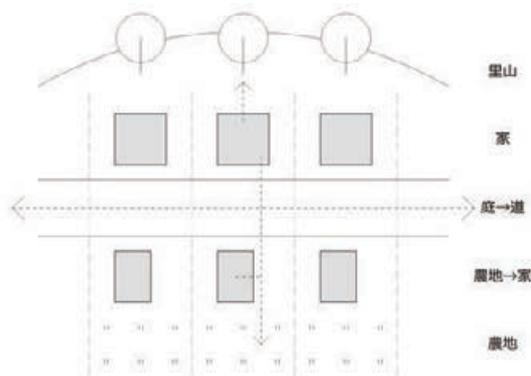
②その後、里山寄りに家を立て、平地に庭、川寄りに農地を作り、環境資源を生かして生存する。



③その場所の環境資源が豊かだった場合、同様な構成で家が建ち並び集落を形成する。また、庭を作業場として隣の家と協働し、庭の周りに作業小屋や分家が建ち始める。



④社会構造の変化によって集落内に道を通すことになった場合、集落内で唯一連続した空地である庭を道にする。



道の左右の町並が異なる道型集落は家の発生を起源としているため、左右は周辺の環境資源によって異なる町並になる。

疾走調査で得られた千年村の「見た目」から、集落の現在の構造だけでなくその起源の発生と変容の過程を類推してみた。もちろんこれは推論に過ぎず、多くの誤りを持っているだろう。しかし、このように通時的な視点を持って見ることにより、私たちは未来の千年村のあり方について歴史と連続して考えることができるようになる。

4. 千年村における「共用空間」の存在と現代の可能性

一見普通に見える道が、実は集落の協働の作業場からの転用であった事例として、神代雄一郎の調査で有名な京都府の漁村である伊根が挙げられる。急斜面に隣接し平地が少ない伊根では、かつて各家の庭だった土地をつなげて道に転用したといわれている。今回の茨城郡玉余郷/茨城県小美玉市下玉里でも、早稲田大学の学生の調査により、道を挟んだ両側の土地の表札が同じ名字であるため土地所有者が同一ではないか、という指摘があった(写真6)。



写真6 道に転用された協働の作業場

この道の元になったと思われる協働の作業場は、これまでの千年村にみられた入会地と同じ集落の「共用空間」であろう。入会地は、社会情勢の変化に対応して公民館や工場用地になっている例が多いが、今回の道という公共インフラへの転用は、「共用空間」の幅広さを表している。千年村における「共用空間」の多様な形態での存在は、その高い持続性の秘密の一つではないだろうか。それは、わたしのためでもみんなのためでもなく、わたしたち共同体のものである。ここで、現代の都市や建築空間を振り返ってみると、個人(プライベート)のための私用空間と行政(パブリック)のための公用空間はあるが、わたしたち(コモン)のための共用空間を感じる機会は少ない。このような千年村の「共用空間」の変容の柔軟さは、現代の都市と建築の新しいあり方を生み出す可能性を感じさせる。

茨城郡夷針郷の比定候補地だという土浦市藤沢(旧・藤沢村)を訪れる際、その東隣の土浦市大畑(旧・大畑村)の村社であった鷲神社へ立ち寄った。その鳥居前には土浦市消防団第32分団の詰所があり、壁面には大きな「土浦市防災マップ」が掲げられていた。



図1 鷲神社の鳥居前に建つ消防団第32分団詰所



図2 詰所壁面に掲げられた土浦市防災マップ

境内の倉庫には、奥には山車が収められ、手前に軽トラが置かれる。軽トラの荷台は祭礼用に設えら

れており、おそらくはこの軽トラが、現役の山車であろう。つまり渡御行列の変化＝祭礼のモータリゼーションを意味する。



図3 境内倉庫の山車新旧

訪問先のひとつである下妻市筑波島(旧・筑波村／月波郷の比定候補地)は、現在では隣接する平川戸(旧・平川戸村)や横根(旧・横根村)と家並みが連続しており、どこがムラ(旧村)の境目なのか明瞭に分かる景観ではなかった。たとえば当該地域をグーグルマップで表示すると、鹿島神社と赤城神社が、さらに拡大すると八雲神社がピンで表示されるが、それぞれどのムラに属する神社であるかは、一見したところ不明である。平凡社の『日本歴史地名大系 茨城県』をひもとけば、筑波村には旧村社の鹿島神社が、平川戸村には旧村社の八雲神社が、横根村には「赤城神社があった」と記されているから、これとようやくムラと神社との対応がわかる。そもそもムラの神社などは、そのムラの人々(氏子)を超えてその名を知らしめる必要がなかったであろうから、境内に由緒を記した看板を掲げる必要も実のところないのである。なぜ神社の説明板がないのかと訝しむのは、そ

のムラからすれば、外部者の戯言といえなくもない（ちなみに先述した土浦市大畑の鷲神社では、国選択・茨城県指定無形民俗文化財「からかさ万灯」が執り行われるので、境内にはとても立派な石造の説明板が建てられている）。ところが神社の説明板に頼らずとも、現地では意外な物件がヒントを示してくれていた。コミュニティセンターである。

今回の訪問では、たまたま先述した赤城神社から北上する道を歩いた。集落景観は、あたかも赤城神社から北へと連続するかのよう眼に映り、てっきり赤城神社が平川戸のムラの神社であると誤解した（より精確には、土居がオトナの一人として同行した学生グループは、そのように誤解させられた）のである。ところが赤城神社に隣接する「横根ふるさとコミュニティセンター」とあり、これは平川戸とは別のムラである。少々納得がいかないまま道を歩いていると、集落の中ほどで「平川戸コミュニティセンター」に当たり、その裏手に八雲神社を確認することができた。



図4 平川戸ふるさとコミュニティセンター
裏手の神社鳥居

なお筑波島には「コミュニティセンター」を名乗る施設がないようで、市の公式サイト上で検索しても、筑波島の公共施設は「集会所」なのか「公民館」なのか判然としない。「下妻市都市計画マスタープラン」（平成21年4月から20年間）と照らし合わせると、平川戸と横根は「2.大宝地域」に、筑波島は「3.騰波ノ江地域」に区分されている。この両者を分かつ境界線は、他の地域区分の齟齬を引き受けた結果であろう。

ともあれ、平川戸と横根には、伝統的な宗教施設に隣接して（あるいは、その一部に）地域住民が集まる施設があり、現在でもその場所性が継承されているのである……と、つい騙りたくなってしまうが、ベタな見方をすれば、もう他に空間がなかったであろう。この辺りの事情を突き詰めて明らかにするためには、具体的な土地の売買あるいは貸借関係を掘り下げる必要があるが、疾走調査でそこまで踏み込むことは無理であった。むしろこの問題は、当事者たちに引き受けてもらうしかない領域である。そこでやりとりされる語りは、どんなにポエティカルに響いても、きわめてポリティカルであることだけは確かである。

東日本と西日本。その風土の違いは古くから認識され、言及、考察されてきた。東日本と西日本の村の違いも、そうした比較論の一つである。とはいえ、村落を地域差・地域性として把握するアプローチは、一時期ほど盛んではないこともまた事実。以下、この問題に関する所感を覚え書き風書き記そう。

東日本と西日本の村落類型論としては、社会学者の福武直が『日本農村の社会的性格』(1949)で提唱した「同族結合」と「講組結合」が有名である。本家分家の上下関係をベースとした「同族結合」が東日本的類型であり、上下関係のないフラットな「講組結合」が西日本的類型となる、という見取図だ。この図式は、地域類型である以上に、先進地域＝「講組結合」／後進地域「同族結合」という発展段階論であり、磯田進「村落構造の二つの型」(1951)における「家格型」と「無家格型」という類型も、同様の主張である。

一方、民俗学・人類学プロパーでは、岡正雄の日本民族文化形成論の影響下、村落類型を発展段階というよりも地域差・地域性として把握する議論が主流であり、蒲生正男、江守五夫、住谷一彦などの分析は、東北日本を同族村落、西南日本を年齢階梯制村落とするところで大枠の一致をみた。

しかし後年、こうした類型は類型化を先行させるあまり、東日本でも西日本でも現実には多数派とはいえない村落構造を類型として代表させてしまった、という反省が提出されている。じっさい、現実の村落に輻輳する社会関係のどの部分を「村落構造」として抽出するかは単純な問題ではなく(同一の村落に同族関係と年齢階梯制とそれ以外の社会関係が重層することはザラにある)、村落類型の地域的把握という議論の枠組みそのものが停滞したのは、当然の成り行きともいえよう。

とはいうものの、各地の村落を歩き続けると、さまざまな「地域差」を実感することも事実である。福田アジオ『番と衆』(1997)は、関東と関西の村落景観を以下のようにまとめている。

集落形態において集村の姿を示し、それを構成する屋敷の個別性・独立性が弱いのが近畿地方村落の景観上の特色である。それにたいして、関東地方の村落は、集落景観としては小村であり、それを構成する個別屋敷は屋敷林、生け垣、塀、垣根で囲まれて、他の屋敷と区別しようとする傾向が顕著である。この景観上の特色に対応して、たとえば西では墓地が村落単位で設けられ、東では個別の墓地、特に屋敷墓がかつては一般的であったことや、西ではムラとして特定の場所に各家の野菜畑を集中させる傾向があり、東では屋敷内に野菜畑を持つこと、また、各家の苗代も、西では特定の場所に集中して設定され、東では個別農家ごとに自分の家の近くに設定している傾向があることも明らかになった。総じて、西の近畿地方村落は村落を構成する各家よりも、村落としての一体性、統一性を強調する社会であり、土地利用もムラとして配置し編成している。それにたいして東の関東地方村落は村落そのものよりも、個別の家・屋敷を強調する社会で、土地利用も個別の家が優先して編成されていると言える、その景観が語っているように判断される。

この所見にも当然異論がありうるが(たとえば、市川秀之「大和のムラ・近江のムラ」(2007)は、福田が「関西」の代表として取り上げる近江のムラは、必ずしも「近畿」標準ではないと指摘している)、しかし、大局的なところで、ムラの東西の景観差を良く表してい

るように思える。今回の筑波山周辺疾走調査でも、その感を深くした。今回最も印象深かったのは、どっしりとした長屋門の威容である。屋敷地も広く、石垣も立派で、その様相はさながら中世武士の館のようだ。じっさい、武家の末裔という伝承も聞かれた。新治郡巨神郷の来栖地区ではお話をうかがった来栖家は、もともと佐竹氏の家臣で、佐竹氏の秋田転封以後もこの地に残り代々来栖神社の神主を務め、現当主は50代目になるという。関西の村に劣らない古い歴史を誇るムラを発見できたことは、個人的には今回の収穫の一つである。

といいつつ、恥ずかしながら告白すると、「東の千年村」に比すべき「西の千年村」の調査実績を、関西班は未だ有していない。このことは、千年村を考えていく上で意外と大きな問題だろう。そんなわけで、遅ればせながら河内国の千年村疾走調査を計画中有である。だが、これまで積み上げられてきた疾走調査のスタイルが通用するのかがまた問題である。千年はもちろん二千年に届かんとする開発の歴史、千年村が連続的に分布するという分布密度の濃さ、都市化・郊外住宅地化の進展……、これらの特徴は、「西の千年村」を疾走調査から補足する上で、少なからず困難をもたらすように予想される。

ともあれ、まずはやってみるほかない。諸方面からの御助力をお待ちする次第である。



立派な長屋門(新治郡巨神郷)



50代続くという来栖家の母屋(新治郡巨神郷)



来栖家で聞き取りの様子(新治郡巨神郷)

第9章 付記

9-1. 2016年度参加者

2016年度霞ヶ浦周辺地域疾走調査については以下の通りである。

■教員・調査協力者

石川初(環境情報学/慶応義塾大学大学院教授)
霜田亮祐(造園学/千葉大学大学院准教授)
高橋真治(プラクティカルアドバイザー)
高橋大樹(千葉大学 木下剛研究室OB)
土居浩(民俗学・文化地理学/ものづくり大学准教授)
中谷礼仁(歴史工学/早稲田大学教授)
福島加津也(建築家/東京都市大学講師)
元永二郎(ソフトウェア技術者)
Noemi Basso(早稲田大学助教授)

■学生

【石川初研究室/慶應義塾大学】

貫洞聖彦・平本真理・吉田桃子・稲田玲奈(学部生)

【木下剛研究室/千葉大学】

相原雄太・金盛晋也・近藤真・永井朝樹(大学院生)
五十嵐早紀・河野智己・北野美里(学部生)

【霜田亮祐研究室/千葉大学】

藤田原野(学部生)

【中谷礼仁研究室/早稲田大学】

Jon Alvarez・田熊隆樹・神保洋平・太田紀子・木村真拓・鈴木登子・鈴木明世・高野泰幹・松木直人(大学院生)
石坂駿・甲斐貴彬・蔣一悠・杉山祐太郎・渡邊慧子(学部生)

9-2. 2017年度参加者

2017年度筑波山周辺地域疾走調査については以下の通りである。

■教員・調査協力者

石川初(環境情報学/慶応義塾大学大学院教授)
菊地暁(民俗学/京都大学人文科学研究所助教授)
木下剛(造園学/千葉大学大学院准教授)
高橋真治(プラクティカルアドバイザー)
高橋大樹(千葉大学 木下剛研究室OB)
土居浩(民俗学・文化地理学/ものづくり大学准教授)
中谷礼仁(歴史工学/早稲田大学教授)
福島加津也(建築家/東京都市大学講師)
元永二郎(ソフトウェア技術者)

■学生

【石川初研究室/慶應義塾大学】

伊藤隼平・西野翔・平本真理(大学院生)
稲田玲奈・太田小夏・阿部薫子・加藤里菜・栗川開(学部生)

【木下剛研究室/千葉大学】

金盛晋也・近藤真・永井朝樹・北野美里(大学院生)
佐藤円・介川紗綾・武田奈緒(学部生)

【霜田亮祐研究室/千葉大学】

笠野雅敬(学部生)

【中谷礼仁研究室/早稲田大学】

万長城・木村真拓・鈴木明世・鈴木登子・高野泰幹・松木直人・石坂駿・甲斐貴彬・蔣一悠・杉山祐太郎(大学院生)
荻野智樹・豊田遥・松本悠里・森一之助(学部生)

9-3. 巻末資料

〈2016年度〉

- ①色別標高図
- ②土地条件図
- ③地形分類図
- ④土壌図

〈2017年度〉

- ⑤色別標高図
- ⑥植生図
- ⑦地形分類図
- ⑧土壌図

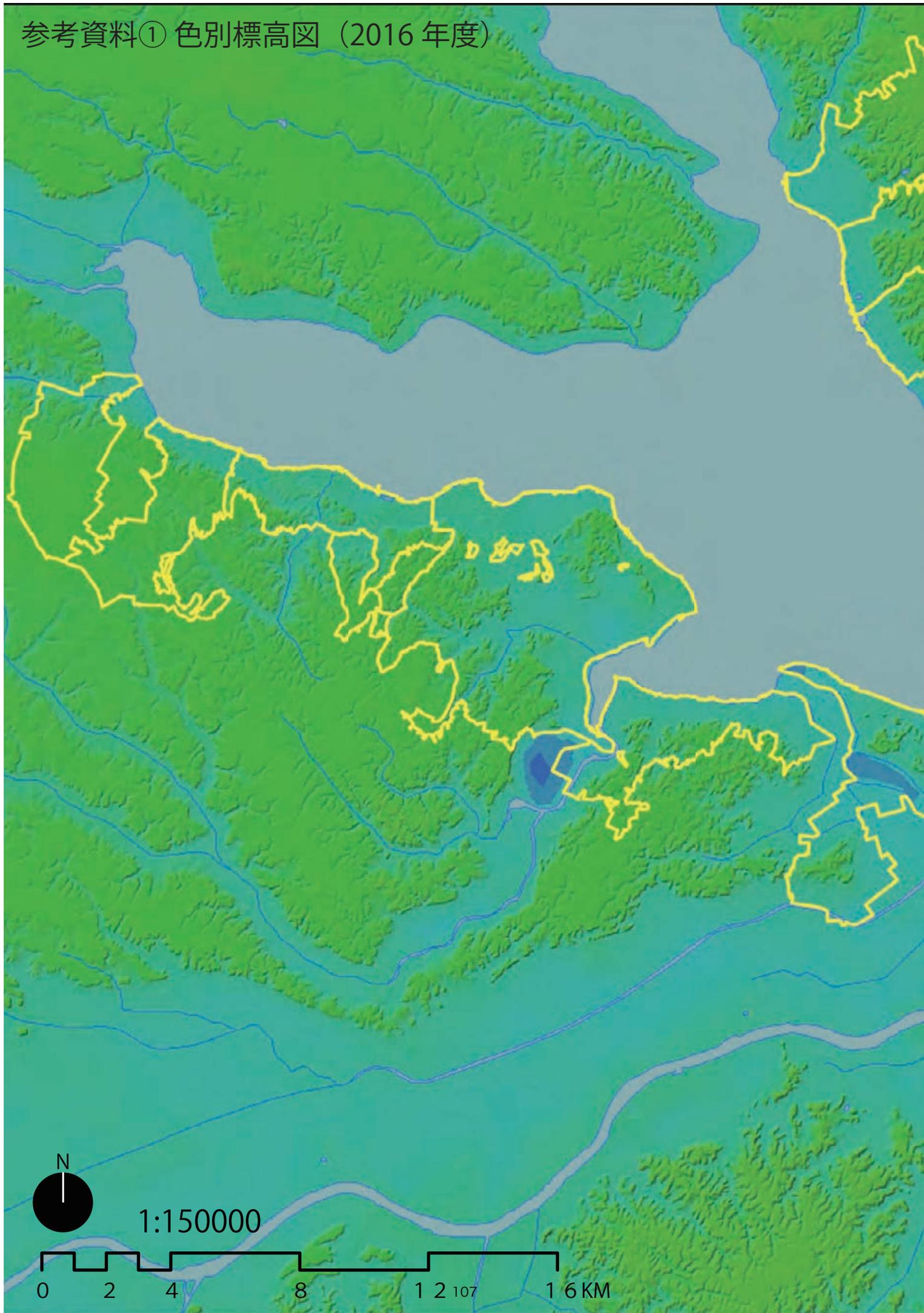
⑨野帳の凡例

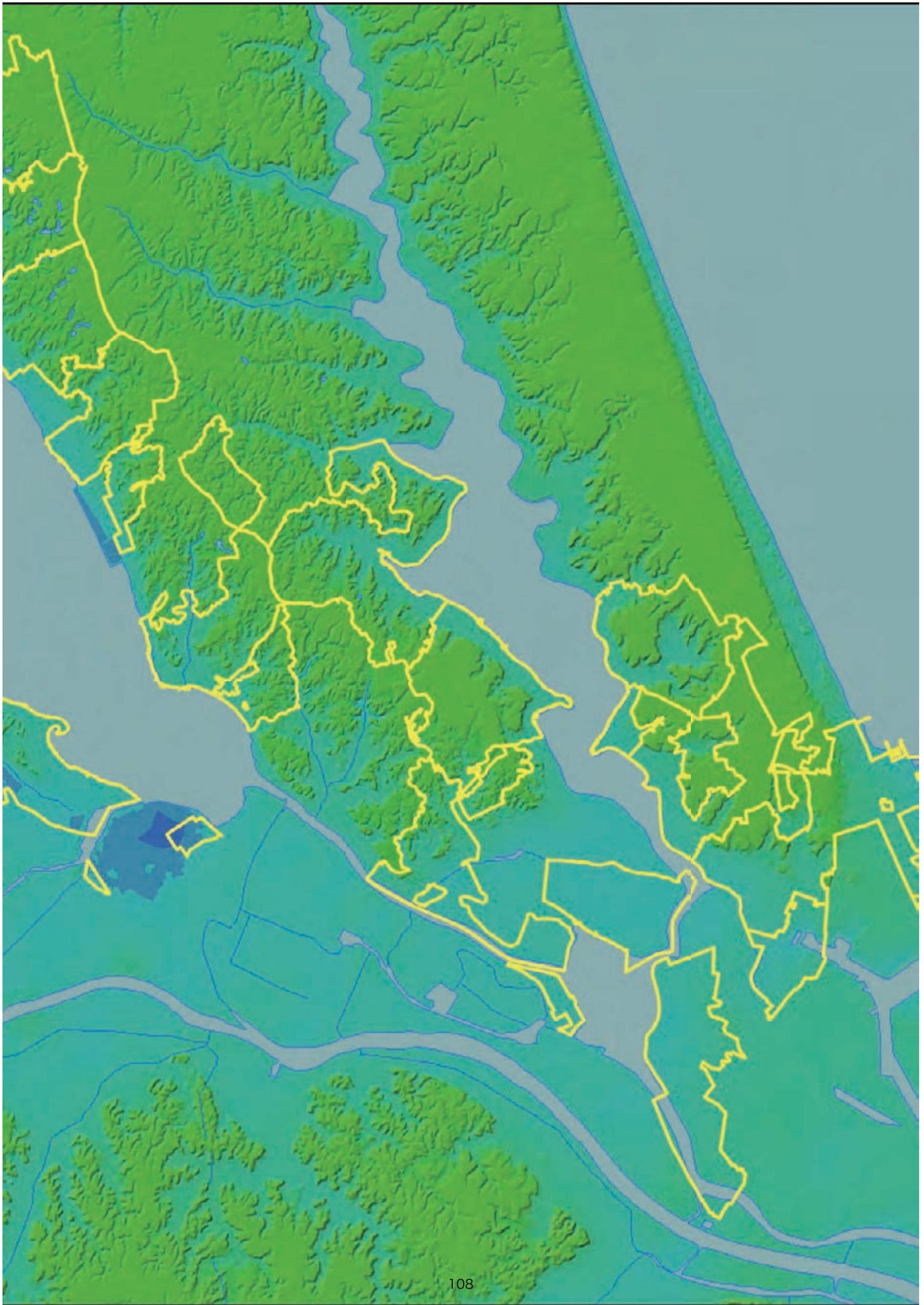
(次ページより)

9-4. 謝辞

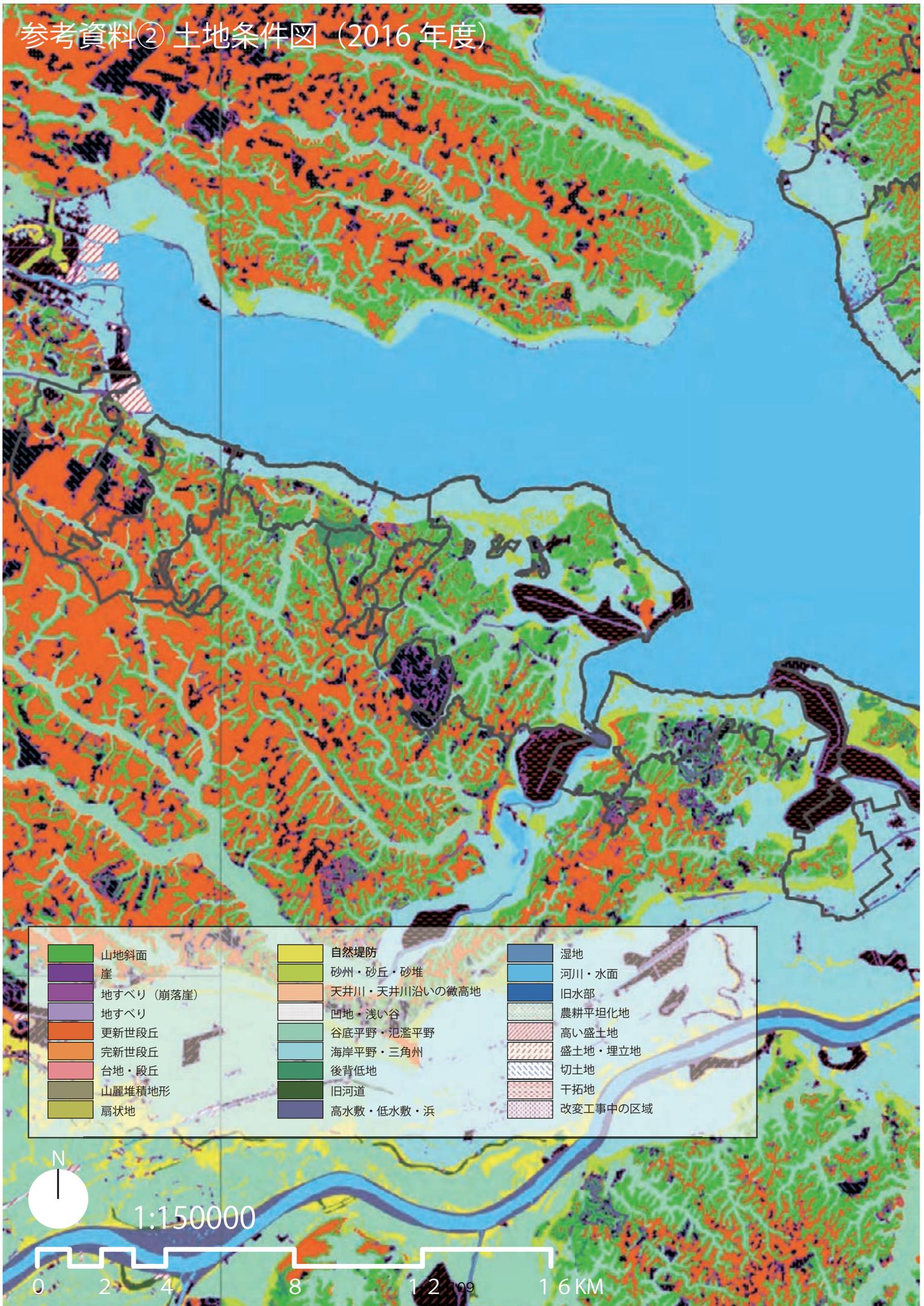
霞ヶ浦周辺地域および筑波山周辺地域を悉皆調査するにあたり、調査対象地である29か所の地域にお住まいの方々には大変お世話になりました。心より感謝致します。

参考資料① 色別標高図（2016年度）





参考資料② 土地条件図 (2016年度)

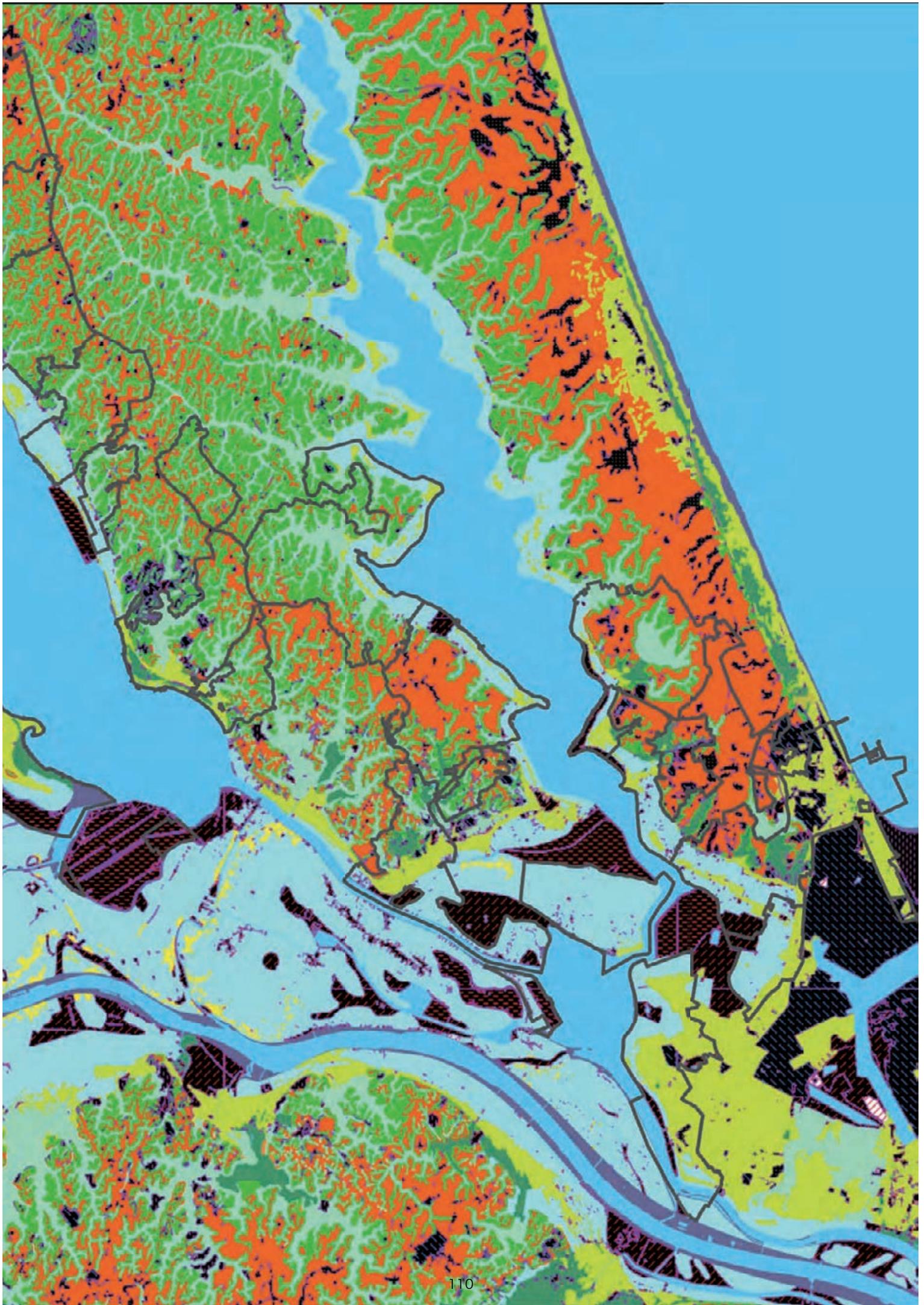


	山地斜面		自然堤防		湿地
	崖		砂州・砂丘・砂堆		河川・水面
	地すべり (崩落崖)		天井川・天井川沿いの微高地		旧水部
	地すべり		凹地・浅い谷		農耕平坦化地
	更新世段丘		谷底平野・氾濫平野		高い盛土地
	完新世段丘		海岸平野・三角洲		盛土地・埋立地
	台地・段丘		後背低地		切土地
	山麓堆積地形		旧河道		干拓地
	扇状地		高水敷・低水敷・浜		改变工事中の区域

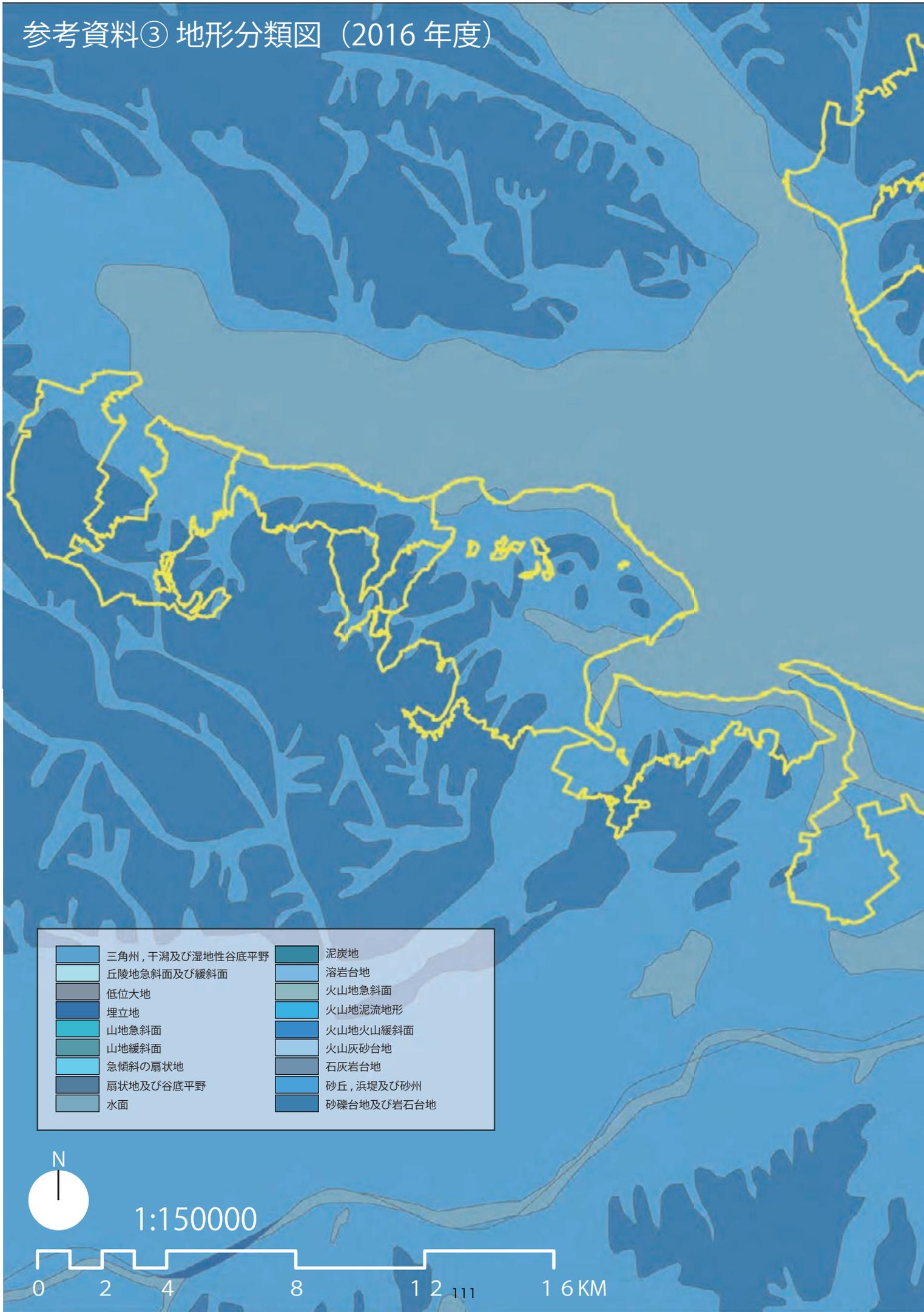


1:150000





参考資料③ 地形分類図 (2016 年度)



	三角州, 干潟及び湿地性谷底平野		泥炭地
	丘陵地急斜面及び緩斜面		溶岩台地
	低位大地		火山地急斜面
	埋立地		火山地泥流地形
	山地急斜面		火山地火山緩斜面
	山地緩斜面		火山灰砂台地
	急傾斜の扇状地		石灰岩台地
	扇状地及び谷底平野		砂丘, 浜堤及び砂州
	水面		砂礫台地及び岩石台地

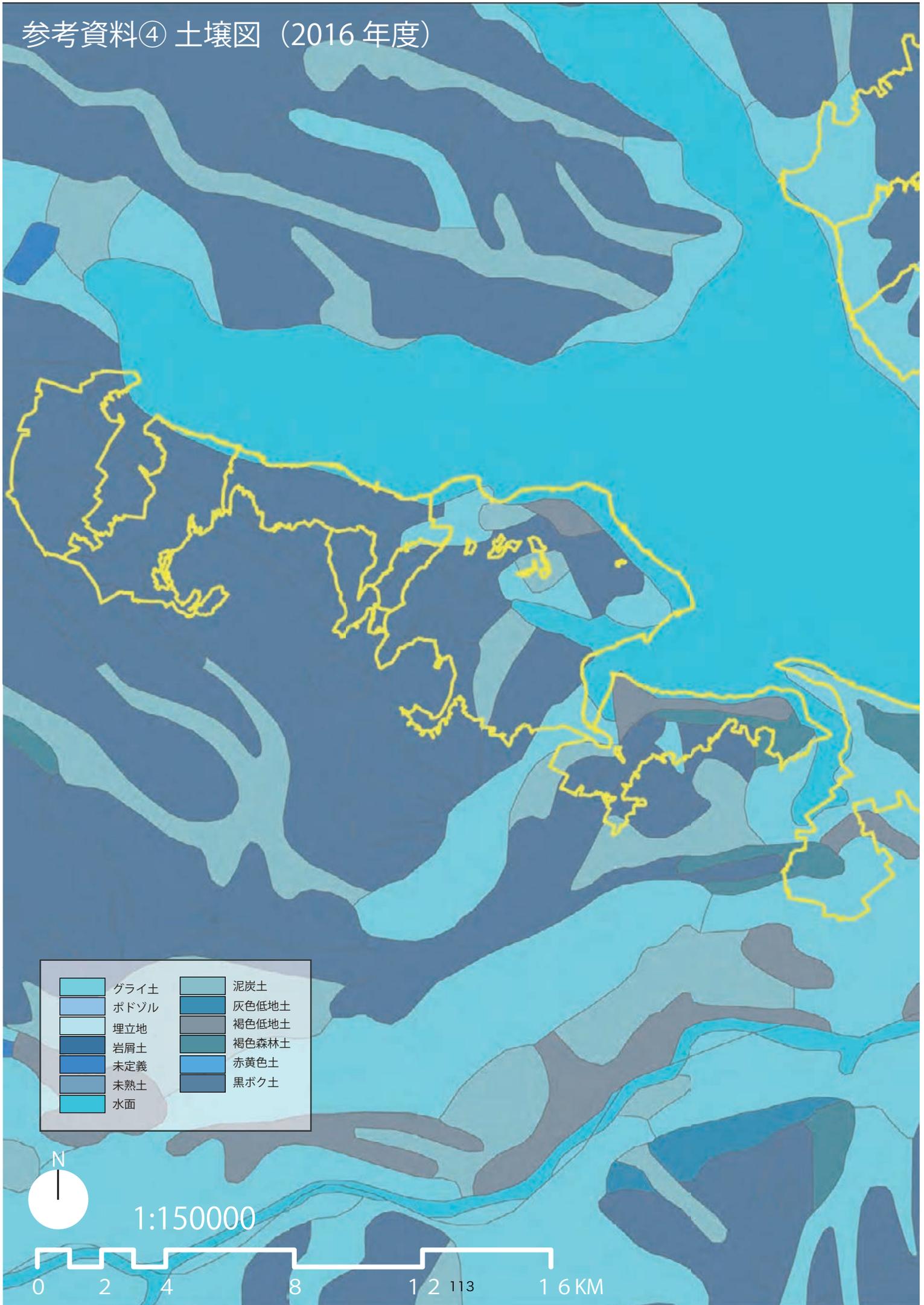


1:150000





参考資料④ 土壤図 (2016 年度)



	グライ土		泥炭土
	ポドゾル		灰色低地土
	埋立地		褐色低地土
	岩屑土		褐色森林土
	未定義		赤黄色土
	未熟土		黒ボク土
	水面		

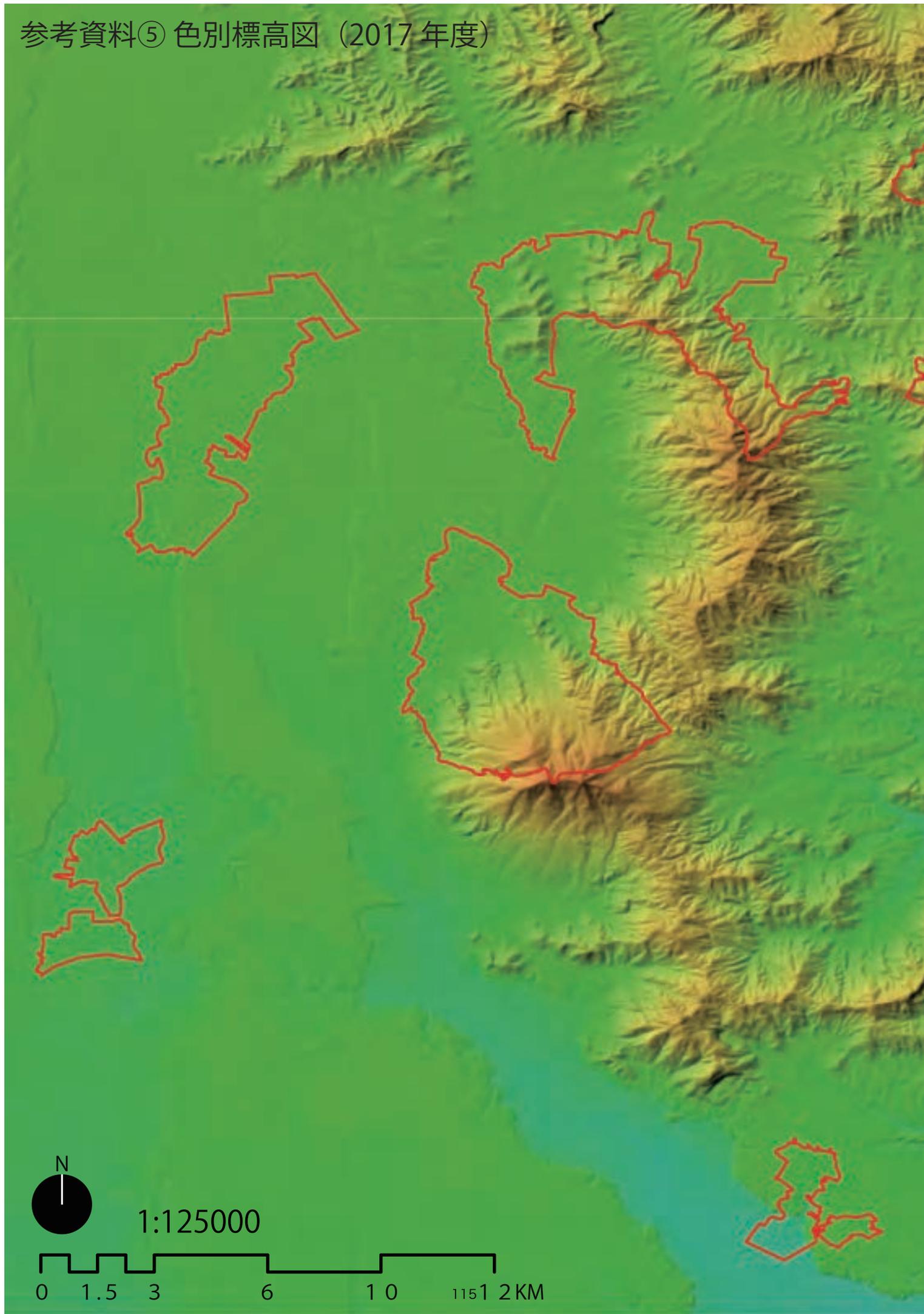


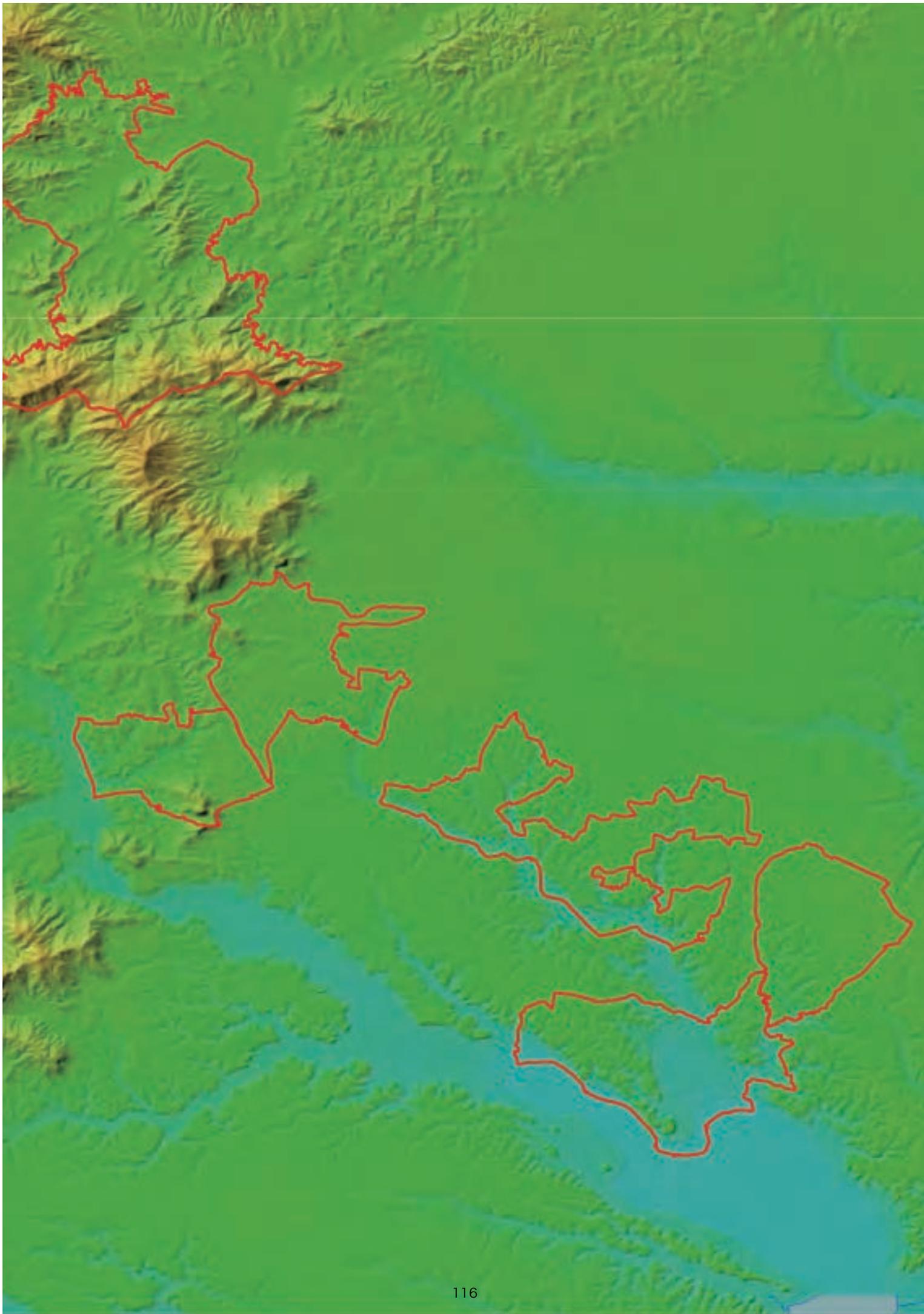
1:150000



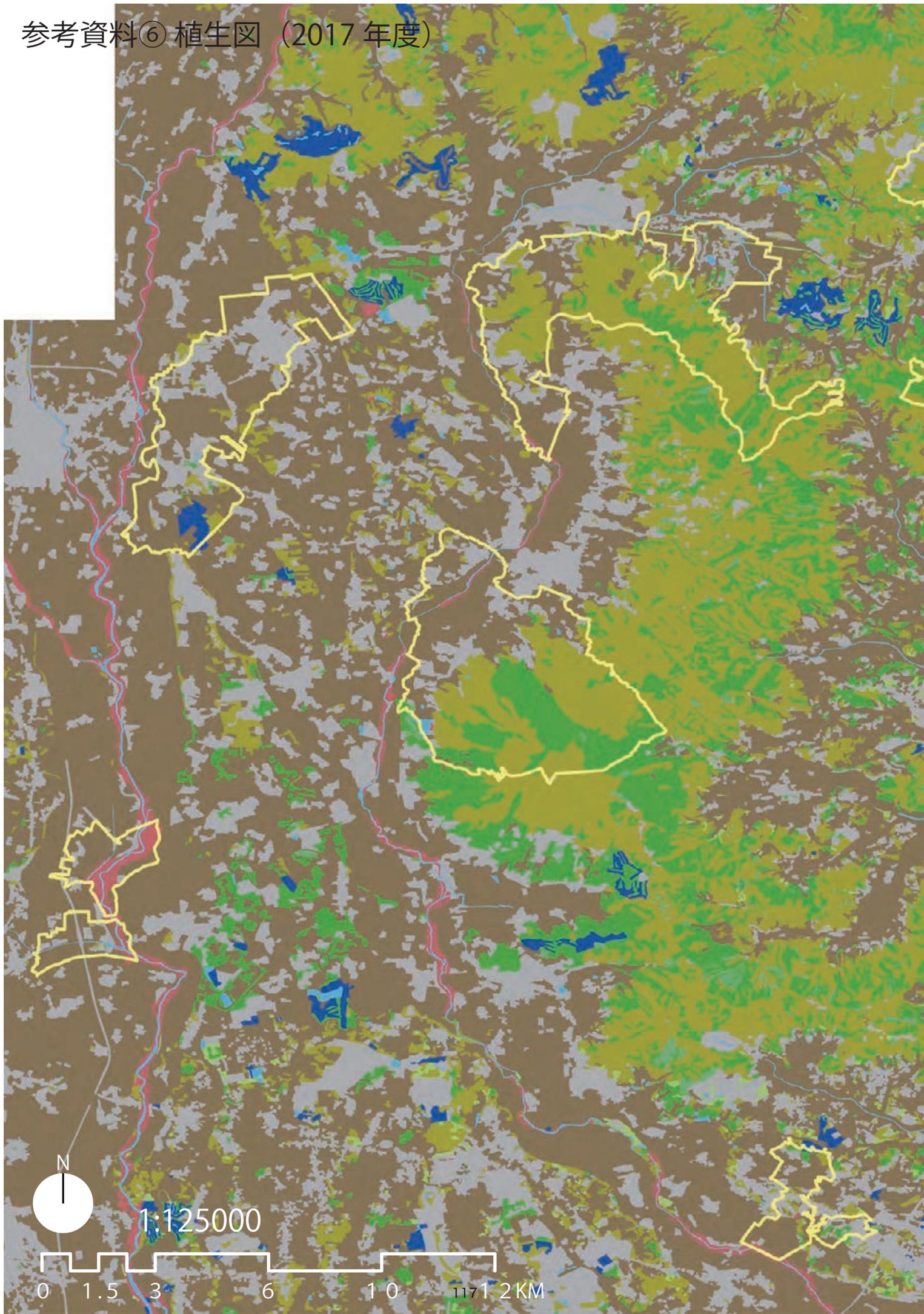


参考資料⑤ 色別標高図 (2017年度)



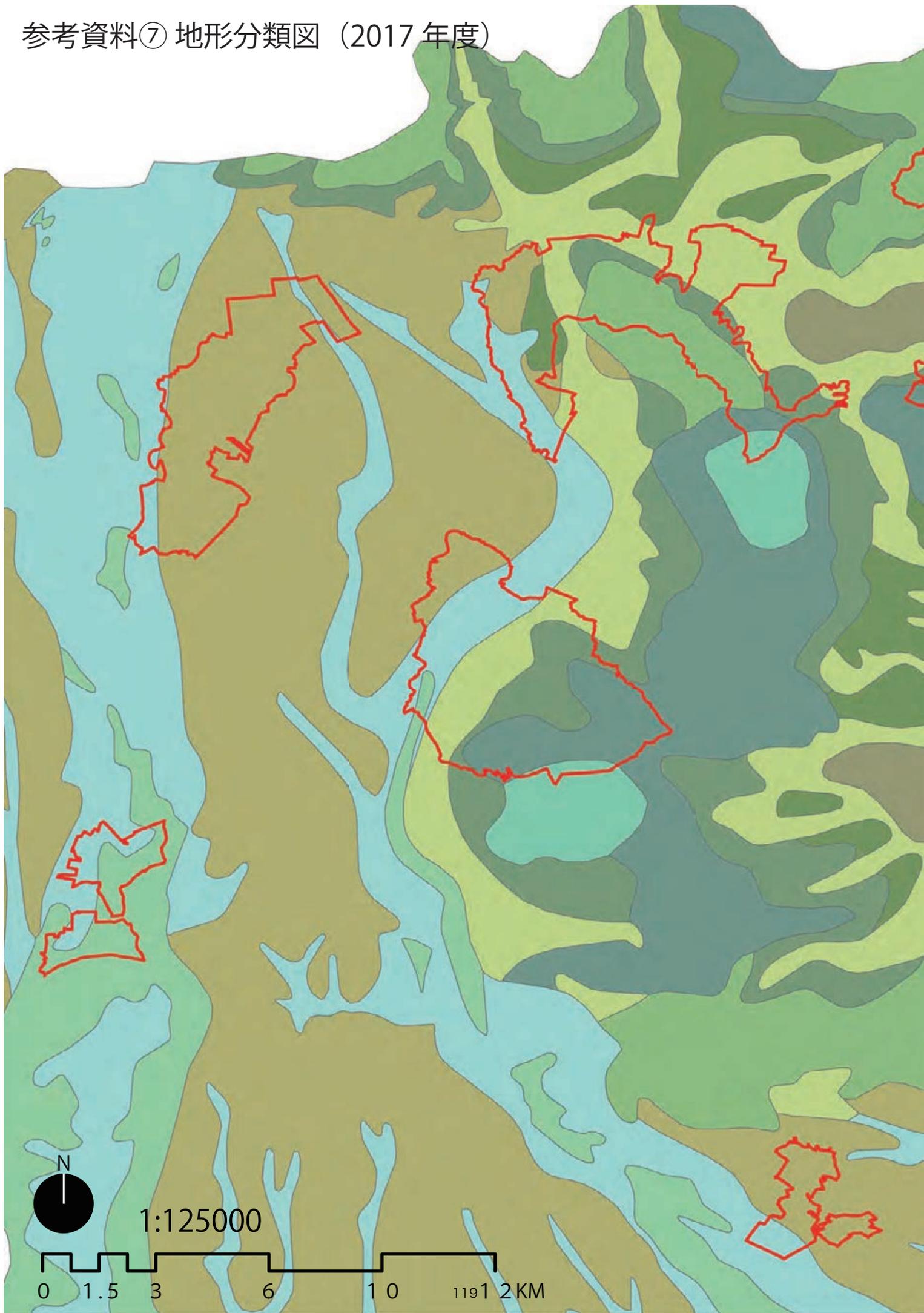


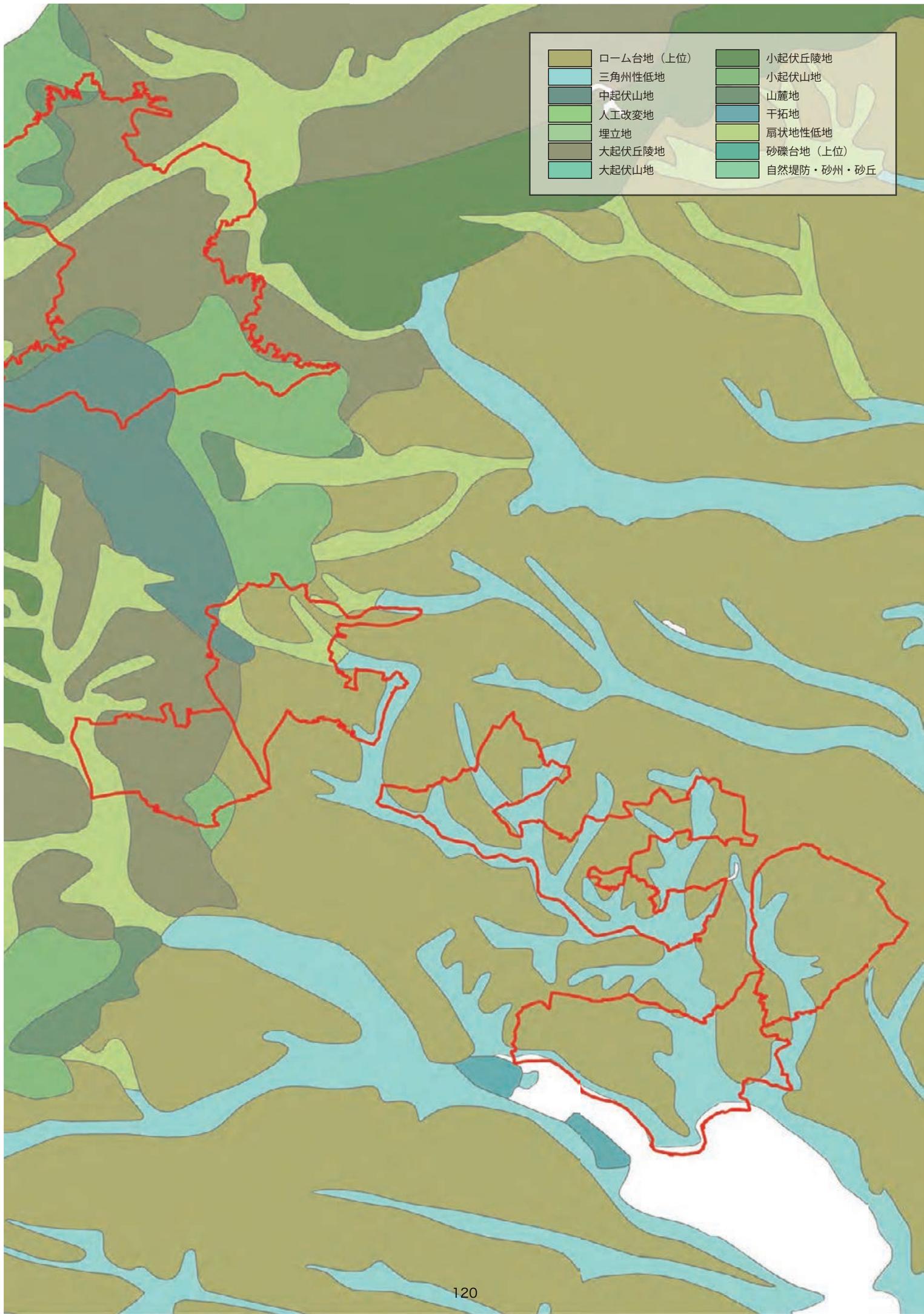
参考資料⑥ 植生図 (2017年度)



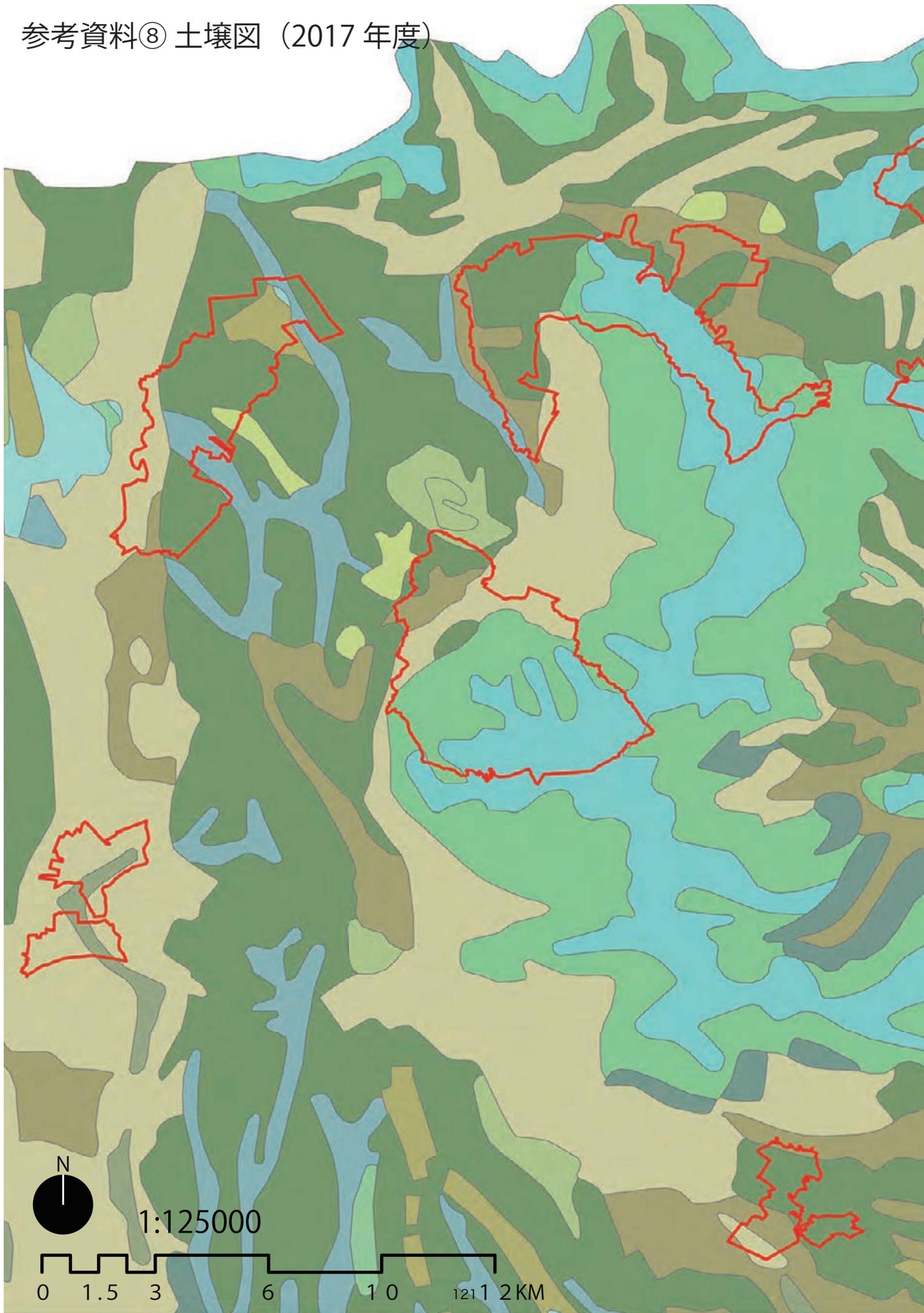


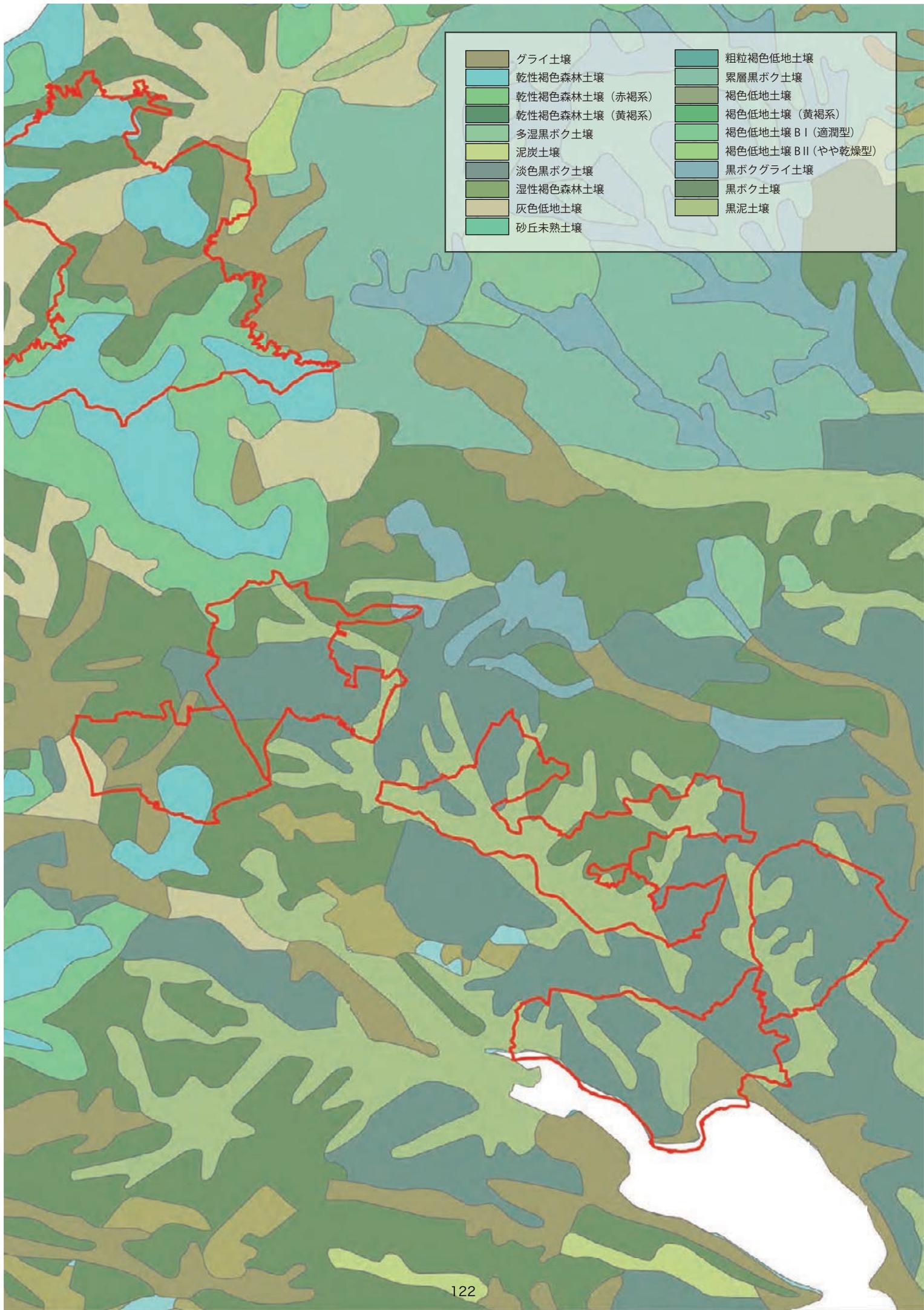
参考資料⑦ 地形分類図 (2017年度)





参考資料⑧ 土壤図 (2017 年度)





[概要]

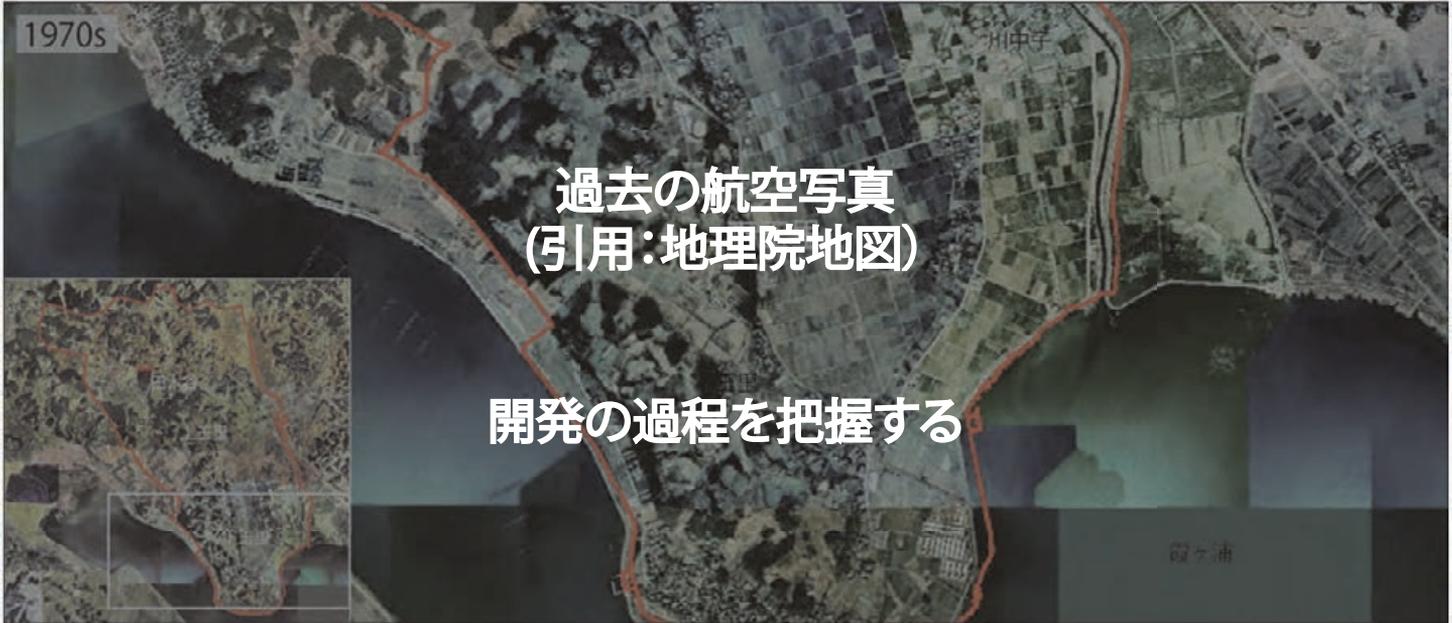
●田余郷について(『角川日本地名大辞典』より)

平安期に見える郷名。「和名抄」常陸国茨城郡十八郷の一つ。按武天皇が休んだときに清井を掘らせた。そして「能」が「能」になり、能によりて、里の名を、今、田余と謂ふ」とあり、地名説話が語られている。(参考『角川日本地名大辞典』より)

郷、現在の市町村の概要

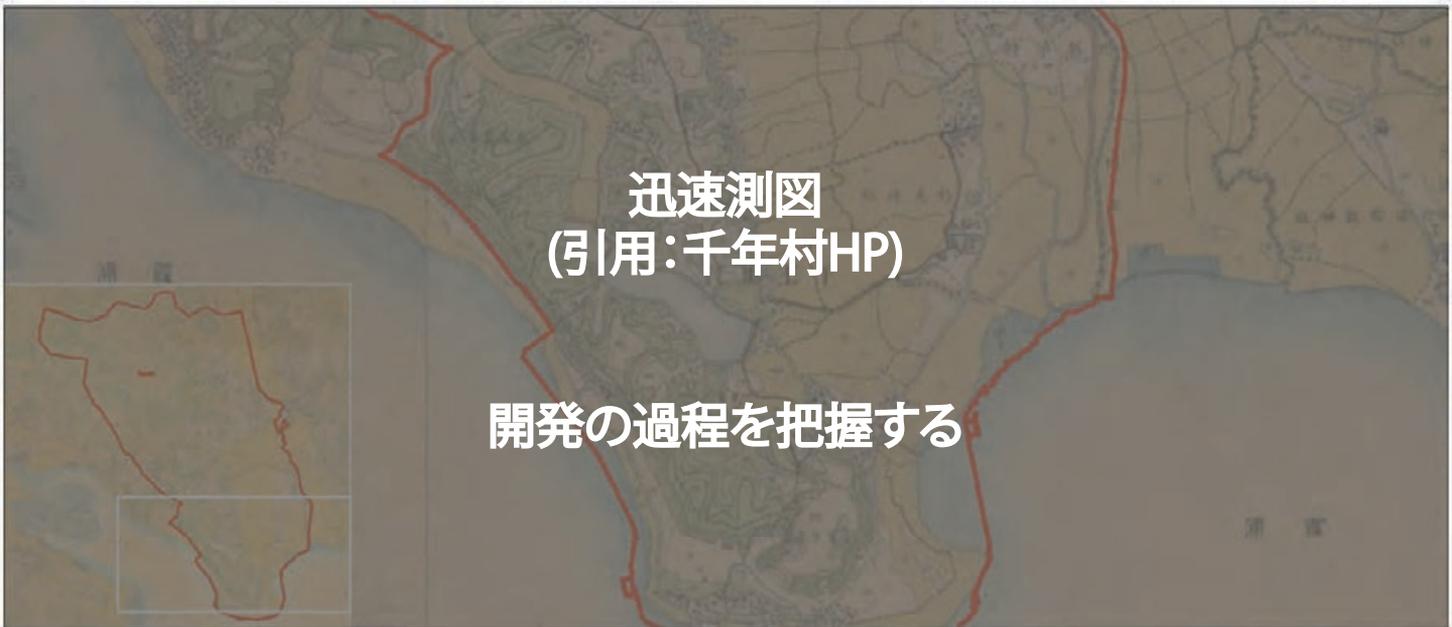
(引用:角川日本地名大辞典等)

明治30年～現在の行有郡の自治体名。田余村、玉川村が合併して成立。2004年(平成16)3月27日、東茨城郡小川町・美野里町・新治郡玉里村が合併し、小美玉市が発足。(『Wikipedia』より)



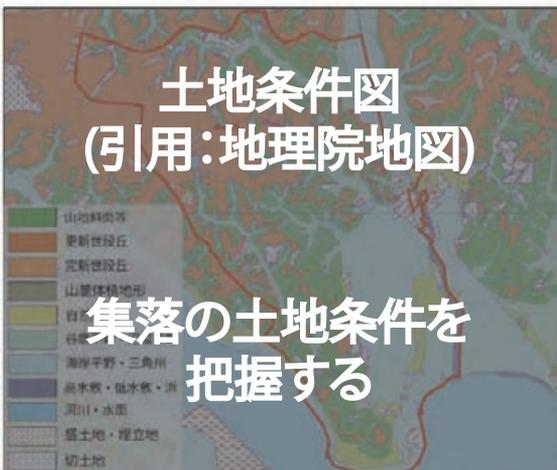
過去の航空写真
(引用:地理院地図)

開発の過程を把握する



迅速測図
(引用:千年村HP)

開発の過程を把握する



[野帳作成者による見どころ]

- ・霞ヶ浦に面した下玉里では自然堤防上や台地際部に集落が立地しており、その形態は現在と迅速図を比較しても大きな変化はない。
- ・田余郷全域で古墳(多くが5～6世紀のもの)が多く見られる。標準地図に記載されているものを含めて約15箇所の古墳があり、鳥居が建てられた。
- ・迅速図では池である場所が現在では水田として利用されている場所があり、土地利用変化の痕跡を見つけた。
- ・上玉里や田木谷では迅速図の時代から現代まで変わらず段丘上に家が立地し、谷戸に水田が分布しているという形態が保たれている。

野帳作成者による見どころ



[断面図]

寺社は基盤地図とGoogle mapをもとにプロット。

対象地の断面図

調査メモ用

○環境的特徴および興味

○共同体的特徴および興味

各視点の分析

○建築・集落構造的特徴および興味

○その他の視点(交通等)に基づく特徴および興味

○この村を一言で表すと

調査メモ用

2018年3月31日 発行

2016-2017年度霞ヶ浦・筑波山周辺地域疾走調査報告書

著作・編集

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース
環境造園領域 都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース
環境造園領域 風景計画学研究グループ 霜田亮祐研究室

東京都市大学 工学部 建築学科 建築計画 福島加津也研究室

慶応義塾大学 環境情報学部 石川初研究室

ものづくり大学 建設学科 土居浩

京都大学 人文科学研究所 菊地暁

元永二郎

高橋真治

高橋大樹

発行

千年村プロジェクト

関東地域調査拠点

早稲田大学理工学術院 創造理工学部 建築学科 中谷礼仁研究室

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1 55N-8-9

Tel.03-5286-2496

※本報告書は文部科学省科学研究費基盤研究（B）

「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」
(26289224)の研究助成により製作された。
